

土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書

岐阜

5 万分の 1

平成 24 年 3 月

国土交通省 国土政策局 国土情報課



# 土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「岐阜」

## 目 次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	9
3.1	地形概説	9
3.2	地形細説	11
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	18
3.4	地形と災害及び保全との関係	21
4	土地利用の変遷の概要	22
4.1	過去の土地利用状況の概要	22
4.2	土地利用変遷の概要	25
5	調査地域の災害履歴概要	30
5.1	災害履歴概説	30
5.2	災害履歴詳説	34
6	調査成果図の見方・使い方	48
6.1	地形分類図	48
6.2	土地利用分類図	51
6.3	災害履歴図	51
6.4	成果図面の使い方	52
7	引用資料及び参考文献	54
7.1	引用資料	54
7.2	参考文献	57

資料 災害年表

調査成果図 人工地形及び自然地形分類図  
土地利用分類図（第1期、第2期）  
災害履歴図（水害・土砂災害、地震災害、地盤沈下）



はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「岐阜」図幅の調査成果は、中部圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の最初の成果として、平成23年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課



## 1 調査の概要

### 1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

### 1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺 5 万分 1 の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

#### (1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和 20 年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

#### (2) 本調査による調査成果

##### ① 土地状況変遷情報

###### i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあっては改変前の自然地形を復元し分類している。

###### ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

###### iii. 土地利用分類図（2 時期分）

明治・大正期（現在から概ね 120 年前）と昭和 40 年代（同概ね 50 年前）の 2 時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

##### ② 災害履歴情報

###### i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集し

たものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

### 1.3 調査実施体制

#### (1) 地区調査委員会

委員長

海津 正倫 奈良大学 文学部 教授 (名古屋大学 名誉教授)

委員

(学識経験者)

藤本 潔 南山大学 総合政策学部 教授

堀 和明 名古屋大学 大学院環境学研究科 准教授

(関係県・政令市)

河隅 彰二 愛知県 地域振興部 土地水資源課 課長

桐山 敏通 岐阜県 都市建築部 都市政策課 課長

堀田 俊幸 名古屋市 緑政土木局 企画経理課 主幹

#### (2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

株式会社 地域開発コンサルタンツ

実施管理

株式会社 パスコ

## 2 調査地域の概要

### 2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「岐阜」の全域、北緯35°20′～30′、東経136°45′～137°00′（座標は日本測地系<sup>\*</sup>）、岐阜県南部、愛知県北西部にまたがる面積約419.7km<sup>2</sup>の範囲である。図2-1に本図幅の位置図を示す。



図 2-1 調査位置図

### 2.2 地域の行政概要

本図幅に関する市区町村は、岐阜県の7市4町（岐阜市、関市、羽島市、美濃加茂市、各務原市、可児市、山県市、羽島郡岐南町、羽島郡笠松町、加茂郡坂祝町、加茂郡富加町）、愛知県の3市2町（一宮市、犬山市、江南市、丹羽郡大口町、丹羽郡扶桑町）である（図2-2、表2-1）。

<sup>\*</sup>世界測地系(日本測地系2000)では、35°20′11.5″～35°30′11.5″N、136°44′49.4″～136°59′49.3″Eの範囲。

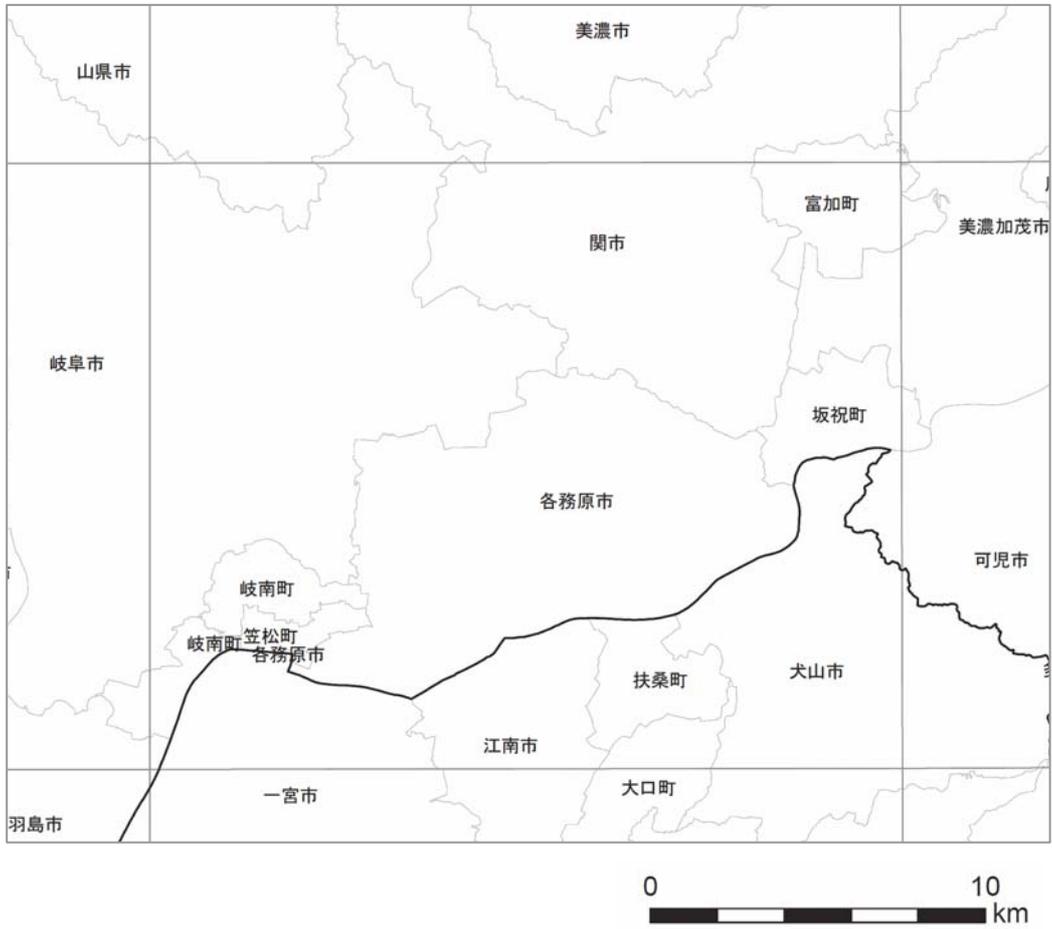


图 2-2 関係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
	ha	ha	世帯	人
岐阜県				
岐阜市	10,660	20,289	161,718	413,136
関市	6,550	47,284	32,212	91,418
羽島市	50	5,364	22,707	67,197
美濃加茂市	970	7,481	19,801	54,729
各務原市	8,780	8,777	51,961	145,604
可児市	360	8,760	34,768	97,436
山県市	490	22,204	9,731	29,629
羽島郡岐南町	790	790	8,971	23,804
羽島郡笠松町	830	1,036	7,840	22,809
加茂郡坂祝町	1,170	1,289	3,083	8,361
加茂郡富加町	1,250	1,682	1,741	5,516
愛知県				
一宮市	2,170	11,391	135,837	378,566
犬山市	4,360	7,497	27,359	75,198
江南市	1,940	3,017	35,768	99,730
丹羽郡大口町	490	1,358	7,723	22,446
丹羽郡扶桑町	1,120	1,118	12,161	33,558
計	41,970	149,337	573,381	1,569,137

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。

2. 行政面積は国土地理院「平成 23 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 23 年 10 月 1 日現在）による。

3. 人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口集計結果による。

## 2.3 地域の特性

### (1) 沿革

本図幅の地域は、旧美濃国と尾張国に属し、明治4（1871）年廃藩置県により、岐阜県、犬山県が設置された。同年、犬山県は名古屋県に統合され、明治5（1872）年に改称して愛知県となった後、額田県を編入してほぼ現在の県域が確定した。また、岐阜県は、当初旧美濃国のみであったが、明治9（1876）年、旧飛騨国の地域が編入され、現在の岐阜県となった。

江戸時代には、本図幅内をほぼ東西に五街道の一つである中山道が通っており、太田宿（現美濃加茂市）、鶯沼宿（現各務原市）、加納宿（現岐阜市）が宿場町として栄えた。

明治以降、東京－京都を結ぶ鉄道建設計画として中山道ルートと東海道ルートの両案が検討されたが、名古屋－岐阜－大垣を結ぶルートの整備が優先されることとなり、明治22（1889）年には現在の東海道本線が全通した。本図幅内の旧中山道沿いでは、高山線として大正時代に鉄道整備が進められ、大正9（1920）年には岐阜駅－各務原駅間が開業、翌年の大正10（1921）年には各務原駅－美濃太田駅間が延伸開業した。現在はJR高山本線として、岐阜・名古屋と富山間を結んでいる。また、高山線と並行する形で各務原鉄道（後に現在の名古屋鉄道と合併）が岐阜と各務原を結ぶ路線を、大正末期から昭和初期にかけて整備し、現在は名古屋鉄道各務原線として運行されている。

これらの路線は、太平洋戦争までは各務原市内に陸軍各務原飛行場などへの交通路ともなっていたが、現在ではJR高山本線、名鉄各務原線とも、岐阜・名古屋への通勤・通学路線として利用されている。

### (2) 気候

岐阜の気候を1981～2010年の平年値（表2-2）からみると、年平均気温は15.8℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は0.5℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は33.0℃となり、おおむね太平洋沿岸気候であるが、海岸沿いの地域比べ、冬寒く夏暑い内陸型気候も持ち合わせている。

年降水量は1,827.5mmで、月降水量は3月から10月にかけて100mm/月を超え、梅雨期の7月に261.6mmで極大となる。月降水量の極小は12月の58.0mm/月で、12月～2月の降雨は他の月に比べ少ないものの、名古屋と比較すると多く、冬型気圧配置時に雨・雪の日が多いためと考えられる。

風向は、8月を除き北西ないし西風が卓越し、風速は3、4月が最大で月ごとの変動は大きくないが、いずれの月も2m/sを超えている。また、年間日照時間は2,085.1時間で春期、盛夏に多いが、月ごとの差はそれほど大きくなく、各月とも150時間/月を下回ることはない。

表 2-2 岐阜の気候表（1981～2010 年の平年値）

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1990 ～2010	1981 ～2010
資料年数	30	30	30	30	30	21	30
1 月	67.0	4.4	8.8	0.5	2.4	北西	160.3
2 月	82.1	5.1	10.0	0.9	2.7	北西	163.6
3 月	143.0	8.6	13.7	3.9	2.9	北西	188.3
4 月	161.2	14.4	19.8	9.3	2.9	北西	196.0
5 月	204.7	19.0	24.2	14.2	2.7	西北西	199.0
6 月	245.3	22.8	27.4	19.0	2.5	西	159.4
7 月	261.6	26.5	31.0	23.0	2.4	西	167.0
8 月	148.9	28.0	33.0	24.3	2.6	南南西	202.2
9 月	237.3	24.1	28.8	20.4	2.4	西北西	157.8
10 月	125.5	18.1	23.1	13.8	2.2	北西	174.2
11 月	93.0	12.2	17.2	7.7	2.1	北西	157.3
12 月	58.0	6.9	11.6	2.7	2.2	北西	160.2
年	1,827.5	15.8	20.7	11.6	2.5	北西	2,085.1

「日本気候表(気象庁,2011)」による岐阜地方気象台の平年値。

統計期間は 1981～2010 年の 30 年間。但し最多風向は、1990～2010 年の 21 年間。

### (3) 地形及び地質の概要

本図幅内の範囲は、濃尾平野の北部から北東部に位置し、地形的には、山地、丘陵地、台地及び低地から構成されている。

山地は、美濃越前山地の南端部に位置し、地質構造を反映した風化・浸食に対する抵抗性の差異に起因する、稜部と凹部とが交互に配列する組織地形を形成している。本図幅では岐阜市権現山と加茂郡坂祝町城山付近がその頂部として存在し、チャートの急崖からなる頂稜部が西北西－東南東方向に帯状に分布しており、金華山はこの組織地形の南西端に位置している。また、この山地には、左横ずれの活断層である根尾谷断層系の断層が通っており、明治 24(1891)年 10 月の濃尾地震は、根尾谷から濃尾平野にかけての広い範囲で大被害をもたらした。

丘陵地は、本図幅の北東端、及び東部の一部に分布するのみであるが、開析が進み谷底低地が丘陵地に深く入り込んでいる。

本図幅の台地は、ほとんどが段丘地形であり、木曾川沿いの地域に大規模な段丘面が形成されている。また、このほかに長良川や津保川が形成した段丘も小規模ながらみられる。

低地は、濃尾平野全体でみると上流から下流へ扇状地帯域、自然堤防・後背湿地の卓越する帯域、三角州帯域で構成されているが、本図幅では三角州帯域は存在しない。扇

状地は、木曾川扇状地が本図幅南部に、長良川扇状地が本図幅西部に分布し、本図幅内にそれぞれの扇頂部分がみられる。また、本図幅南西部には自然堤防・後背湿地の卓越する木曾川の氾濫原が広がっている。このほか、低地としては、本図幅北部の長良川・津保川流域に盆地地形がみられる。

地質についてみると、本図幅内の基盤は中生界の砂質岩とチャートからなっている。山地・丘陵地の表層地質では、チャートと砂質岩とでは風化浸食に対する強度に大きな差があり、チャートの分布するところは急峻な地形を呈し、砂質岩の分布するところは緩やかな丘陵地をなしている。

山地・丘陵地以外の場所は、ほとんどが未固結堆積物から構成され、木曾川、長良川をはじめとする各河川によってもたらされた段丘堆積物、扇状地堆積物のほか、氾濫原低地では自然堤防堆積物や後背湿地堆積物が分布する。さらに山麓部には崖錐性堆積物が分布している。

これらのうち段丘堆積物や扇状地堆積物は礫がち堆積物が多く、旧河川の形成した自然堤防では砂がち堆積物、自然堤防の後背湿地では泥がち堆積物で構成されている。また、各務原台地を構成する各務原層は、上部2～3mは火山灰質シルトと分級のよい中粒～細粒砂層よりなり、砂層中には御岳火山に由来すると考えられる風化したオレンジ色軽石が多くみられる。

(5万分の1土地分類基本調査「岐阜」説明書による)。

### 3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

本調査では土地条件図などの既往資料や空中写真判読、精密標高データなどに基づき自然地形分類図（図 3-1）及び人工地形分類図（図 3-4）を作成した。

自然地形分類図については、現在、改変済みの範囲についても、終戦直後の空中写真や明治期の旧版地形図などから元々の地形を復元して図化している。また、人工地形については低地での宅地開発等による盛土地、丘陵地などでの大規模改変地（人工平坦地）や人工平坦地での元々の谷の位置、宅地開発等による切土地などを新旧の空中写真や地形図の比較から抽出・図化している。

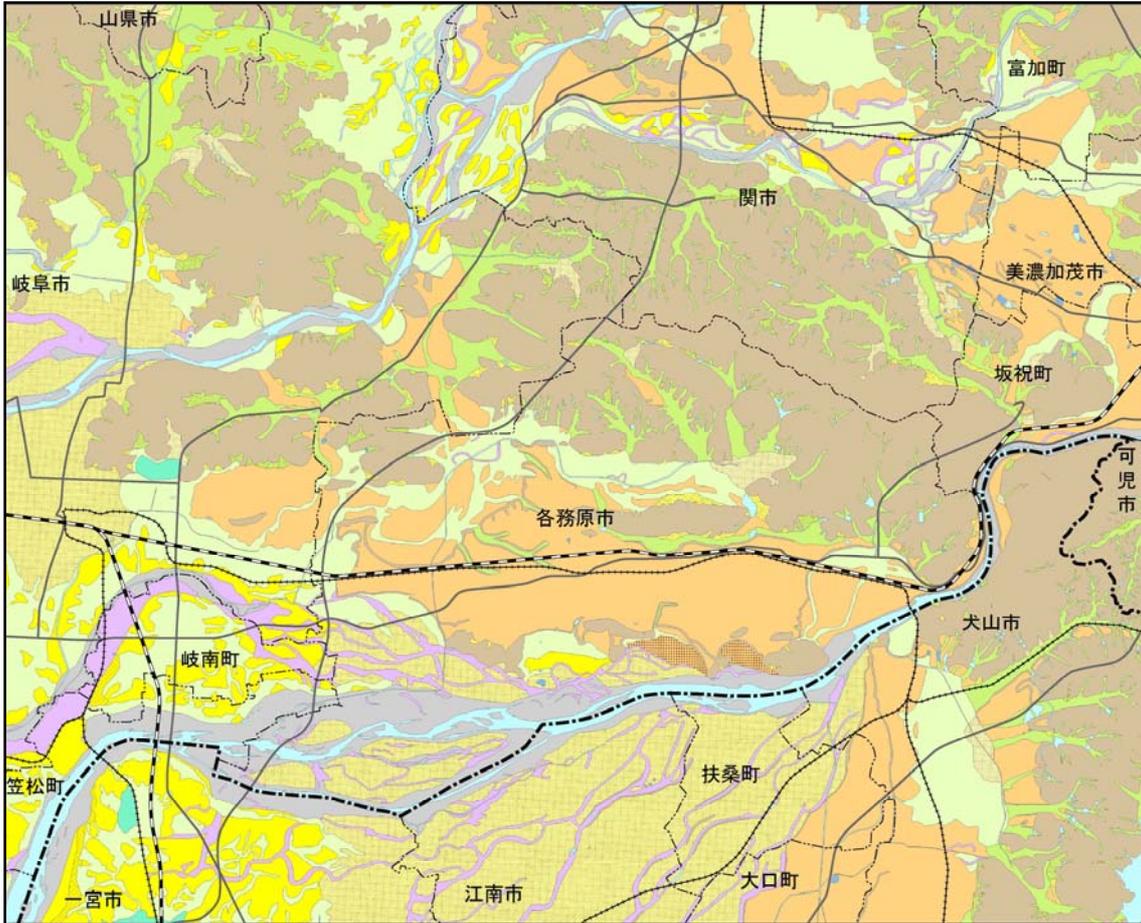
#### 3.1 地形概説

##### (1) 地形分布の概要

本図幅の自然地形は大きく分けると山地、丘陵地、台地及び低地に分類される（図 3-3）。濃尾平野全体では東部に丘陵地や台地が発達し、それらは西方に向かって低くなり、やがて沖積面下へと埋没していく。西部には木曾三川などが作る低地が養老山地まで続く。地下構造も地形に対応するように、西側ほど新しい堆積物が厚く堆積している。このように濃尾平野は猿投山から養老山地の間にある地塊が西方に傾き、沈降するような地下構造を形成していることから、濃尾傾動地塊（運動）と呼ばれている（桑原, 1968）。濃尾傾動地塊は猿投山の西縁部を限る猿投一境川断層と、養老山地東縁部を限る養老断層との間の地塊運動で、須貝・杉山（1999）によると、西部の沈降速度は養老断層の活動に伴い 1 m/1,000 年に達すると考えられている。

本図幅内では、東～北西部は山地が広い面積を占め、その間を縫って木曾川や長良川などが北東から南西に向かって流下している。中生代の堆積岩や変成岩からなる山地の稜線高度は木曾川の東側では 200m～300m で、木曾川と長良川の間では 250m～350m、長良川の北西側では 250m～400m ほどとなっている。山地の間には盆地や低地が分布し、盆地周辺には丘陵地や段丘がみられる。山地の南～西側は木曾川や長良川が形成した扇状地やそれらが隆起した段丘が広がっている。図幅の南西端は木曾川の氾濫原となっており、蛇行する河道跡や自然堤防がみられる。

人工地形としては岐阜市周辺の低地での盛土地や、山地・丘陵地での大規模改変地（人工平坦地（宅地等））、ゴルフ場（人工平坦地（農地等））がみられる。



凡 例

- | 自然地形分類 Natural landform |  |
|-------------------------|--|
| 山地 Mountains            |  |
|                         | 山地斜面等 Mountain slopes                              |
|                         | 崩斜面及び崖錐 Colluvial slope or Talus                   |
|                         | 土石流堆積地 Depositional landform formed by debris flow |
| 台地 Terraces and upland  |  |
|                         | 砂礫台地(更新世段丘) Gravel terrace                         |
|                         | 砂礫台地(完新世段丘) Gravel terrace (Alluvial terrace)      |
| 水部 Water                |  |
|                         | 現水部 Recent water surface                           |
|                         | 旧水部 Former water surface                           |
| 低地 Lowland              |  |
|                         | 緩傾状地 Gentle alluvial fan                           |
|                         | 扇状地 Alluvial fan                                   |
|                         | 谷底低地 Valley bottom                                 |
|                         | 氾濫原低地 Flood plain (back marsh)                     |
|                         | 自然堤防 Natural levee                                 |
|                         | 旧河道 Abandoned channel                              |
|                         | 湿地 Wetland   |
|                         | 三角洲・海岸低地 Delta or Coastal lowland                  |
|                         | 砂州・砂堆(塊州・礫堆) Sand bar                              |
|                         | 砂丘 Sand dune                                       |
|                         | 天井川及び天井川沿いの微高地 Raised bed river                    |
|                         | 河原・河川敷 Dry river bed                               |
|                         | 浜 Beach  |

図 3-1 岐阜地域の自然地形分類図

### 3.2 地形細説

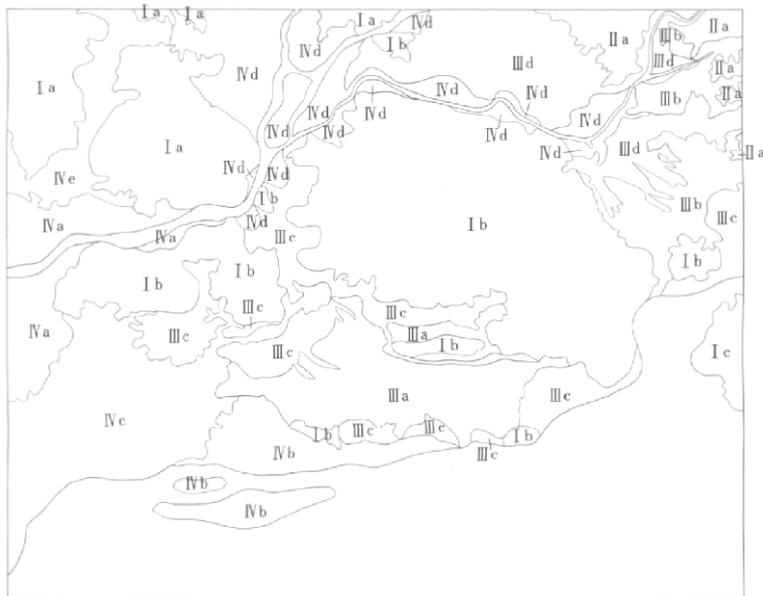
本図幅における山地や丘陵地、低地などの地形地域区分は、岐阜県及び愛知県の 20 万分の 1 土地分類調査（経済企画庁，1974, 1975）や 5 万分の 1 土地分類基本調査（地形分類図）「岐阜」「大垣」「瀬戸」「名古屋北部」「豊田」「名古屋南部」（図 3-2(1), (2)）、その他の文献（町田ほか編，2006）などを参考に、本調査として、濃尾平野全域で統一の区分及び呼称を採用した（図 3-3）。

また、市町村ごとの自然地形分類の面積を表 3-1 に整理した。

表 3-1 本図幅内の市町村別地形分類面積

区分		市区町村																合計
		岐阜市	関市	羽島市	美濃加茂市	各務原市	可児市	山県市	岐南町	笠松町	坂祝町	富加町	一宮市	犬山市	江南市	大口町	扶桑町	合計
山地	山地斜面等	41.2	27.7	0.0	1.5	25.9	3.1	2.4	0.0	0.0	5.3	5.1	0.0	20.3	0.2	0.1	0.3	132.7
	麓斜面及び崖錐	1.1	0.3	0.0	0.1	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	2.5
	土石流堆積地	2.7	0.4	0.0	0.0	0.4	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	4.1
	山地計	44.9	28.4	0.0	1.6	27.0	3.1	2.4	0.0	0.0	5.5	5.2	0.0	20.8	0.2	0.1	0.3	139.3
台地	砂礫台地	6.0	9.6	0.0	5.8	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	2.3	0.0	9.3	0.0	3.3	2.0	66.8
低地	緩扇状地	11.8	0.0	0.0	0.0	7.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	3.4	1.4	14.6	1.2	7.1	46.5
	扇状地	1.1	0.8	0.0	0.0	0.8	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	3.5
	谷底低地	9.2	5.5	0.0	0.4	4.6	0.4	1.7	0.0	0.0	0.9	2.0	0.0	4.0	0.0	0.0	0.0	28.9
	氾濫原低地	19.3	13.0	0.0	1.7	9.8	0.0	0.0	3.1	1.8	1.0	2.3	4.6	4.7	0.0	0.0	0.0	61.4
	自然堤防	5.4	2.1	0.0	0.0	0.6	0.0	0.4	2.2	2.0	0.0	0.0	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.7
	旧河道	1.9	1.7	0.0	0.0	2.8	0.0	0.0	1.8	0.8	0.0	0.1	1.1	0.3	2.4	0.4	0.8	14.1
	湿地	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8
	砂丘	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6
	天井川及び天井川沿い微高地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
	河原・河川敷	4.0	2.8	0.1	0.0	6.9	0.0	0.0	0.5	2.5	0.4	0.3	2.9	0.7	1.5	0.0	0.4	22.9
	低地計	53.1	25.8	0.1	2.1	32.5	0.4	2.3	7.9	7.2	2.4	4.7	20.8	11.6	18.6	1.5	8.3	199.3
水部	現水部	2.6	1.7	0.3	0.1	3.3	0.1	0.1	0.0	1.1	0.2	0.3	1.0	1.9	0.7	0.1	0.6	14.0
	旧水部	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
	水部計	2.6	1.7	0.3	0.2	3.3	0.1	0.1	0.0	1.1	0.2	0.3	1.0	1.9	0.7	0.1	0.6	14.3
合計		106.6	65.5	0.5	9.7	87.8	3.6	4.9	7.9	8.3	11.7	12.5	21.7	43.6	19.4	4.9	11.2	419.7

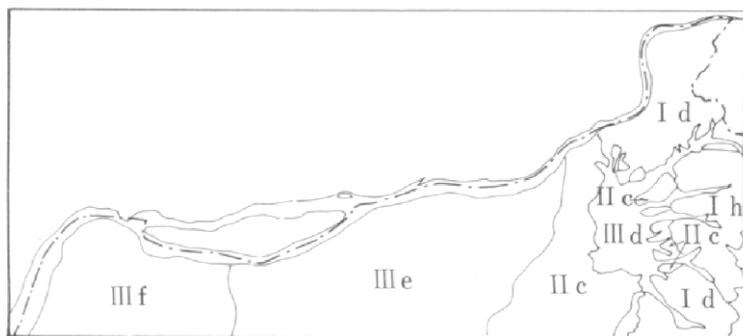
面積は、本調査の成果図の図上計測による。



山地	丘陵	台地	低地
I a 伊自良山地	II a 蜂屋丘陵	III a 各務原台地	IV a 長良川扇状地
I b 各務原北部山地	III b 加茂野台地	IV b 木曾川扇状地	
I c 春里山地	III c 岐阜・各務原周辺台地	VI c 長良川東方地域	
	III d 関・加茂野周辺台地	IV d 武儀川・津保川下流地域	
		IV e 長良川西方地域	

資料：岐阜県(1985)

図 3-2(1) 5万分の1土地分類基本調査における地形地域区分(岐阜県側)



I 山地・丘陵地	III 低地
I d 尾張山地	III d 郷瀬川低地
I h 春日井・小牧丘陵	III e 大山扇状地
	III f 濃尾低地
II 台地・段丘	
II c 濃尾東縁台地	

資料：愛知県(1983)

図 3-2(2) 5万分の1土地分類基本調査における地形地域区分(愛知県側)



凡 例

- |        |         |      |
|--------|---------|------|
| 山地・丘陵地 | JR(新幹線) | 県界   |
| 台地     | JR(在来線) | 市町村界 |
| 低地     | 私鉄      |      |
| 河川・湖沼  | 高速道路    |      |
| 地形地域区分 | 国道      |      |

図 3-2 本図幅における地形地域区分

(土地履歴調査において濃尾平野全域で統一した区分及び呼称)

### (1) 山地

本図幅の山地は地域の東～北西部に低地を挟みながら分布しており、東部は尾張山地、中部は各務原北部山地、北西部は伊自良山地が広がっている。

**尾張山地**は、図幅東側の木曾川左岸や五条川の両岸に位置している。木曾川左岸では稜線の高度は250～350mほどに達し、木曾川沿いの地域は、木曾川の侵食によって急峻な斜面となっている。山地には深い谷が刻まれており、谷の出口には扇状地や土石流堆積地がみられる。五条川の両岸では、稜線の標高が150～250mほどの山地となっており、入鹿池の西側にはやや突出した山頂として尾張富士(275.0m)が位置している。

**各務原北部山地**は、坂祝町付近の木曾川右岸から岐阜市街地東方の長良川左岸にかけての山地で、稜線の高度は250～350m程度、主な山頂としては、迫間山(309m)、権現山(316.5m)、金華山(328.9m)などがあげられる。山地は東南東－西北西方向に伸びる山稜が目立ち、これは、岩石の侵食に対する抵抗力の差によって生じた組織地形(差別侵食)で、硬い岩石のチャートからなる山地が、比較的軟らかい砂岩・泥質岩の山地を帯状に縁どる形に稜線となり、砂岩・泥質岩からなる山地は比較的低い山地となるとされる(岐阜県, 1985)。突出した山稜の周辺には溪床勾配が急な谷や小規模な扇状地がみられ、本調査ではこれを土石流堆積地として区分している。

**伊自良山地**は長良川の北西側の山地で、稜線の高度は250～400m程度である。主な山頂としては、百々ヶ峰(417.9m)、如来ヶ岳(276.1m)、眉山(231.2m)、城ヶ峰(288m)などがあるが、それぞれの山塊の間には比較的低平な谷底低地が幅広く広がり、離水した沈水性海岸の景観になっている(岐阜県, 1985)。山地斜面は比較的平滑で、山地斜面の下部には崖錐や麓層面が発達する箇所がみられる。

### (2) 丘陵地

本図幅では丘陵地は山地の周辺部に局所的に分布しており、犬山市東方の尾張山地に囲まれた地域を犬山丘陵、本図幅北東端の富加町周辺を富加丘陵として区分した。

**犬山丘陵**は南北を尾張山地に囲まれており、丘陵地の稜線高度は100～200mで比較的幅の広い谷底低地が直線的に形成され、地質的には中新世～鮮新世にかけての堆積岩からなる地域である。住宅団地や工場用地としての開発が顕著な地域となっている。

**富加丘陵**は稜線高度150～250mの丘陵地で、地質的にはチャートや中生代の堆積岩、第三紀の堆積岩からなる。チャートが分布する部分は突出した比較的急峻な稜線となっており、その周辺の堆積岩が分布する地域はゴルフ場や工場用地としての利用がみられる。

### (3) 台地

本図幅の台地は主として木曾川が形成した段丘からなり、比較的広範囲にみられるものとしては加茂野台地、各務原台地、小牧台地があげられる。また、それらの周辺には長良川や津保川などが形成した段丘がみられる。

**加茂野台地**は、美濃加茂市加茂野付近に分布する東西4km、南北4kmほどの段丘で、段丘面は木曾川側の南東部が最も高く標高80～90mほどで、比高10mほどの段丘崖が連続している。段丘面は津保川に向かって北西側に傾斜しており、津保川付近では標高

60～70mほどとなる。段丘は北西－南東方向に伸びる谷底低地や浅い谷によって開析されていて、谷底低地や浅い谷の上流にはため池やため池跡地がみられる。

**各務原台地**は、各務原市の木曾川右岸に分布する南北2～3 km、東西9 kmほどの段丘で、段丘面は東側の鷺沼付近が最も高く標高60m前後で、東側は比高10m前後の円弧状の段丘崖で境される。段丘面は西側に向かって傾斜しており、西端の新加納駅付近では標高20m前後で、西側は比高5 mほどの段丘崖で境されている。南側は明瞭な比高5～10mほどの明瞭な段丘崖によって木曾川の扇状地や氾濫原低地等と境されているが、北側は段丘を開析する小河川の谷底低地と緩やかな斜面で接している。各務原台地は犬山丘陵西側の田楽面とともに名古屋周辺の熱田面と対比される。その熱田面は、砂よりなる最下部層、厚い海成粘土よりなる下部層、軽石を含む主に陸成の上部層からなる熱田層によって構成され、下部層は酸素同位体ステージ5eに、上部層は同ステージ5d～5aまでの時期に、それぞれ形成されたとされる(町田ほか編, 2006)。

**小牧台地**は、犬山市街地の南側に分布する南北5 km(本図幅外を含まず)、東西1～3 kmほどの段丘で、南側は「名古屋北部」図幅に連続し、小牧市市街地まで続く広い段丘である。犬山市付近では、西側は比高10mほどの明瞭な段丘崖で木曾川扇状地と境されているが、東側は犬山丘陵から流出する小河川の氾濫原低地に連続していて境界は不明瞭になっている。段丘面の高さは、最も高い犬山市街地において標高55m前後で東側の犬山丘陵側に緩く傾斜している。小牧台地は名古屋の大曾根面に対比され、おそらく6～5.5万年前に形成されたとされる(町田ほか編, 2006)。

その他の段丘としては、木曾川や津保川、長良川に沿って比較的低い段丘が分布しているほか、岐阜市街地の東方や各務原台地の北側に沖積面との比高が小さい段丘が分布している。

木曾川沿いの低位の段丘は、加茂野台地と木曾川の間や各務原台地の東側の木曾川右岸などに分布しており、木曾川の現在の河床からの比高は10数mあり、坂祝町付近では段丘面上に木曾川の旧河道が明瞭にみられる。

津保川沿いの段丘は前述の加茂野台地のほか、右岸側に沖積面との比高が5 m前後の段丘があり、西側では長良川沿いの段丘に連続している。

長良川沿いには沖積面との比高が5～8 mほどの段丘が下有知、池尻、小瀬、小屋名、芥見、日野などにみられ、河道側は蛇行する長良川によって侵食された半円形の段丘崖が明瞭に残っている。

岐阜市街地の東方や各務原台地の北側には、比高1～2 mほどの扇状地状の段丘が分布しており、長良川の河床が高かった時期に芥見、日野から南側へ溢れ出た古長良川が形成した扇状地性の堆積物からなる段丘とされ、段丘には南流した古長良川の流路跡が幅100m、深さ2 m程度の鍋底状の窪地となってみられるとされる(国土地理院, 1975)。

#### (4) 低地

本図幅の低地は、大きく分けると関盆地、木曾川扇状地(犬山扇状地)、長良川扇状地、羽島・一宮氾濫原に分けられる。

**関盆地**は、山間部の長良川、津保川沿いの盆地で、東西約13 km、南北約4 kmの東西に細長く、東部の関市街地が位置する低い段丘と氾濫原低地からなる地域と、西部の長

良川沿いの保戸島付近の自然堤防が分布する地域に分けられる。

東部は長良川等が埋積した低地を津保川が開析してやや段丘化が進んでおり、既存のボーリング資料では表層の1～2mほどはシルトや粘土が見られるが、その下は厚い砂礫となっている(柱状図No.1, 2, 3)。西部は長良川本川沿いの低地で、旧河道が幾筋もみられ、旧河道に沿って自然堤防が発達している。ボーリング資料では表層の4mほどは礫層に混じって粘土層がみられるが、その下は厚い砂礫となっている(柱状図No.4)。

**木曾川扇状地(犬山扇状地)**は、犬山市街地西方を扇頂とする半径約12km、面積約100km<sup>2</sup>(本図幅外を含む)に達する緩扇状地で、扇端は木曾川右岸では各務原市大野町付近、木曾川左岸は一宮市極楽寺から島村にかけての付近で、西側の氾濫原低地に漸移する。緩扇状地表面上には木曾川の旧河道が放射状に幾筋も残っており、木曾川右岸地域には境川に続く旧河道がみられ、木曾川左岸地域では、一之枝川(青木川)、二之枝川、三之枝川(日光川)などがあり、それらの旧河道は近世初頭まで木曾川の本流や分流となっていたとされる(図3-4; 大矢, 1956)。旧河道は周囲の緩扇状地面より2～3mほど低くなっており、伏流水滲出の影響を受け湿地状を呈し、排水河川の源頭部となっている。このほか、旧河道と思われるが連続して確認できないものや、浅く、不明瞭なものは浅い谷として扱った。既存のボーリング資料では、扇頂付近では表層の3～4mほどは砂層であるが、その下は厚い砂礫となっており(柱状図No.7)、扇端付近では表層の4mほどは砂礫で、その下は10mほど礫まじりの砂層となっている(柱状図No.10)。

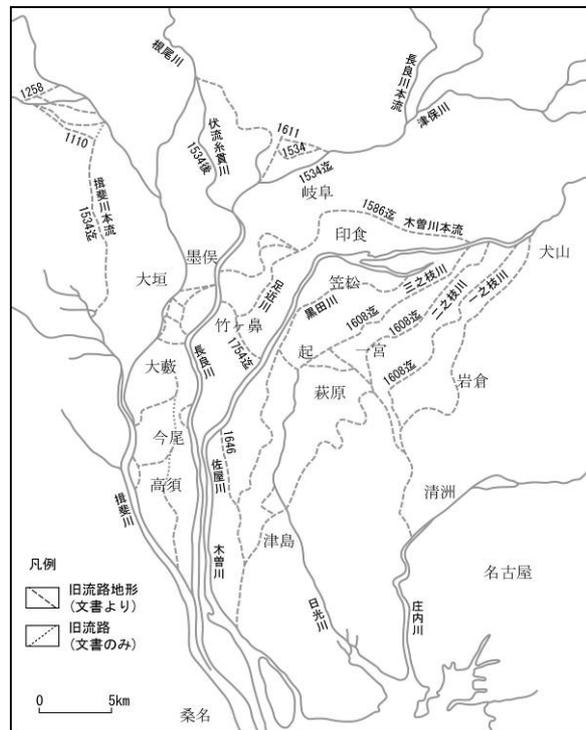


図3-4 木曾川、長良川、揖斐川河道変遷図(大矢, 1956)

長良川扇状地は、岐阜市街地北東側の長良川の狭窄部出口を扇頂にする半径7km、面積約25km<sup>2</sup>(本図幅外を含む)の比較的小規模な緩扇状地で、扇端は伊自良川左岸(本図幅外)から岐阜駅の南方の加納城跡付近にかけてで、氾濫原低地に漸移している。緩扇状地表面上には旧河道がみられ、右岸側では長良橋の下流から分流して伊自良川に至る旧河道があり、古川、古々川と呼ばれていた(国土地理院, 1975)。左岸側は市街化が著しい地域で、現在旧河道や浅い谷を明瞭に確認することは難しいが、岐阜市役所南方から南西側に伸びる浅い谷は比較的連続して追跡できる。ボーリング資料では砂礫や礫まじりの砂層が厚く堆積しているのが確認できる(柱状図No.23, 24)。

羽島・一宮氾濫原は、緩扇状地の下流側に広がる氾濫原低地で、本図幅内では南西端に位置しており、標高は7~10mほどで、旧河道と自然堤防、湿地などが分布している。

木曾川の右岸側では、現在の境川が流下する付近は木曾川の旧河道であり、周辺は標高10m前後の自然堤防が連続して分布している。自然堤防の一部は昔の木曾川の河畔砂丘が標高15mほどの高まりとなって分布している。本調査では、自然堤防などに囲まれた排水不良の土地を湿地として抽出しており、岐阜競輪場の北西側の山地を背にした低地は、東側を段丘化した扇状地、西側を長良川扇状地、南側を自然堤防に閉塞されており、湿地として抽出した。これらの湿地は、現在は排水路の整備、圃場整備などによって排水性は改善されている箇所が大半である。

木曾川の左岸側では、木曾川扇状地(犬山扇状地)から連続する旧河道が、扇状地上の区間より大きく蛇行して分布しており、その周辺には自然堤防が発達し、氾濫原低地や旧河道との比高は1~2mほどとなっている(写真3-1)。自然堤防に囲まれて排水不良になっていた地域は湿地として図示しているが、現在は排水路の整備、圃場整備などによって排水性は改善されている。

ボーリング資料では扇状地(段丘化したものも含む)の周辺は礫質な堆積物が比較的厚く堆積しているが(柱状図No.11~13, 18)、湿地や扇状地から離れた氾濫原低地では、砂や粘土を主体としたN値10未満の軟弱な堆積物が厚く堆積している(柱状図No.14~17, 19)。



写真3-1 旧河道(手前の水田)と自然堤防(奥の畑や宅地)

その他の低地としては、伊自良川の支流の鳥羽川に沿って幅 0.5～1 kmほどの谷底低地が連続して分布しており、岐阜市街地の北側で山地から出て、長良川の扇状地に閉塞された形になりつつ南西側に流下している。また、古長良川が分流して南流したとされる、芥見、日野の南側の山間の低地では、シルトや砂を主体とする堆積物の上に厚さ数 m の砂礫が堆積している(柱状図No.20, 21)。

### 3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

本図幅は岐阜市街地やその周辺の住宅地を含み、また、名古屋の都市圏に隣接しており、長良川扇状地や木曾川扇状地、小牧台地、各務原台地などに宅地や工業用地などが広がっている。また、山地のうち比較的改変が容易な地域や丘陵地では、ニュータウン、ゴルフ場などが整備されている(図 3-5, 表 3-2)。

山地や丘陵地では、犬山丘陵や各務原北部山地の比較的起伏の小さな地域で宅地の開発が行われ、山地や丘陵地の傾斜地を大きく切り盛り造成して平坦な土地を作り出し、住宅や工場などの用地を確保している。本図幅の大規模なニュータウンには、各務原市の鵜沼台、松が丘、尾崎団地、つつじが丘、緑苑地区、岐阜市の大洞地区などがあるが、これら地区の整備は高度成長期の昭和 40 年代に集中して始まっており(表 3-3)、昭和 50 年代以降に始まった大規模ニュータウン整備は少ない。大規模な切り盛り造成地では、地震の際に盛土部分が変形し、建物やライフライン施設等に被害が発生することがあり、近年では平成 23 (2011) 年の東北地方太平洋沖地震や、平成 7 (1995) 年の兵庫県南部地震の際などに各地で被害が報告されている。

台地や段丘では、山地や丘陵地ほどの大規模な切り盛り造成が行われることは少ないが、浅い谷に盛土をして段丘面と一連となった平坦地を造成するなどの改変がみられ、本図幅内における大規模な例としては各務原台地の自衛隊基地があげられる。

扇状地では台地・段丘と同様に浅い谷や旧河道に盛土をして宅地等に用いられる箇所が多い。また、扇状地の構成層となる砂礫(陸砂利)を建設用の骨材として採取する露天掘採取地がみられる。陸砂利の露天掘採取地は採取後に埋め戻されるため、採取跡地は地形的な変化は少ないが、犬山市では砂利採取跡地を埋め立てる際に地下水が汚染される可能性があるとして「犬山市埋め立て等による地下水の汚染の防止に関する条例」をにより対策を行っている。

谷底低地や氾濫原低地、旧河道、湿地においては、岐阜などの旧来の市街地の周辺を中心に、従来、低湿地のため水田など用いられてきた土地を盛土して、宅地や工場用地に転用する例が多くみられる。本地域での谷底低地と氾濫原低地のうち盛土等で改変された土地は 40%前後、旧河道の改変地は約 60%、湿地の改変地は約 70%となっている(表 3-2)。



表 3-2 本図幅内の人工地形面積

区分		分類	人工平坦地		盛土地	切土地	改変工事中の区域	埋立地	人工地形小計(a)	改変なし(b)	自然地形区分別計(a+b=c)	改変地の割合(%) (a/c*100)
			宅地等	農地等								
自然地形	山地	山地斜面等	15.4	5.7	0.0	1.5	3.2	0.0	25.7	107.0	132.7	19.4%
		麓斜面及び崖錐	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	1.9	2.5	21.9%
		土石流堆積地	0.9	0.1	0.0	0.0	0.1	0.0	1.1	3.0	4.1	26.7%
		山地 計	16.8	5.7	0.0	1.5	3.3	0.0	27.4	111.9	139.3	19.6%
	台地	砂礫台地	0.6	0.0	3.0	0.0	0.1	0.0	3.7	63.1	66.8	5.6%
	低地	緩扇状地	0.0	0.0	1.5	0.0	0.2	0.0	1.7	44.8	46.5	3.7%
		谷底低地	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	3.0	3.5	16.4%
		谷底平野	2.3	0.5	7.9	0.0	0.1	0.0	10.8	18.1	28.9	37.3%
		氾濫原低地	0.2	0.0	24.7	0.0	0.2	0.0	25.1	36.2	61.4	41.0%
		自然堤防	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	20.7	20.7	0.2%
		旧河道	0.0	0.0	8.4	0.0	0.1	0.0	8.5	5.6	14.1	60.1%
		湿地	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.5	0.2	0.8	70.7%
		砂丘	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0%
		天井川及び天井川沿い微高地	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0%
		河原・河川敷	0.0	0.0	3.9	0.0	0.1	0.0	3.9	19.0	22.9	17.1%
		低地 計	3.1	0.5	46.9	0.0	0.7	0.0	51.1	148.2	199.3	25.6%
	水部	現水部	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	13.8	14.0	1.4%
		旧水部	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.2	83.3%
		水部 計	0.1	0.0	0.2		0.0	0.1	0.4	13.9	14.3	2.8%
合計			20.5	6.3	50.1	1.6	4.0	0.1	82.6	337.1	419.7	19.7%

面積は、本調査の成果図の図上計測による。

表 3-3 調査地域における年度別の主要宅地開発状況

市	事業開始年						
	～1954	1955～1964	1965～1974	1975～1984	1985～1994	1995～2004	2005～
各務原市			鵜沼台地区(24.3ha) 松が丘地区(34.6ha) 新鵜沼台地区(40.6ha) 尾崎地区(尾崎団地81ha) つつじが丘地区(39.4ha) 緑苑地区(81.6ha)				
岐阜市			大洞緑地区(64ha)				
江南市			江南地区(35ha)				
大口町					余野地区(60.4ha)		

資料：「全国のニュータウンリスト」（平成 22 年度作成），国土交通省土地総合情報ライブラリーホームページ（<http://tochi.mlit.go.jp/>）

### 3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅において地形条件と密接な関係を有する自然災害としては、地震における低地部の建物被害（軟弱地盤地での建物被害、液状化被害など）、及び人工平坦地における地盤災害（地震動による造成地の地盤変形等）、大雨の際の浸水被害、土砂災害（旧河道での浸水被害、麓屑面及び崖錐でのがけ崩れ、土石流堆積地での土石流・土砂流出など）をあげることができる。特に山地・丘陵地の人工平坦地は、盛土箇所の地盤災害と背後の山地斜面からの土砂災害の両方で注意が必要となる。

#### (1) 地震災害

本図幅を含む東海地方は、たびたび大規模な地震災害に見舞われ、明治以降では明治24（1891）年10月28日に発生した濃尾地震の被害は顕著である。総戸数に対する建物被害の割合は、扇状地に位置する当時の岐阜市内では全壊が約15%、半壊を含めると約63%なのに対し、南側の氾濫原低地に位置する川手（上川手・下川手）では、全壊が約90%、半壊を含めると約99%が被害を受けており、地盤の状況によって大きな差が生じている（飯田, 1979）。

#### (2) 降雨災害

本図幅では木曾川と長良川の2つの大河川が流下しており、沿川では中世以降洪水がたびたび起こり、洪水によって流路が変わったり、治水のために分流を締め切るなどしたため旧河道が多くみられる。これらの旧河道は周囲より地盤が低い土地として残存しており、旧河道付近では内水氾濫による被害も発生している。

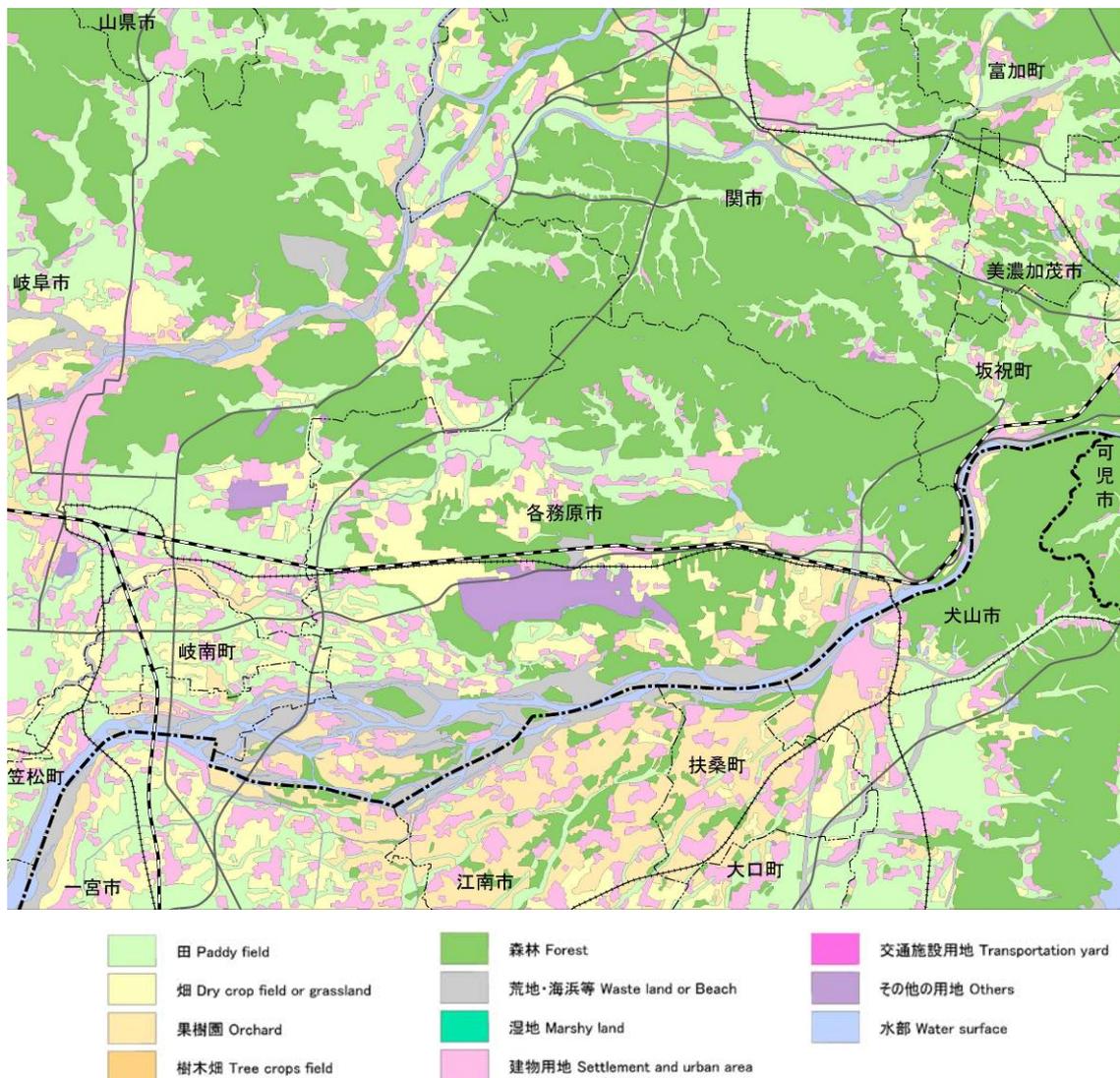
山地・丘陵地では斜面の下部に斜面から崩れ落ちた土砂が堆積した麓屑面・崖錐が分布し、異常降雨時などにはがけ崩れの危険がある地域となっている。また、溪流や水が集まる谷地形の下部には土石流によって運ばれた土砂が堆積して、小規模な扇状地（沖積錐）や勾配のある谷底低地が形成されており（これらをあわせて「土石流堆積地」とした）、異常降雨時には土石流が発生したり、溪流から土砂が流出する危険がある地域となっている。

## 4 土地利用の変遷の概要

### 4.1 過去の土地利用状況の概要

#### (1) 明治 29 (1896) 年頃 (現在から概ね 120 年前) の土地利用

本図幅では、明治 29 (1896) 年に全域にわたって 5 万分の 1 地形図が作成されており、また、2 万 5 千分の 1 地形図に関しては大正 9 (1920) 年に測図されている。このため、本図幅においては、明治期の土地利用分類図 (第 1 期) として、5 万分の 1 地形図を基礎資料にして地形図の読図による土地利用分類を行い、5 万分の 1 地形図で読図が難しい範囲については、2 万 5 千分の 1 地形図を補足的に用いて土地利用分類を行った。作成した明治 29 (1896) 年頃の土地利用分類図を図 4-1 に示す。



※行政界・鉄道・道路などは現在の情報

図 4-1 本図幅における約 120 年前(明治 29(1896)年頃)の土地利用

### ①山地、丘陵地における土地利用

山地の土地利用をみると、**尾張山地、各務原北部山地、伊自良山地**のいずれの山地にも森林が広がり、山麓には集落が立地して、山地を開析する谷の土石流堆積地や谷底低地は水田として利用されている。犬山丘陵・富加丘陵の各丘陵地では山地と同様に森林と山麓の集落、谷底の水田の配置は基本的に変わらないが、緩斜面では畑となっている箇所がみられる。

### ②台地における土地利用

木曾川左岸の犬山市街地の東側の**小牧台地**は、江戸時代初期に建設された入鹿池用水や木津用水の灌漑により、水利の悪い台地上にもかかわらず水田が広く分布し、集落も立地している。これに対し、木曾川右岸の**各務原台地**では、明治時代には、まだ森林が広がっており、畑は少なく、水田もごく限られた範囲のみでみられる。集落は中山道沿いにみられ、現在の航空自衛隊岐阜基地付近は演習地になっている。**加茂野台地**も同様に森林が広く分布していて、耕作地は少なく、津保川や蜂屋川沿いに広がるのみであった。

段丘面の高さが比較的低い加茂野周辺台地や岐阜・各務原周辺台地では、森林は少なく、畑や桑畑、水田が広がっており、集落も立地している。

### ③低地における土地利用

**木曾川扇状地(犬山扇状地)**では宮田用水などが整備されていたものの、水田は旧河道沿いの低湿地に限られ、扇状地の大半は桑畑となっており、平地林も残存していて、東側のより高い小牧台地に水田が多いのとは対照的な土地利用となっている。集落は扇状地上に点在している。**長良川扇状地**では、東側半分は当時の岐阜の市街地となっており、その周辺の北側や西側は畑や桑畑が広がり、南側には水田が広がっている。長良橋下流の右岸側には分流路が2本みられ、古川、古々川と呼ばれていたとされる(国土地理院, 1975)。

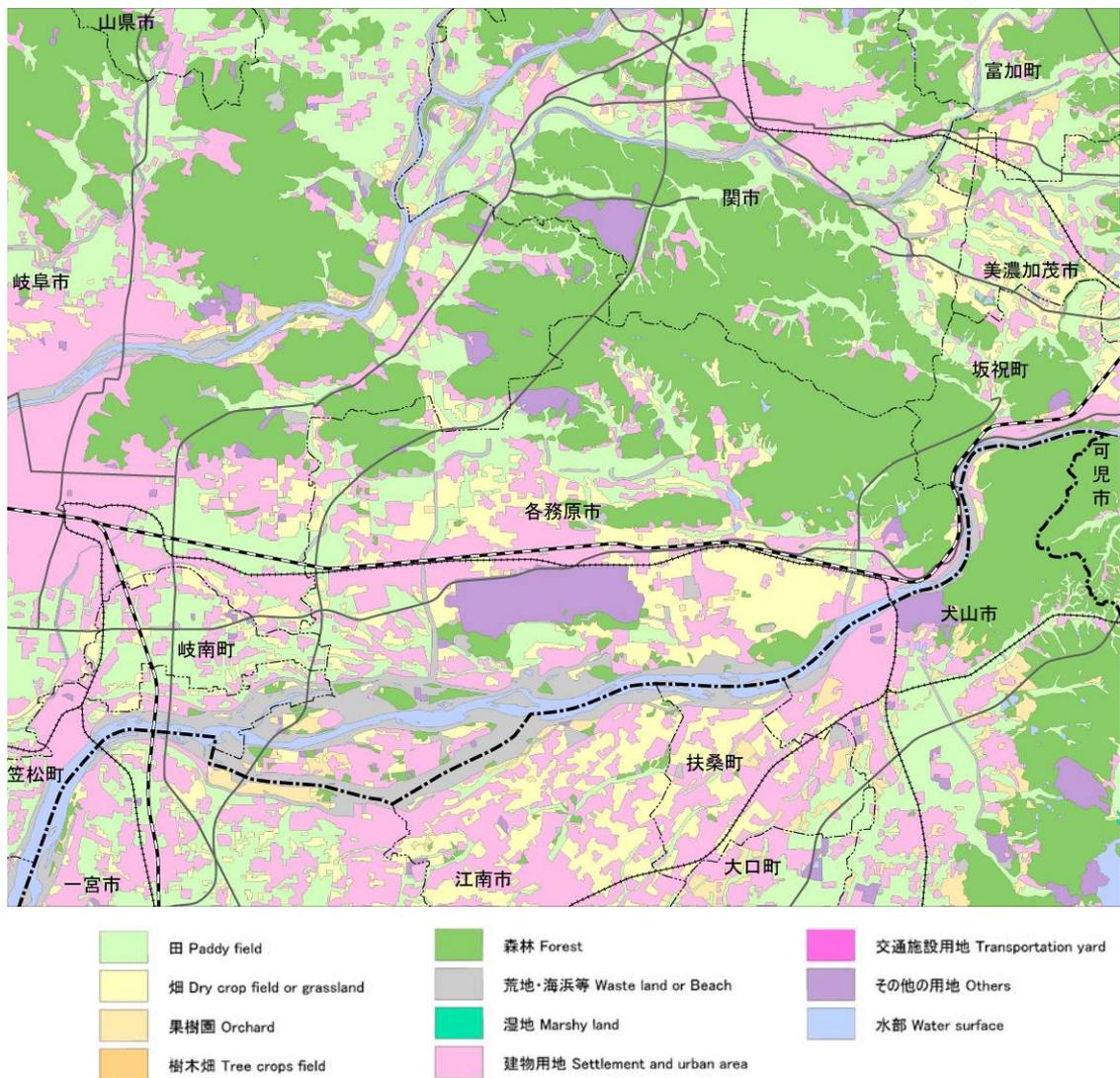
**関盆地**など北側の山間の低地では、谷底低地や氾濫原低地、旧河道に水田が広がり、自然堤防や段丘などの微高地に集落が立地している。長良川沿いには河畔林がみられる。**羽島・一宮氾濫原**では氾濫原低地や湿地に水田が広がり、自然堤防には集落や畑がみられる。旧河道は水田として利用されている箇所が多いが、境川沿いの木曾川の旧河道は比較的地盤が高く、畑としての利用されている箇所も多い。木曾川周辺の砂丘は地盤が特に高く、集落が集中して立地している。

その他、木曾川の大きな中州に位置する各務原市川島町は、明治時代には網目状の流路によって分断しており、小さな中州に集落が立地していた。集落の周辺には桑畑や畑がみられ、それぞれの中州の上流側には河畔林が連続している。

## (2) 昭和 45 (1970) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図(第2期)は、空中写真測量により改測が行われた2万5千分の1地形図を編集して作成された5万分の1地形図を基礎資料として、地形図の読図による土地利用分類を行った。本図幅では昭和45(1970)年に2万5千分の1地形図の改測が行われ、それに基づき5万分の1地形図が作成されている。5万分の1地形図で読図が難しい範囲については、2万5千分の1地形図を補足的に用いて土地利用分類を行

った。作成した昭和 45（1970）年頃の土地利用分類図を図 4-2 に示す。



※行政界・鉄道・道路などは現在の情報

図 4-2 本図幅における約 40 年前(昭和 45(1970)年頃)の土地利用

### ①山地、丘陵地における土地利用

山地、丘陵地の土地利用をみると、比較的なだらかな山地や丘陵地においてゴルフ場などの大規模な開発が始まっており、大規模ニュータウンのうち、鷺沼台等の一部は既に宅地化している。また、各務原北部山地の北側では、山地を造成した人工平坦地に短大や養護学校の立地が始まっている。

### ②台地における土地利用

小牧台地は住宅団地が建設されるなどの変化がみられるが、後述の木曾川扇状地(犬山扇状地)と比較すると農地から建物用地へ転用された箇所は少ない。各務原台地や加茂野台地では平地の森林はほぼ消滅し、宅地や畑になっている。加茂野周辺台地は関市の市街地が大きく拡大し、岐阜・各務原周辺台地の西側は岐阜市の市街地と連続し、

建物用地が増加している。

### ③低地における土地利用

**木曾川扇状地(犬山扇状地)**では桑畑や平地林が建物用地や畑に変化しており、名鉄犬山線沿いを中心に宅地が増加しており、その周りには紡績工場などが立地している。土地利用の変化は水田を主体とする小牧台地と比べると大きく、桑畑が土地利用の主体であった木曾川扇状地(犬山扇状地)では、養蚕の衰退や名古屋都市圏の拡大により、より大きな土地利用の変化が生じたものと思われる。**長良川扇状地**では岐阜市市街地が拡大し、扇状地のほぼ全体が市街地となり、耕作地は北部の一部に残るのみとなった。古川、古々川の旧河道は盛土されて総合運動場や学校、宅地として利用されている。

**関盆地**など北側の山間の低地では、主要な道路沿いを中心に建物用地が増えているが、住宅団地は山麓部を中心に開発されており、低地の水田はあまり減少していない。

**羽島・一宮氾濫原**では岐阜市街地周辺や各鉄道路線沿いを中心に建物用地が増加しているが、水田が広がる氾濫原低地や湿地への宅地開発はあまり進んでいない。

木曾川の中州に位置する各務原市川島町は、網目状の流路が整理され、ほぼ現在と同様な流路となり、大きな中州になっている。桑畑や畑が残存する一方、橋梁が整備され、大きな工場が進出している。

昭和 45(1970)年頃は、減反政策が本格化しておらず、低地の水田は保持される傾向にあり、住宅地開発等は桑畑や山麓部の森林などが中心になっている。

## 4.2 土地利用変遷の概要

### (1) 土地利用面積の推移

図 4-3 と表 4-1 は、現在から概ね 120 年前及び 40 年前の 2 時期の土地利用分類図と、国土数値情報として提供されている 2006 年の土地利用細分メッシュデータに基づき、本図幅における**田**、**畑**(畑・その他農用地)、**森林等**(森林・荒地・水面)、**宅地等**(建物・その他の用地)の 4 つの主要な土地利用区分毎の面積を、各年代ごとに集計した結果である。

農地をみると、明治 29 (1896)年に**田**は約 103km<sup>2</sup>、**畑**は約 70km<sup>2</sup>であったものが、昭和 45 (1970)年には田は約 94km<sup>2</sup>、畑は約 52km<sup>2</sup>となり、田は 1 割ほどの減少で、畑は全体の 1/4 ほど減少している。平成 18 (2006)年には田は約 67km<sup>2</sup>、畑は約 33km<sup>2</sup>となり、明治期から比べると田は 6～7 割、畑は半分程度に減少している。市町村別にみると、田は岐阜市や関市、犬山市での減少が大きく、市街地化が著しかった岐阜市は明治期と比べて半減している。畑は岐阜市、各務原市、一宮市、江南市での減少が大きく、木曾川扇状地で桑畑が減少し、鉄道沿線で自然堤防上の畑地が宅地になった一宮市では明治期と比べて 1 割～2 割ほどまで減少している。

**森林等**は、明治 29 (1896)年には約 198km<sup>2</sup>であったものが、昭和 45 (1970)年には約 164km<sup>2</sup>となり、約 34km<sup>2</sup>(約 17%)減少している。平成 18(2006)年には約 137km<sup>2</sup>となり、明治期から比べると約 61km<sup>2</sup>(約 31%)減少している。市町村別にみると、関市、各務原市、犬山市で大きく減少しており、各務原台地の平野林が減少し、また、山地でのニュ

ータウン開発が盛んだった各務原市では、明治期と比べて 21 km<sup>2</sup> (約 43%)も減少している。

一方、**宅地等**は増加傾向にあり、明治 29 (1896)年には約 48km<sup>2</sup>であったものが、昭和 45 (1970)年には約 110km<sup>2</sup>となり、およそ倍増(約 230%)している。平成 18 (2006)年には約 182km<sup>2</sup>となり、明治期から比べると約 3.8 倍(379%)になり、土地利用の半分近くを占めるようになってきている。市町村別にみると、岐阜市、各務原市、関市などで増加しており、岐阜市では明治期から約 33km<sup>2</sup>拡大して約 45km<sup>2</sup>となり、各務原市では明治期から約 30km<sup>2</sup>拡大して約 41km<sup>2</sup>となっている。

## (2) 地形分類別土地利用面積の推移

明治期、昭和 40 年代、現在の 3 時期の土地利用面積を自然地形分類毎に集計・整理し、図 4-4、表 4-2 に示す。

全体的に田、畑、森林等はその地形要素においても減少傾向にあるが、**田**は氾濫低地等において昭和 45 (1970)年以降の減少が目立つ。**畑**は扇状地等において明治期から昭和 45 (1970)年にかけて大きく減少しており、これは桑畑の減少に伴う変化と思われる。**森林**は台地や扇状地において明治期から昭和 45 (1970)年にかけて大きく減少している。

一方、増加傾向にある**宅地等**は、明治期から昭和 45 (1970)年までは台地や扇状地等、低地の微高地での増加が目立つが、それらの地域は昭和 45 (1970)年以降は伸び悩み、替わって氾濫原低地等における宅地等の拡大が目立つ。

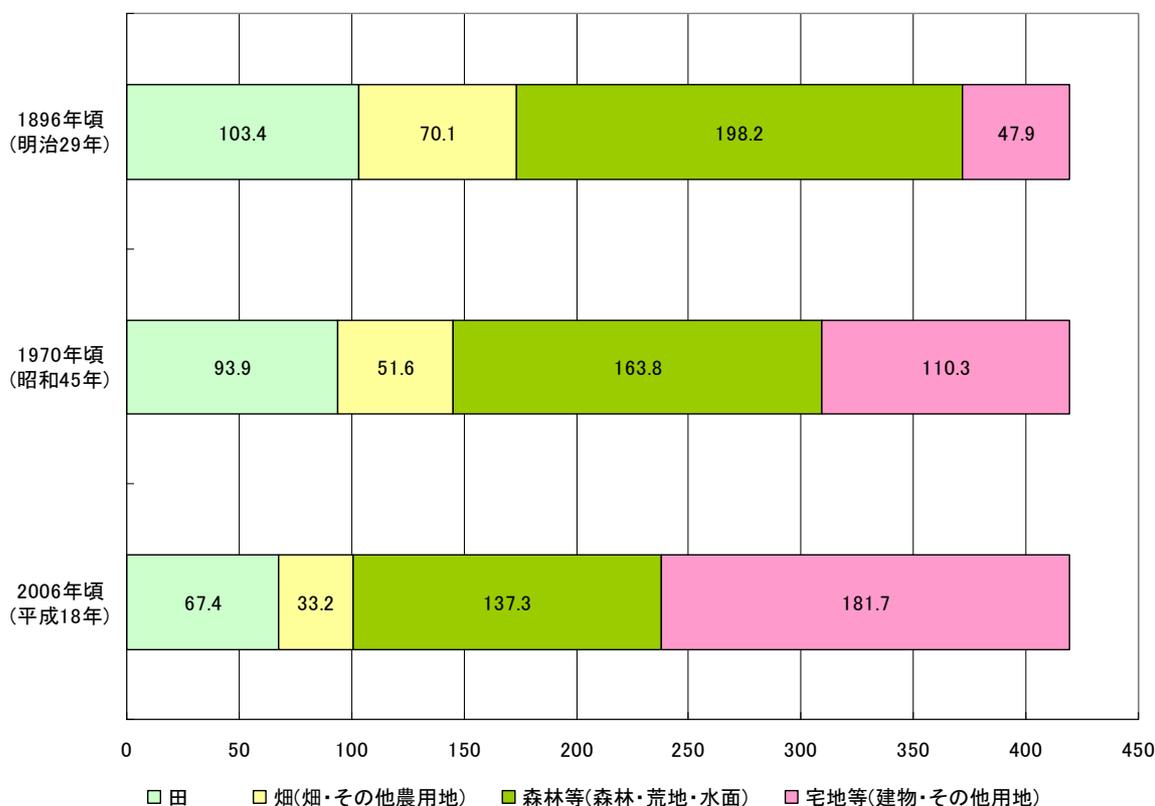


図 4-3 土地利用別面積の推移 (1896 年・1970 年・2006 年)

表 4-1 土地利用別面積の推移 (1896年・1970年・2006年)

市区町村		岐阜市	関市	羽島市	美濃加茂市	各務原市	可児市	山県市	岐阜市	笠松町	坂祝町	高加町	一宮市	犬山市	江南市	大町	扶桑町	合計
1896年 (明治29年)頃	田	30.4	21.4	0.0	3.7	12.9	0.3	1.7	3.3	2.5	2.3	3.5	6.4	9.9	1.5	2.4	1.2	103.4
	畑(畑・その他農業用地)	13.1	3.9	0.0	0.8	15.7	0.0	0.0	3.3	1.8	1.0	0.9	8.6	4.2	9.9	1.0	5.9	70.1
	森林等(森林・荒地・水面)	50.9	35.5	0.4	4.1	48.4	3.2	2.6	0.2	2.8	7.7	7.1	2.9	25.2	4.3	0.6	2.3	198.2
	宅地等(建物・その他用地)	12.3	4.7	0.0	1.0	10.8	0.0	0.6	1.1	1.2	0.7	1.0	3.8	4.3	3.7	0.9	1.8	47.9
1970年 (昭和45年)頃	田	23.5	20.3	0.0	3.4	12.1	0.4	1.4	4.1	1.8	2.3	3.8	6.8	9.2	1.1	2.3	1.4	93.9
		△ 6.9	△ 1.1	0.0	△ 0.3	△ 0.8	0.1	△ 0.3	0.8	△ 0.7	0.0	0.3	0.4	△ 0.7	△ 0.4	△ 0.1	0.2	△ 9.5
	畑(畑・その他農業用地)	5.7	3.4	0.0	3.1	16.1	0.0	0.0	1.2	0.5	1.6	1.6	2.9	3.8	7.2	0.6	3.9	51.6
		△ 7.4	△ 0.5	0.0	2.3	0.4	0.0	0.0	△ 2.1	△ 1.3	0.6	0.7	△ 5.7	△ 0.4	△ 2.7	△ 0.4	△ 2.0	△ 18.5
2006年 (平成18年)頃	田	46.8	31.2	0.4	1.4	36.6	3.1	2.4	0.1	3.1	6.0	5.6	3.1	20.1	2.6	0.0	1.3	163.8
		△ 4.1	△ 4.3	0.0	△ 2.7	△ 11.8	△ 0.1	△ 0.2	△ 0.1	0.3	△ 1.7	△ 1.5	0.2	△ 5.1	△ 1.7	△ 0.6	△ 1.0	△ 34.4
	畑(畑・その他農業用地)	30.6	10.6	0.0	1.8	22.9	0.1	1.1	2.4	3.0	1.8	1.5	8.9	10.5	8.5	2.0	4.6	110.3
		18.3	5.9	0.0	0.8	12.1	0.1	0.5	1.3	1.8	1.1	0.5	5.1	6.2	4.8	1.1	2.8	62.4
2006年 (平成18年)頃	田	15.6	15.3	0.0	3.3	10.4	0.1	0.8	1.7	1.1	2.1	3.6	4.2	6.1	0.6	1.6	0.9	67.4
		△ 14.8	△ 6.1	0.0	△ 0.4	△ 2.5	△ 0.2	△ 0.9	△ 1.6	△ 1.4	△ 0.2	0.1	△ 2.2	△ 3.8	△ 0.9	△ 0.8	△ 0.3	△ 36.0
	畑(畑・その他農業用地)	3.5	2.5	0.0	2.4	9.1	0.0	0.0	0.6	0.3	1.4	1.3	1.2	3.0	4.6	0.3	3.0	33.2
		△ 9.6	△ 1.4	0.0	1.6	△ 6.6	0.0	0.0	△ 2.7	△ 1.5	0.4	0.4	△ 7.4	△ 1.2	△ 5.3	△ 0.7	△ 2.9	△ 38.9
2006年 (平成18年)頃	森林等(森林・荒地・水面)	42.5	23.7	0.4	0.7	27.4	2.4	2.2	0.1	3.0	5.2	4.4	3.7	18.3	2.3	0.0	1.0	137.3
		△ 8.4	△ 11.8	0.0	△ 3.4	△ 21.0	△ 0.8	△ 0.4	△ 0.1	0.2	△ 2.5	△ 2.7	0.8	△ 6.9	△ 2.0	△ 0.6	△ 1.3	△ 60.9
	宅地等(建物・その他用地)	45.0	24.0	0.0	3.1	40.9	1.0	1.8	5.6	3.9	3.0	3.3	12.7	16.2	11.9	3.0	6.3	181.7
		32.7	19.3	0.0	2.1	30.1	1.0	1.2	4.5	2.7	2.3	2.3	8.9	11.9	8.2	2.1	4.5	133.8
合計		106.6	65.5	0.4	9.5	87.8	3.5	4.8	8.0	8.3	11.7	12.6	21.8	43.6	19.4	4.9	11.2	419.6

1. 1896年及び1970年は本調査で作成した土地利用分類図からの集計値。2006年は国土数値情報(土地利用細分メッシュ)による集計値
2. 1970年及び2006年の下段は、1896年の面積との比較値
3. 行政区画は2010年3月31日現在の区域を用いた。

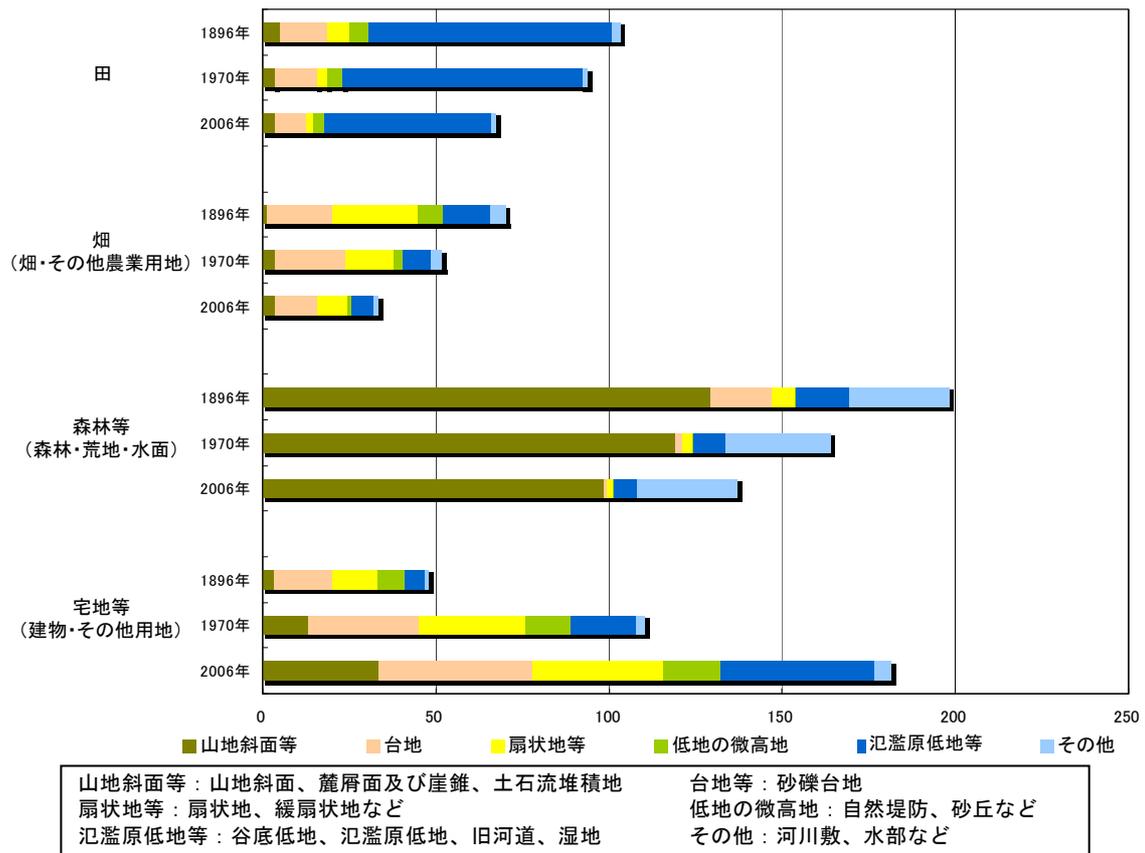


図 4-4 地形分類別の土地利用面積の推移 (1896年・1970年・2006年)

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移（1896年・1970年・2006年）

		(km <sup>2</sup> )						
年代	土地利用区分	地形区分		扇状地等	低地の 微高地	氾濫原 低地等	その他	合計
		山地斜面等	台地					
1896年 (明治29年)頃	田	4.9	13.9	6.2	5.6	70.2	2.5	103.3
	畑(畑・その他農業用地)	1.4	18.8	24.5	7.4	13.6	4.5	70.2
	森林等(森林・荒地・水面)	129.5	17.5	6.6	0.5	15.3	28.9	198.3
	宅地等(建物・その他用地)	3.5	16.7	12.9	7.8	5.9	1.2	48.0
1970年 (昭和45年)頃	田	3.6	12.3	2.8	4.7	68.9	1.5	93.8
		△ 1.3	△ 1.6	△ 3.4	△ 0.9	△ 1.3	△ 1.0	△ 9.5
	畑(畑・その他農業用地)	3.6	20.4	13.7	2.9	8.2	2.9	51.7
		2.2	1.6	△ 10.8	△ 4.5	△ 5.4	△ 1.6	△ 18.5
	森林等(森林・荒地・水面)	119.1	2.1	2.9	0.4	9.1	30.2	163.8
		△ 10.4	△ 15.4	△ 3.7	△ 0.1	△ 6.2	1.3	△ 34.5
	宅地等(建物・その他用地)	12.9	32.1	30.7	13.3	18.8	2.6	110.4
		9.4	15.4	17.8	5.5	12.9	1.4	62.4
2006年 (平成18年)頃	田	3.7	9.1	2.0	3.1	47.9	1.6	67.4
		△ 1.2	△ 4.8	△ 4.2	△ 2.5	△ 22.3	△ 0.9	△ 35.9
	畑(畑・その他農業用地)	3.6	12.4	8.5	1.4	6.2	1.4	33.5
		2.2	△ 6.4	△ 16.0	△ 6.0	△ 7.4	△ 3.1	△ 36.7
	森林等(森林・荒地・水面)	98.5	1.0	1.6	0.3	6.9	28.9	137.2
		△ 31.0	△ 16.5	△ 5.0	△ 0.2	△ 8.4	0.0	△ 61.1
	宅地等(建物・その他用地)	33.5	44.3	38.0	16.6	44.1	5.2	181.7
		30.0	27.6	25.1	8.8	38.2	4.0	133.7
合計		139.3	66.8	50.1	21.4	105.1	37.1	419.8

### (3) 人口集中地区の変遷

国勢調査では、昭和 35 (1960) 年以降 5 年ごとに「人口集中地区」(DID 区域)※が設定されている。本図幅を含む濃尾平野北東部の昭和 35 (1960) 年、昭和 55 (1980) 年、平成 17 (2005) 年の 3 時期の人口集中地区を図 4-5 に示す。

昭和 35 (1960) 年では人口集中地区は岐阜市、関市、各務原市、大垣市等の中心部のみであったものが、昭和 55 (1980) 年には中心市街地の周囲に拡大し、山地や丘陵地を開発したニュータウンが人口集中地区になっている。平成 17 (2005) 年には既存の人口集中地区の周囲での拡大は落ち着いてきたが、ニュータウンなどの新規の人口集中地区が各務原市を中心にみられる。

本図幅での人口集中地区の面積を地形分類の大まかな区分毎に整理して表 4-3 に示す。人口集中地区は低地や扇状地に広くみられるが、人口集中地区全体に対する低地や扇状地の人口集中地区の割合は、昭和 35 (1960) 年に 76.5%であったものが、昭和 55 (1980) 年には 64.1%、平成 17 (2005) 年には 63.6%となっている。台地の人口集中地区は面積は少ないものの、割合は増加しており、昭和 35 (1960) 年に 16.9%であったものが、昭和 55 (1980) 年には 25.4%、平成 17 (2005) 年には 26.2%となっている。

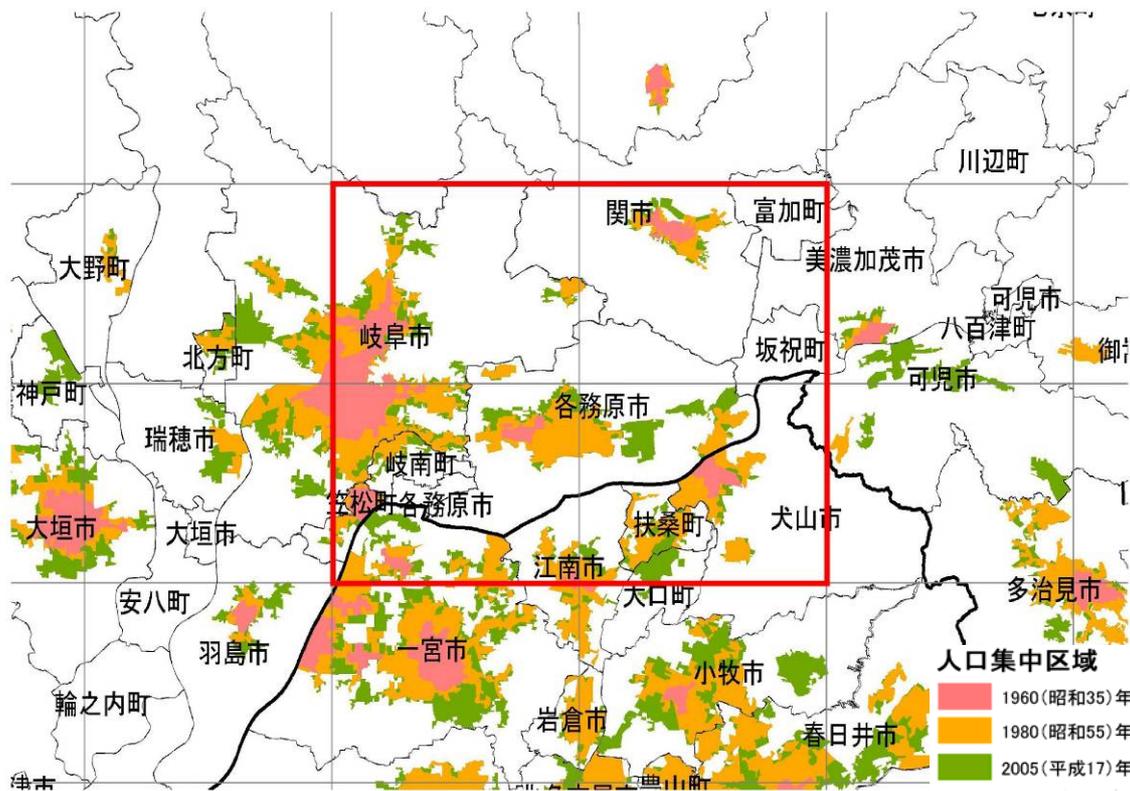
本図幅の人口集中地区の面積は昭和 35 (1960) 年に 21.3km<sup>2</sup>であったものが、昭和 55 (1980) 年には 71.4km<sup>2</sup>、平成 17 (2005) 年には 94.7km<sup>2</sup>となり、人口集中地区の面積が本図幅全体に対して 1/4 近くを占めるようになってきている。

※人口集中地区 (DID 区域) : 市区町村の境域内で人口密度の高い基本単位区 (原則として人口密度が 1 平方キロメートルあたり 4,000 人以上) が隣接して、その人口が 5,000 人以上となる地域をいう。都市的地域の特質を明らかにする統計上の地域単位として、昭和 35 年国勢調査から人口集中地区が設定されている。

表 4-3 地形分類別人口集中地区面積の推移

(km<sup>2</sup>)

区域 \ 分類	地形分類別面積				合計
	山地・丘陵地	台地	低地	その他	
「岐阜図幅」全域	139.3	66.8	199.3	14.3	419.7
1960年のDID	0.7	3.6	16.3	0.7	21.3
割合(%)	3.3	16.9	76.5	3.3	100.0
1980年のDID	5.5	18.1	45.8	2.0	71.4
割合(%)	7.7	25.4	64.1	2.8	100.0
2005年のDID	7.4	24.8	60.2	2.3	94.7
割合(%)	7.8	26.2	63.6	2.4	100.0



資料：国土数値情報(人口集中地区)

図 4-5 本図幅周辺における人口集中地区の推移(1960年・1980年・2005年)

## 5 調査地域の災害履歴概要

### 5.1 災害履歴概説

#### (1) 地震

濃尾平野に被害を及ぼす地震には、①南海トラフ沿いで発生する海溝型巨大地震、②陸域の浅い場所で発生する地震の2タイプが存在する(地震調査研究推進本部 2009)。

①のタイプは北太平洋沖合のプレート境界で発生する地震で、1854年の安政東海地震(M8.4)や1944年の東南海地震(M7.9)が該当する。90～150年程度の発生周期性があること(図5-1)、東海地震・南海地震との連動の可能性があり、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらすことが知られている。地震が発生した場合、市街地が広がる地域に被害を及ぼす可能性が高いことから、最も警戒されている地震であるといえる。本図幅にかかる全市町が「東南海・南海地震防災対策推進地域」に指定されている。

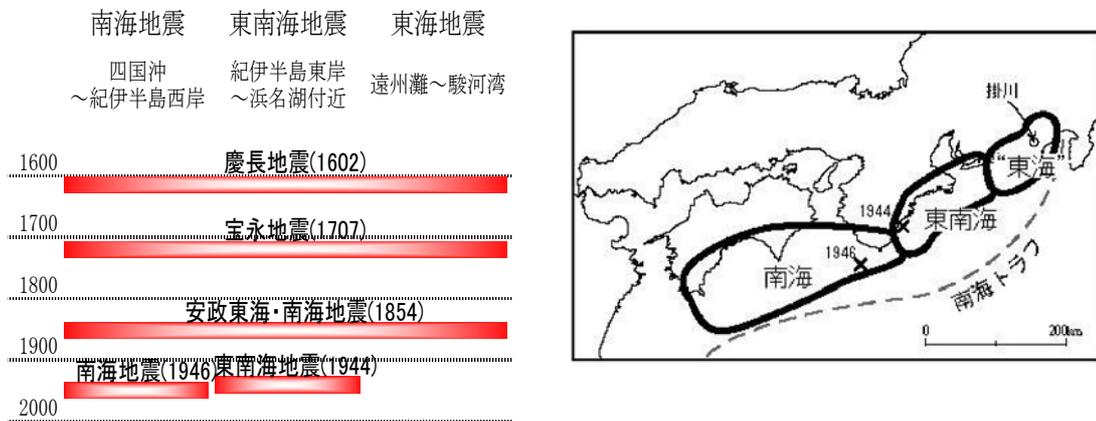


図 5-1 過去に発生したプレート境界型地震  
(中央防災会議 2008 より)

②のタイプは陸域の活断層によってもたらされる地震である。本図幅近辺には図 5-2 に示すような主要断層帯があり、これら長大な活断層の活動が発生すると大きな揺れを生じ、甚大な被害が発生することが知られている。これらのうちで過去 500 年以内に活動したのは 1586 年の阿寺断層帯(天正地震)と、1891 年の濃尾断層帯(根尾谷断層帯・濃尾地震)の 2 例である(中央防災会議, 2008)。

天正地震は、天正 13 年(1586)11 月 29 日に発生した。被害状況は飯田(1987)により詳しくまとめられており、これから概略を整理する。被害は、愛知県西部、岐阜県西部を中心に、近畿地方まで記録されており、尾張・伊勢・美濃・近江で震度 7、これらを取りまく飛騨・伊勢・大和・摂津などで震度 6 であったと推定される。被害状況の概要は表 5-1 に示すとおりで、岐阜県北部の白川郷周辺と濃尾平野でとくに大きな被害がみられた。白川郷周辺の帰雲山では山腹の大崩落によって生じた土石流が、保木脇の帰雲城を一瞬のうちに埋没させ、城主内嶋氏里一族外五百余人が死亡し、城下町の三百余軒も同時に滅亡した。濃尾平野では木曾川河口の長島付近で多くの被害があり、大垣城も倒壊・焼失し。伊勢湾奥部などでは津波も発生している。これらのことから、震源となる活断層について、荘川断層帯、阿寺断層帯、養老-桑名-四日市断層帯の諸説や、2 つ

以上の地震の同時発生（双子地震）説などがある。

濃尾地震については、次の詳説にて述べる。

そのほか、周辺地域で発生した地震としては、善光寺地震(1847)、江濃地震(1909)、三河地震(1945)などがある。

表 5-1 天正地震による推定被害の概要

(飯田 1987)

国名	死者	全壊建物
尾張	2,850	3,500
三河	10	20
伊勢	500	300
美濃	700	1,300
飛騨	700	800
近江	650	800
大和	30	50
山城	20	50
摂津	20	50
和泉	20	60
越前	20	50
若狭	100	150

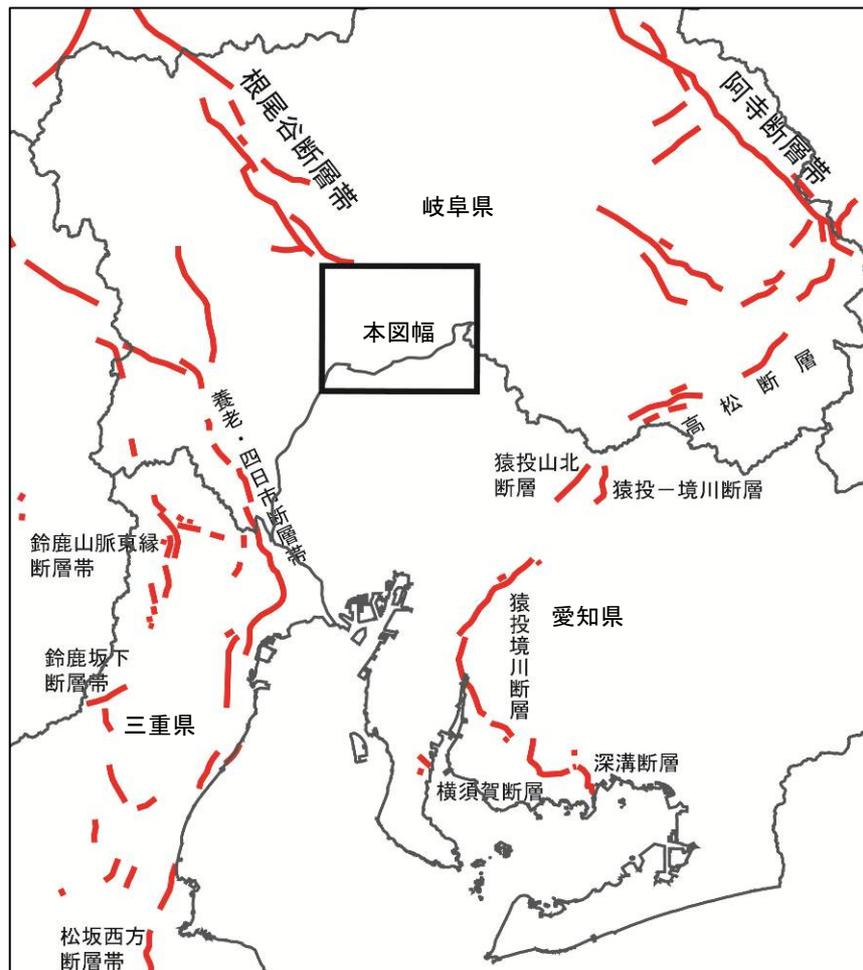


図 5-2 東海地方の主要活断層図

## (2) 風水害

### ① 地域の特徴と風水害の歴史

本図幅は、濃尾平野の北部に位置しており、木曾三川のうち、木曾川と長良川の流路が山地から平野へと変わる。とくに木曾川の変化点は犬山市を頂点とする典型的な扇状地がみられる。

木曾川は、扇状地上に幾筋もの流路を持っており、大雨の際にはこれらの流路で洪水が発生している。天正 14 年(1586)以前には、洪水の際に主流路が変わるほどの被害をもたらしたことも知られている(木曾三川～その流域と河川技術編集委員会, 1988)。

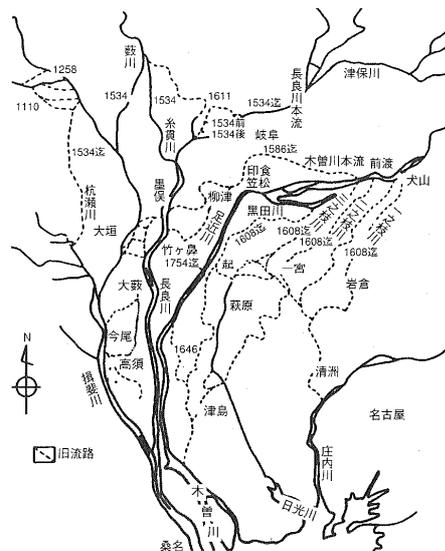


図 5-3 木曾三川の河道変遷(東海三県地盤調査会 1985)

長良川は、流路が山地から平野へ変わる岐阜市付近で顕著な扇状地を持たずにすぐに低地となる。そのため岐阜市より下流では浸水被害がたびたび発生している。また岐阜市より上流では支流の合流点付近で浸水被害がよく発生している。

近年は、これら主要河川の堤防決壊は発生していないが、現在でも中小河川などの内水氾濫がしばしば発生している。

図幅の北部から東部にかけては山地となっているが、起伏量が小さいため、顕著な土砂災害は発生していない。

### ② 歴史時代の顕著な風水害

風水害の経緯については、岐阜県は「岐阜県災異史」(岐阜県地方気象台 1965)、「岐阜県災異史 第2編」(岐阜県地方気象台・岐阜県 1993)、愛知県は「愛知県災害誌」(名古屋地方気象台監修 1970)、「愛知県災害誌(昭和 45～55 年)」(名古屋地方気象台 1982)、「愛知県史 別編自然」(愛知県史編さん委員会 2010)などに、詳細な記録が整理されており、さらに近年では、「岐阜県消防防災年報」、「災害の記録(愛知県)」に毎年の顕著な災害が記録されている。これらから、本図幅に関わりが深く、顕著な被害の発生した災害を抽出して災害年表を作成した。

近年の顕著な風水害については、詳説にて、浸水実績図と併せて報告するが、ここでは、災害年表のうちでも特に被害が大きな風水害について述べる。

上述の災害誌等には、大化5(649)年以降の災害が数多く記録されており、その中で各地の水位や破堤、氾濫などが記されている。顕著な被害がみられる災害のうち、宝亀6(775)年8月の防風は、木曾川が氾濫し、沿川で死者300余人、牛馬1,000余頭とある。その後も、木曾川の流路が変わるような大雨が多く記録されている。

天正14(1586)年の木曾川大洪水では、岐阜・愛知両県とも、数本の分派支流を生じ、下流の輪中堤も水中に没した。この洪水後、現在の木曾川筋となった。

慶応4(1868)年5月14日には、長雨により入鹿池(人造湖)の堤防が決壊した。土砂を伴う洪水を引き起こし、下流の集落を押し流した。五条川に沿って流れた土砂流は周辺の水田を埋め、被害は、丹羽、春日井、中島、海東の4郡133か村に及び、死者941人、負傷者1,471人、流出家屋807戸、浸水家屋11,079戸、流没耕地約8,400haにのぼった。「入鹿切れ」と呼ばれ、現在も語り継がれている。

その後も、豪雨などにより多くの災害が発生している。明治22(1889)年9月11日(台風)、大正元(1912)年9月23日(台風)、昭和28年9月25日(台風13号)、昭和34年9月26日(伊勢湾台風)の災害では、両県あわせて死者100名を超える大災害となっている。

### (3) 地盤沈下

昭和50年頃まで激しい沈下現象を示したが、この頃より沈下速度が減少し始め、その後は沈下速度の鈍化が続き近年はほとんど沈下がみられない。

一宮水象観測所及び飛島観測所の地下水位の観測結果より、地下水位の変動と地盤沈下の状況に深い関係がみられ、地下水位の低下により発生した地盤高の低下は、その後、地下水位の回復により収束傾向にある。

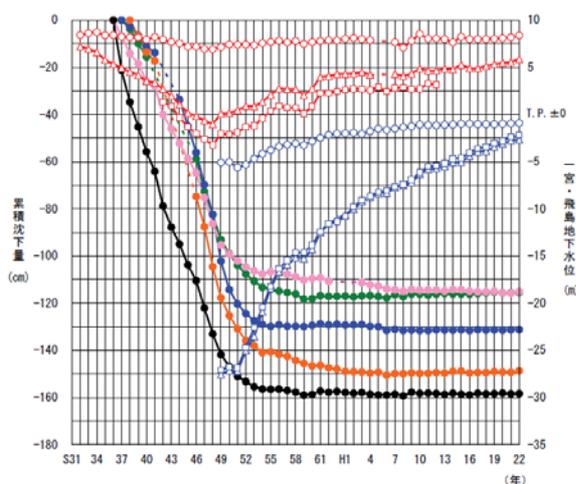


図5-4 水準点の累積沈下量と地下水位観測所の年平均地下水位

## 5.2 災害履歴詳説

### (1) 地震

#### ① 作図資料

本図幅の範囲で、記録が正確な明治以降に、多大な被害をもたらした地震としては、濃尾地震(明治 24(1891)年 10 月 28 日)と東南海地震(昭和 19(1944)年 12 月 7 日)がある。この 2 件について、被害の記録として建物被害率及び液状化発生地点を図化した。また、濃尾地震については図幅内にある地震断層の位置を示した。

表 5-2 地震に関する災害履歴図作成の概要

建物被害率	出典	(濃尾地震) 飯田没事(1979) 明治 24 年(1891 年)10 月 28 日濃尾地震の震害と震度分布. 愛知県防災会議 (東南海地震) 飯田没事(1977) 昭和 19 年 12 月 7 日東南海地震の震害と震度分布. 愛知県防災会議
	図化方法	文献に記録されている、市町村(当時)ごとの被害率(全壊数、半壊数、住家戸数)を、地図上に示した。自治体の位置は、旧版地形図にある当時の役場としたが、不明な場合は地名の位置とした。
液状化発生地点	出典	若松加寿江(2011) 日本の液状化マップ 745-2008. 東大出版会
	図化方法	文献に整理された液状化の発生地点を、精度別に図化した。
地震断層 (濃尾地震のみ)	出典	鈴木康弘・杉戸信彦編(2010) 1:25,000 岐阜県活断層図. 岐阜県
	図化方法	地震断層を転写した。

#### ② 濃尾地震

##### i. 地震の震源・規模

明治 24(1891)年 10 月 28 日午前 6 時に発生した濃尾地震は日本の内陸で発生した最大級の地震である。マグニチュード 8.0、震源は岐阜県本巣市根尾で、ここを中心として北西-南東方向に延びる根尾谷断層帯が延長約 80km にわたって活動した。なお、被害の状況からみて、変位が見られた根尾谷断層帯のほか、濃尾平野の地下の伏在断層がともに活動したというモデルも提示されている。

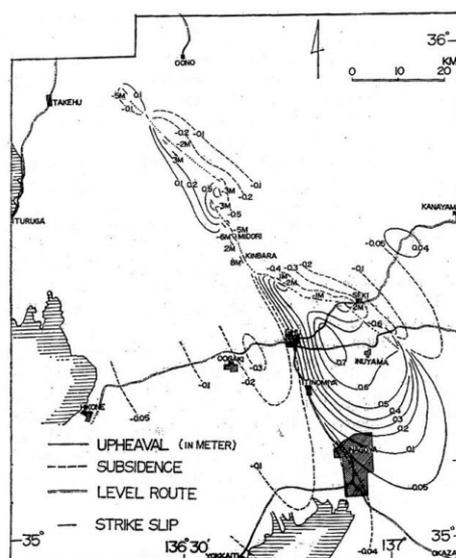


図 5-5 濃尾地震に伴う地殻変動(村松ほか, 1964)

濃尾地震の震動は北海道や南西諸島を除く全国で観測され、震源断層から濃尾平野にかけて震度7、福井県、岐阜県、滋賀県、愛知県、三重県の広い範囲で震度6の揺れが生じたと推定されている。

ii. 被害の概要

被害の概要を表5-3に示す。震源のある岐阜県と隣接する愛知県の被害が大半を占める。とくに震央にある根尾村付近では、100%の住宅が全壊という惨事であった。さらに、根尾谷断層帯に沿って被害率が高くなっているほか、岐阜市から愛知県北西部でも甚大な被害が発生している。

表5-3 濃尾地震による被害

死者	7,880 人
負傷者	21,329 人
住家(全壊)	93,421 戸
住家(半壊)	70,023 戸
非住家(全壊)	71,190 棟
非住家(半壊)	53,135 棟
道路破壊	20,067 箇所
橋梁損落	10,961 箇所
堤防壊裂	8,276 箇所
山嶽崩壊	10,224 箇所

(飯田,1979による)

表5-4 濃尾地震による府県別被害

	愛知県	岐阜県	福井県	滋賀県	三重県	大阪府	奈良県	石川県	兵庫県	静岡県	京都府	山梨県	富山県	長野県	計
死者(人)	2,638	5,184	12	16	1	23	1	2		3					7,880
負傷者(人)	7,705	13,365	98	48	17	86	1		1	2		2	2	2	21,329
住家(全壊)(戸)	39,093	52,690	1,075	153	235	110	27	7	12	4	12	1	1	1	93,421
住家(半壊)(戸)	32,059	35,546	1,073	366	445	419	20	49	42			2	1	1	70,023
非住家(全壊)(棟)	46,418	23,122	829	217	397	135	27	28	13	2	1	1			71,190
非住家(半壊)(棟)	23,596	12,787	15,271	410	307	706	7	32	8	5		6			53,135

(飯田,1979による)



### iii. 本図幅における被害の状況等

#### a) 建物被害

前項に示したとおり、本図幅は震源に近く、ほとんど全域が震度7の烈震に見舞われたと考えられている(飯田, 1979)。被害率は非常に高く、ほぼ全域で全壊率が10%を超えている。とくに根尾谷断層帯の南東部にあたる梅原断層沿いと、岐阜市南東部から黒田村(現 一宮市)一帯では50%を超え100%近い被害率を示している。なお、岐阜市などでは火災が発生したことが記録されている(中央防災会議 2006)が、地震による倒壊との区別は不明である。

#### b) 液状化

液状化の発生地点は、図幅内の平野部ほぼ全域で見られる。

#### c) 地震断層

本図幅の北東部には根尾谷断層帯の一部である梅原断層が、巖美村(現 山県市)から黒岩村(現 坂祝町)にかけてほぼ直線上に点在している。地震断層として示される地点は変位が認められた場所のため、点在しているが、連続的に伏在しているものと考えられる。

### ③ 東南海地震

#### i. 地震の震源・規模

昭和19(1944)年12月7日に発生した東南海地震の規模は、マグニチュード7.9で、震源域は三重県から愛知県沖とされる。南海トラフに沿った地域で発生した、プレートの沈み込み帯で発生した低角逆断層地震であり、断層は紀伊半島の先端から御前崎まで伸びている。

#### ii. 被害の概要

東南海地震の被害は、震動による被害や津波が報告されている。建物の被害は、震源に近い知多半島、渥美半島や、沖積平野が広く分布する地域で10%前後<sup>\*</sup>と大きな値となっている。

---

<sup>\*</sup>飯田(1977)は、当時の自治体毎に、被害率 = (全壊人家数 + 半壊人家数 / 2) / 全戸数として算出している。

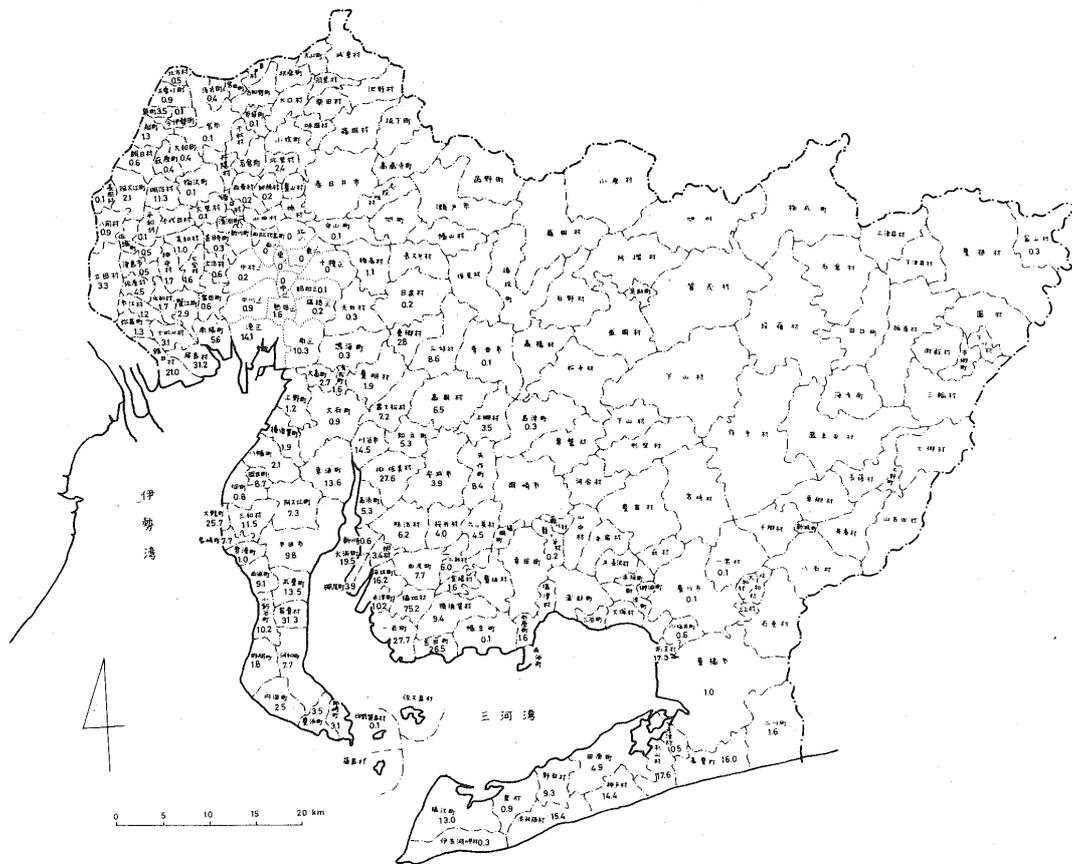


図 5-7 愛知県における住家被害率（飯田, 1977）

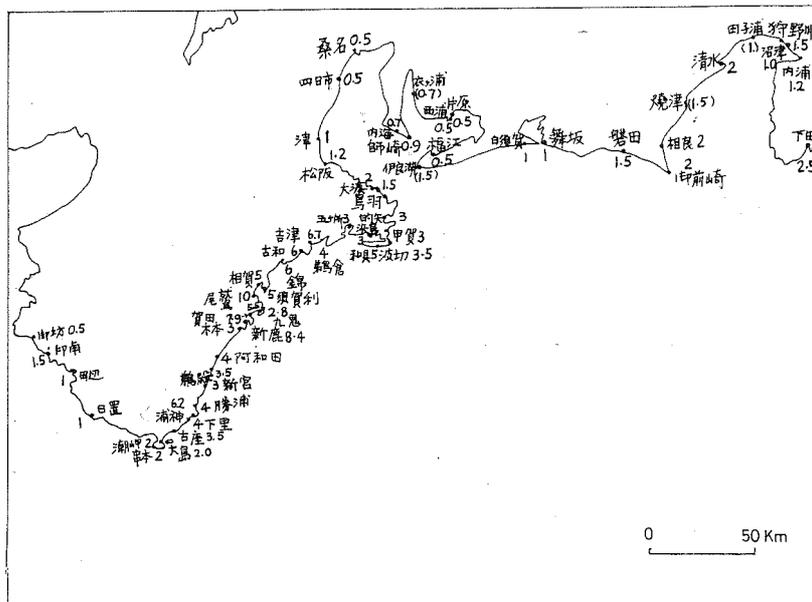


図 5-8 津波の波高分布（飯田, 1977） 単位：m

### iii. 本図幅における被害の状況等

本図幅は内陸部にあり、震度は低地で5～6、山地では5以下程度であったと推定される。そのため、家屋被害率は1%以下となっている。これらのうちでは、図幅南西部の低平地で被害率が大きくなっており、軟弱地盤が原因と考えられる。

液状化の発生地点は、平野部に点在している。

## (2) 風水害

### ① 作図資料

本図幅の範囲での風水害による災害は、木曾川、長良川及びこれらの支川・派川の破堤・氾濫が数多くある。概略は前述したとおりであるが、作図にあたっては、浸水範囲が記録されていること、地域を特徴づける顕著な災害であること、の2点を考慮し、以下の8期を抽出した。

土砂災害については、人家の少ない山地域で発生するためすべてが記録されているわけではなく、また災害（土砂移動現象）をまとめて整理された情報も少ない。そのため、記録が整っている近年の資料を可能な限り掲載したが、浸水実績図を作成した時期に対応するすべての豪雨時の災害を網羅したものではないことに留意されたい。

表 5-5 風水害に関する災害履歴図作成の概要

浸水実績	対象時期	① 昭和 34(1959)年 9 月 26 日 台風 15 号 (伊勢湾台風) ② 昭和 49(1974)年 7 月 25 日 集中豪雨 ③ 昭和 51(1976)年 9 月 12 日 台風 17 号 ④ 昭和 58(1983)年 9 月 28 日 台風 10 号 ⑤ 平成 2 (1990)年 9 月 17～20 日 台風 19 号 ⑥ 平成 12(2000)年 9 月 11・12 日 台風 14 号 (東海・恵南豪雨) ⑦ 平成 16(2004)年 10 月 台風 23 号 ⑧ 平成 20(2008)年 8・9 月 集中豪雨
	出典	(岐阜県) ①⑥⑦⑧岐阜県河川課資料 (GIS データ) ②岐阜・大垣周辺水害対策調査・災害要因調査報告書(岐阜県, 昭和 53 年 3 月) ③境川周辺地域河川防御対象氾濫区域図 (昭和 51 年 9 月洪水実績図) (境川流域対策研究会, 昭和 57 年 7 月) 河川防御対象氾濫区域図 (昭和 51 年 9 月洪水実績図) (岐阜県, 平成 5 年 3 月) ④昭和 58 年 9.28 災害誌(岐阜県消防防災課, 昭和 59 年 3 月) ⑤河川防御対象氾濫区域図 (平成 2 年 9 月洪水実績図) (岐阜県, 平成 5 年 3 月) 高富町浸水実績図・台風 19 号による大垣土木事務所管内浸水被害・垂井町浸水実績図 (岐阜県河川課資料)  (愛知県) ②③⑥ 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域) (愛知県河川課) 新川流域浸水実績図 (愛知県河川課) 日光川流域浸水実績図 (愛知県河川課) ⑧平成 20 年 8 月末豪雨 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域) 平成 20 年 8 月末豪雨 新川流域浸水実績図 平成 20 年 8 月末豪雨 日光川流域浸水実績図
	図化方法	浸水範囲を移写した。
土砂災害	対象時期	(岐阜県) 平成 16 年以降 (一部それ以前を含む) (愛知県) 平成 11・12 年
	出典	(岐阜県) 岐阜県林務課資料・ (愛知県) 愛知県砂防課資料
	図化方法	各県資料を災害発生日の地点の情報として移写した。

② 昭和 34(1959)年 9 月 (伊勢湾台風)

i. 気象状況

広い暴風域を伴った台風が、9 月 26 日に潮岬に上陸し、濃尾平野の西を進んだため、東海地方の主要部で被害が集中した。前日の 25 日より雨が降り始め、26 日午前中には天候はやや回復したが、台風通過時の 21～23 時には強風を伴った猛烈な豪雨となり、揖斐川・長良川流域では 60～80mm/h の既往最大時間雨量を記録した。木曾川・矢作川・豊川流域に置いても最大 40～60mm/h を記録した。

強風により発生した高潮により、名古屋港付近で 21 時 35 分に平均干潮位+5.31m に達し、海から低平地へと浸水が発生した。

表 5-6 主な観測値

昭和34年台風第15号(伊勢湾台風)		
項目	観測所	観測値
最大瞬間風速	名古屋	45.7 m/s
	岐阜	44.2 m/s
	伊良湖岬	55.3 m/s
日降水量	名古屋	104.2 mm
	岐阜	87.4 mm

ii. 災害規模

この災害で特に大きな被害が発生したのは木曾三川の河口部及び伊勢湾奥部に位置する愛知県名古屋市南区、港区、半田市、海部郡弥富町、飛島村、三重県木曾岬村、長島町等である。これらの地域では高潮による破堤により浸水が生じたが、名古屋市南区などでは貯木場から流失した大量の流木による被害が大きく、木曾岬村などの干拓地では流速のある高潮に、家屋が高い確率で流失した。

表 5-7 被害概要

	愛知県	岐阜県	三重県	その他	計
死者(人)	3,083	87	1,211	297	4,678
行方不明(人)	295	17	62	73	447
負傷者(人)	62,305	1,709	5,688		38,921
家屋全壊(戸)	23,334	4,026	5,386		40,838
流失(戸)	3,194		1,339		
半壊(戸)	97,049	12,338	17		113,052
床上浸水(棟)	53,560	2,400	30,852		157,858
床下浸水(棟)	62,831	8,875	31,803		205,753

死者・行方不明者は中央防災会議(2008)、  
3県の負傷者・家屋被害は各県災害誌、  
合計の負傷者・家屋被害は消防白書による。

沿岸部周辺では広い範囲で高潮による被害を受け、長期間にわたる湛水が生じたが、木曾三川の中流部では降雨による浸水が発生した。

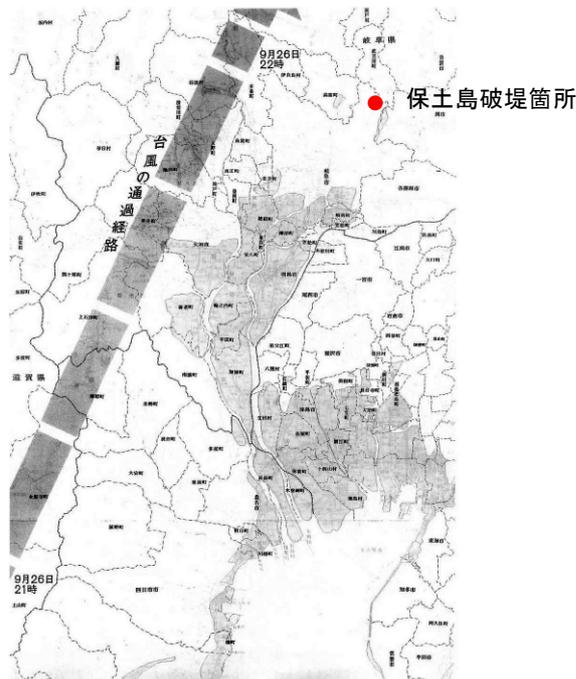


図 5-9 伊勢湾台風の経路と浸水区域

出典：『次代にひきつぐあの教訓 伊勢湾台風』  
 (伊勢湾台風 30 年事業実行委員会伊勢湾台風)

iii. 図幅内の災害発生

本図幅での被害は、山地部での大雨による浸水被害である。かなり大まかではあるが、岐阜市南部・穂積町から南西にかけて、岐阜県側が広く浸水した。岐阜市西部を中心とする平野部では、さらに、昭和 35 年 8 月、昭和 36 年 6 月にも豪雨により水害が発生している。芥見右岸の保土島では、3 年間連続して破堤溢水した。

③ 昭和 49 年 7 月

i. 気象状況

5 月末から 8 月初めにかけて、梅雨前線により全国で大雨となった。7 月 24～28 日は、台風 11 号の弱まった温帯低気圧が紀伊半島から日本海に進み、東海地方で大雨を降らせた。昭和 49 年 7 月 24 日夜半から強い雨が降り始め、25 日朝から昼頃にかけて揖斐川、長良川流域を中心に大雨となった。

表 5-8 日降水量観測値

昭和49年集中豪雨		
項目	観測所	観測値
日降水量	名古屋	98.5 mm
	岐阜	243.0 mm

気象庁HP「災害をもたらした気象事例」による

ii. 災害規模

木曾川、長良川の上流に降った大雨により、河川が増水し、愛知・岐阜県とも広い範囲で浸水被害が発生した。

表 5-9 被害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)	1	1
負傷者(人)	7	2
家屋全壊(戸)	7	
半壊(戸)	43	19
床上浸水(棟)	7,248	2,421
床下浸水(棟)	74,035	21,641

愛知県災害誌、岐阜県災異史による

iii. 図幅内の災害発生

本図幅では、木曾川の派川、長良川の下流部など、広い範囲で浸水が発生し、被災の中心部となった。

④ 昭和 51 年 9 月

i. 気象状況

台風 17 号は九州西岸を通過した台風であったが、長期間九州南西沖で停滞し、四国から関東へ伸びる前線を活発化させたために、各地に大雨をもたらした。岐阜県では長良川上流で 1,000mm を超える雨となった。

表 5-10 主な観測値

昭和51年台風17号		
項目	観測所	観測値
期間降水量 9/8～14	名古屋	422.5 mm
	岐阜	839.0 mm
日降水量	名古屋	98.5 mm
	岐阜	243.0 mm

気象庁HP「災害をもたらした気象事例」による

ii. 災害規模

長良川を中心に、各地で浸水が発生した。長良川右岸の安八町では堤防が決壊して多くの家屋に浸水被害が発生した。

表 5-11 被害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)	1	9
負傷者(人)	37	22
家屋全壊(戸)	14	22
半壊(戸)	435	181
床上浸水(棟)	13,488	24,519
床下浸水(棟)	103,311	51,405

愛知県災害誌、岐阜県災異史による

iii. 図幅内の災害発生

本図幅では、昭和 49 年の水害と同様に、岐阜市南西部を中心として広いエリアが浸

水した。

⑤ 昭和 58 年 9 月

i. 気象状況

台風 10 号は前述の昭和 51 年台風 17 号と同様なコースをたどり、やはり前線の活動を刺激した。これにより、9 月 27～28 日に、愛知県北部から岐阜県中部にかけての木曾川流域で大雨となった。

表 5-12 主な観測値

昭和58年台風10号		
項目	観測所	観測値
日降水量(28日)	豊田	175 mm
	小原	271 mm
	金山	177 mm
	八幡	167 mm

ii. 災害規模

この大雨で、木曾川の水位が上昇し、木曾川中流部の美濃加茂市で溢水して市街地が広く浸水した。

表 5-13 被害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)		5
負傷者(人)		4
家屋全壊(戸)	2	8
半壊(戸)	1	35
床上浸水(棟)	762	1,914
床下浸水(棟)	16,974	1,589

愛知県災害誌、岐阜県災異史による

iii. 図幅内の災害発生

浸水は、美濃加茂市から坂祝町に至る範囲で、本図幅の東部にかかる地域である。

⑤ 平成 2 年 9 月

i. 気象状況

台風 19 号は 19 日夜に紀伊半島に上陸後、本州を縦断し、20 日 12 時前に岩手県宮古市付近から三陸沖に進み、温帯低気圧に変わった。この台風が接近した 17 日頃から全国各地で大雨となった。西日本では期間降水量が 1,000mm を超えた。

表 5-14 主な観測値

平成2年台風19号		
項目	観測所	観測値
期間降水量 17～20日	樽見	518 mm
	関ヶ原	417 mm
	豊田	185 mm
	一宮	289 mm

気象庁HP「気象統計情報」、「岐阜県災異史」による

ii. 災害規模

この雨による災害は東海地方のみならず、広く全国で発生した。とくに岡山県や鹿児島県奄美大島で被害が大きかった。

表 5-15 被害概要

	愛知県	岐阜県	全国
死者行方不明(人)		1	44
負傷者(人)	30	1	197
家屋全壊(戸)	2	1	240
半壊(戸)	28	19	816
床上浸水(棟)	261	345	8,333
床下浸水(棟)	3,481	1,691	58,029

資料:愛知県災害誌(9/17からの大雨と台風19号の被害を合算)  
岐阜県災害誌、災害白書

iii. 図幅内の災害発生

岐阜市の長良川沿い、市街地の一部、南部、山県市の各地で浸水した。

⑥ 平成 12 年 9 月 (東海・恵南豪雨)

i. 気象状況

日本付近に停滞していた秋雨前線に、台風 14 号からの温かく湿った空気が多量に流れ込み、前線の活動が著しく活発となり、愛知県を中心とした東海地方では記録的な大雨となった。9 月 11～12 日の 2 日間の総降水量は名古屋で 567mm、東海市で 589mm などである。名古屋地方気象台で記録した最大日降水量(428mm)は、明治 29 年の既往最大記録の 2 倍近い雨量であった。岐阜県では東濃地方で降水量が多く、“恵南豪雨”と呼ばれる。

ii. 災害規模

名古屋市の新川が約 100mにわたり破堤したほか、庄内川や天白川でも越水するなど、愛知県を中心に被害が発生し、伊勢湾台風以来の浸水害となった。

表 5-16 被害概要

	愛知県	岐阜県	全国
死者(人)	7	1	10
負傷者(人)	107	1	115
家屋全壊(戸)	18	11	31
半壊(戸)	154	12	172
床上浸水(棟)	22,078	101	22,894
床下浸水(棟)	39,728	307	46,943

資料:愛知県『平成12年9月11日からの大雨による災害の記録』

岐阜県消防防災年報,防災白書

iii. 図幅内の災害発生

愛知県内では、青木川などの河川沿いで越水が、また随所で内水氾濫が発生した。岐阜県では岐阜市南東部で内水氾濫が発生している。

⑦ 平成 16 年 10 月

i. 気象状況

台風 23 号は 10 月 20 日に四国に上陸した後、本州を横切り 21 日朝鹿島灘へ抜けた。本州付近に停滞していた前線の活動が活発になり、西日本から東北地方の広い範囲で暴風、大雨、高波となった。

表 5-17 主な観測値

平成16年台風23号		
項目	観測所	観測値
日降水量	一宮	144 mm
	岐阜	130 mm
	八幡	275 mm

気象庁HP「気象統計情報」による

ii. 災害規模

この台風の被害は東北から沖縄までの広い範囲に及んだが、とくに近畿地方の被害が大きく、7水系9河川で計画高水位を超え、円山川水系では破堤による浸水被害が発生、京都府舞鶴市では由良川の増水に伴う道路冠水により観光バス等が立ち往生した。

表 5-18 被害概要

	愛知県	岐阜県	全国
死者行方不明(人)	1	8	98
負傷者(人)	18	3	552
家屋全壊(戸)		15	893
半壊(戸)		50	7,762
床上浸水(棟)	21	861	14,289
床下浸水(棟)	160	2,062	41,120

資料:愛知県災害の記録、岐阜県消防防災年報、防災白書

iii. 図幅内の災害発生

東海地方では、長良川上流部の降水が大きく、関市から岐阜市東部の長良川沿いで広く溢水氾濫が発生している。

⑧ 平成 20 年 8・9 月

i. 気象状況

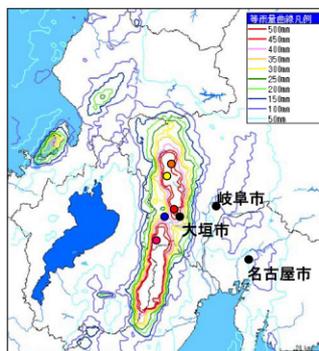
8 月 26 日から 31 日まで、低気圧及び前線の影響で、東海、関東、中国及び東北地方などで記録的な大雨となった。岡崎市では 29 日に観測史上 1 位を更新する 1 時間雨量 146.5mm に達した。

さらに、9 月 2 日から 3 日にかけては、岐阜県西濃地方で記録的な豪雨となった。

表 5-19 主な観測値

平成20年8月末豪雨、西濃豪雨		
項目	観測所	観測値
日降水量	名古屋	144 mm
	豊田	78 mm
	岐阜	86 mm
9月2日	揖斐川	191 mm
9月3日	大垣	46 mm

気象庁HP「気象統計情報」による



9月2～3日の降水量  
(国土交通省木曾川上流河川事務所)

ii. 災害規模

東海地方を中心に災害が発生し、河川は矢作川水系伊賀川等4水系4河川で計画高水位を超えた。土砂災害については14都県31市町村で54件発生した。

表 5-20 被害概要

	愛知県	岐阜県
死者(人)	2	
負傷者(人)	5	
家屋全壊(戸)	5	
半壊(戸)	3	3
床上浸水(棟)	2,477	60
床下浸水(棟)	14,108	336

資料:愛知県災害の記録、岐阜県消防防災年報  
(岐阜県は8月28～29日と9月2～5日の合算)

iii. 図幅内の災害発生

愛知県では、一宮市の木曾川町市街地周辺が広く浸水し、それ以外に江南市、扶桑町、大口町などで浸水が多く発生した。岐阜県では岐阜市南東部で浸水が発生した。

(3) 土砂災害

本図幅は一部に30～40°の急峻な斜面からなる山地があるが、起伏量が小さく、大規模な災害は発生していない。平成12、16年の豪雨時に土砂災害が記録されている。

## 6 調査成果図の見方・使い方

### 6.1 地形分類図

#### (1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、形成時期が新しく、未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部から氾濫原低地へと広がる、主として砂や礫からなる、傾斜の緩やかな扇状の堆積地域。
	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる、やや傾斜の急な扇状の堆積地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角洲・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	砂丘	風によって生じた、砂からなる波状の堆積地形。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周囲の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

#### (2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である（表 6-2）。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近では土地本来の自然の状況（自然地形）がわ

からなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、池沼を埋め立てた「埋立地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせて活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に 0.5m 以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てて造成された土地。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

### (3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的な可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・三角州・海岸低地・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、高潮や洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害		
自然 地形が 分布する 地域	山地	山地斜面	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。	急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。	
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
		土石流堆積地	傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
	台地	砂礫台地 (更新世段丘) (完新世段丘)	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。	通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することもある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することもある。逆に低地との間に高さが有る台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることも有効である。	
	低地	緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。	洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。	
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	異常な洪水時に浸水することもあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。	
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。	明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することもある。	
湿地		地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。	盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。		
	砂丘	地震の揺れが増幅され、液状化の可能性はある。傾斜地や造成した土地では崩壊の可能性はある。	比高の小さい砂丘では洪水等で冠水することもあるが、排水は速やかである。		
	天井川及び天井川沿いの微高地	地震の揺れで天井川の堤防が崩壊、決壊等した場合、周辺の低地部への流水の可能性はある。	河川の増水による、周辺の低地部への流水の可能性はある。		
人工 地形が 分布する 地域	山地・台地等	人工平坦地 (宅地等)	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		人工平坦地 (農地等)	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		改変工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	
	低地	盛土地	谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することもあるが、概ね排水は速やかである。
			氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
			旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		埋立地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。	周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。	切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。			
旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。			

## 6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 120 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 120 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 40 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稻、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

## 6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごとに分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1 cm が現地の 500 m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、

地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

#### 6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化等の地震災害の、大きく2つが考えられる。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でのどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。本図幅においては、地理的には岐阜市や名古屋市の通勤圏に含まれ、地形的には地形改変の行われていない山麓部の小起伏地や低地部の氾濫原低地等もまだ多く残っており、これからも開発余地がある地域といえる。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定

できることから、麓斜面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

## 7 引用資料及び参考文献

### 7.1 引用資料

#### (1) 人工地形及び自然地形分類図

①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図（国土地理院）を基本資料とし、以下の資料を引用または利用して編集した。編集にあたっては、空中写真の補足判読により一部修正を行った。

国土地理院(1973):1:25000 土地条件図「岐阜」。

岐阜県(1985):5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜」。

愛知県(1983):5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜・美濃加茂・瀬戸」。

判読に使用した空中写真は、

M532 (昭22.10.7 米軍撮影)、M628-1 (昭22.11.1 米軍撮影)、

M628-2 (昭22.11.1 米軍撮影)。

②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「美濃関」（平成19年更新）「岐阜北部」（平成19年更新）「犬山」（平成9年修正）「岐阜」（平成19年更新）の読図及び空中写真（CCB-2006-2X, 国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成18年時点の地形の状況を反映している。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫（奈良大学）、藤本潔（南山大学）、堀和明（名古屋大学）の各氏の指導をいただいた

#### (2) 土地利用分類図

「土地利用分類図」は、現在から約100年前（1896年頃）及び約50年前（1969年頃）の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

##### 【第1期（明治期、1896年頃）】

5万分1地形図「岐阜」明治29年測図（大正元.8.15発行）

（西端部のみ5万分1地形図「大垣」明治39年測図（大正元.8.15発行））

##### 【第2期（昭和期、1970年頃）】

5万分1地形図「岐阜」昭和46年編集（昭和48.4.30発行）

なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成9年修正）である。

#### (3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

##### 【水害】

①1959年9月水害

- ・浸水範囲を、伊勢湾台風30周年記念事業委員会(1989)『次代にひきつぐあの教訓 伊勢湾台風』より転載。

②1974年7月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県(1978)『岐阜・大垣周辺水害対策調査・災害要因調査報告書』
- ・愛知県河川課『浸水実績図(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』
- ・愛知県河川課『新川流域浸水実績図』
- ・愛知県河川課『日光川流域浸水実績図』

③1976年9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・境川流域対策研究会(1982)『境川周辺地域河川防御対象氾濫区域図(昭和51年9月)』
- ・岐阜県(1997)『河川防御対象氾濫区域図(昭和51年9月洪水実績図)』
- ・愛知県河川課『浸水実績図(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』
- ・愛知県河川課『新川流域浸水実績図』
- ・愛知県河川課『日光川流域浸水実績図』

④1983年9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県消防防災課(1984)『昭和58年9.28災害誌』

⑤1990年9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県(1997)『河川防御対象氾濫区域図』(平成2年9月洪水実績図)』
- ・岐阜県河川課『高富町浸水実績図』

⑥2000年9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県河川課提供浸水範囲データ
- ・愛知県河川課『浸水実績図(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』
- ・愛知県河川課『新川流域浸水実績図』
- ・愛知県河川課『日光川流域浸水実績図』

⑦2004年10月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県河川課提供浸水範囲データ

⑧2008年8・9月水害

浸水範囲を以下の資料より転載

- ・岐阜県河川課提供浸水範囲データ
- ・愛知県河川課『平成20年8月末豪雨 新川流域浸水実績図』
- ・愛知県河川課『平成20年8月末豪雨 日光川流域浸水実績図』

【土砂災害】

①岐阜県

- ・岐阜県林務課が記録している災害位置図を転載した。記録は平成16年以降であるが、そ

れ以前の記録も一部にある。

②愛知県

- ・2000（平成12）年9月降雨（台風14号：東海豪雨）前後の土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課資料より転記した。

【地震災害】

①1891 年濃尾地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1979）『明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008 (DVD-ROM付き) (No:JLM1473)』より転載。
- ・地震断層は、鈴木康弘・杉戸信彦編（2010）『1:25,000 岐阜県活断層図』より転載。

②1944 年東南海地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1977）『昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008 (DVD-ROM付き) (No:JLM1473)』より転載。

【地盤沈下】

- ・中部地方整備局「東海三県地盤沈下調査会 地盤沈下データ」より転載。

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、数値地図50000（地図画像）、数値地図25000（土地条件）及び基盤地図情報を使用した。（承認番号平23情使、第492号）

## 7.2 参考文献

本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした(50音順)。

### 論文・書籍・報告書など

- 愛知県(1983) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜・美濃加茂・瀬戸」,愛知県企画部土地  
地利用調整課.
- 愛知県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「桑名・名古屋南部」,愛知県企画部土地利  
用調整課.
- 愛知県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「津島・名古屋北部」,愛知県企画部土地利  
用調整課.
- 愛知県河川課(2008) 平成20年8月豪雨 浸水実績図(新川流域),愛知県.
- 愛知県河川課(2008) 平成20年8月豪雨 浸水実績図(日光川流域),愛知県.
- 愛知県河川課(2001) 矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域浸水実績図(昭  
和49年7月豪雨・昭和50年7月豪雨、昭和51年9月豪雨・平成3年9月台風18号・平成12年  
9月豪雨),愛知県及び12市町村.
- 愛知県河川課(1983) 日光川流域浸水実績図(昭和49年豪雨・昭和51年9月豪雨),愛知県及び22市  
町村.
- 飯田汲事(1979) 明治24年(1891年)10月28日濃尾地震の震害と震度分布,愛知県防災会議地震部  
会,304p.
- 飯田汲事(1979) 明治24年(1891年)10月28日濃尾地震の震害と震度分布,愛知県防災会議.
- 飯田汲事(1977) 昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布,愛知県防災会議.
- 飯田汲事(1978) 昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布,愛知県防災会議.
- 井関弘太郎(1988) 木曾川の地形史. 地学雑誌, 97, 2, 69-79.
- 海津正倫(1979) 更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程. 地理学評論, 52, 4, 199-208.
- 海津正倫(1988) 濃尾平野における縄文海進最盛期頃の海水準と地形変化. 日本における沖積平野・沖  
積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究, 科学研究費補助金総合研究(A)  
61302084 研究成果報告書(昭和61-62年度) 115-122.
- 海津正倫(1992) 木曾川デルタにおける沖積層の堆積過程と地形発達. 名古屋大学加速器質量分析計  
業績報告書, 3, 29-36.
- 大矢雅彦(1956) 木曾川流域濃尾平野水害地形分類図. 総理府資源調査会資料第46号, 水害地域に関  
する調査研究 第1部.
- 岡田篤正(2011) 天正地震とこれを引き起こした活断層, 活断層研究 35, 1-35.
- 小野映介・海津正倫・川瀬久美子(2001) 濃尾平野北東部における埋積浅谷の発達と地形環境の変化.  
第四紀研究, 40, 4, 345-352.
- 小野映介(2004) 濃尾平野における完新世後期の海岸線変化とその要因. 地理学評論, 77, 2, 77-98.
- 岐阜県(1978) 昭和52年度岐阜・大垣周辺水害対策調査災害要因調査報告書, 岐阜県.
- 岐阜県(1983) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「大垣」.
- 岐阜県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜」.
- 岐阜県(1987) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「瀬戸・明智・根羽」.
- 岐阜県(1992) 河川防御対象氾濫区域図(昭和51年9月洪水実績図)岐阜・西濃, 岐阜県.

岐阜県(1992) 河川防御対象氾濫区域図(平成2年9月洪水実績図)揖斐川, 岐阜県.

岐阜県(2001) 河川防御対象氾濫区域図(平成12年9月洪水実績図), 岐阜県.

岐阜県(各年) 岐阜県消防防災年報 平成9年~各年, 岐阜県消防課.

岐阜県河川課( ) 平成2年9月台風19号による出水, 岐阜県.

岐阜県・岐阜市・高富町(1983) 鳥羽川周辺地域浸水実績図(昭和51年9・12豪雨), .

岐阜県・岐阜地方气象台(1993) 岐阜県災異誌(第2編/昭和40年~平成4年), 岐阜地方气象台.

岐阜県県土整備部河川課( ) 浸水実績図データ S34 伊勢湾台風, 岐阜県.

岐阜県県土整備部河川課( ) 浸水実績図データ S51.9 水害, 岐阜県.

岐阜県県土整備部河川課( ) 浸水実績図データ H16 台風23号, 岐阜県.

岐阜県県土整備部河川課( ) 浸水実績図データ H20.8 豪雨, 岐阜県.

岐阜県消防防災課(1984) 昭和58年9.28災害誌, 岐阜県.

岐阜県土木部河川課(1994) 昭和51年9月洪水浸水実績図, 岐阜県.

岐阜新聞社(2002) 岐阜県災害誌, 岐阜新聞社.

岐阜地方气象台編(1965) 岐阜県災異誌, 岐阜地方气象台.

桑原 徹(1968) 濃尾盆地と傾動地塊運動. 第四紀研究, 7(4), 235-247.

経済企画庁(1972) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「豊田」. 経済企画庁.

経済企画庁(1974) 地形分類図. 20万分の1土地分類調図「愛知県」, 経済企画庁.

国土交通省(2011) 1/50,000 土地分類基本調査(土地履歴調査成果)「大垣」「名古屋北部」「瀬戸」

国土庁(1975) 地形分類図. 20万分の1土地分類調図「岐阜県」, 国土庁.

国土地理院(1974) 1/25,000 土地条件図「岐阜」.

国土地理院(1975) 土地条件調査報告書(濃尾地域), 87p.

国土地理院5万分1地形図「岐阜」明治29年測図(大正元.8.15発行)

国土地理院5万分1地形図「大垣」明治39年測図(大正元.8.15発行)

国土地理院5万分1地形図「岐阜」昭和46年編集(昭和48.4.30発行)

国立天文台編(2011) 理科年表 平成24年, 丸善出版.

境川流域対策研究会(1982) 境川周辺地域浸水実績図(昭和51年9・12豪雨), 同研究会.

鈴木康弘・杉戸信彦編(2008) 1:25,000 岐阜県活断層図, 岐阜県.

須貝俊彦・杉山雄一(1999) 深層ボーリング(GS-NB-1)と大深度地震探査に基づく濃尾傾動盆地の沈降・傾動速度の総合評価. 地質調査所速報, no. EQ/99/3, 77-87.

多治見市(1987) 多治見市史 通史編 下, 多治見市.

中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会(2006) 1891 濃尾地震 報告書, 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会.

中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会(2008) 1959 伊勢湾台風 報告書, 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会.

東海三県地盤沈下調査会(2011) 平成22年における濃尾平野の地盤沈下の状況, 東海三県地盤沈下調査会.

名古屋地方气象台(1962) 愛知県の気象, 名古屋地方气象台.

名古屋地方气象台監修(1970) 愛知県災害誌, 愛知県.

名古屋地方气象台監修(1982) 愛知県災害誌(昭和45~55年編), 愛知県.

中田高・今泉俊文監修(2005) 日本の活断層 中部・近畿・中国・四国・九州 活断層地図, 人文社

町田 洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄編(2006) 日本の地形 5 中部. 385p.  
松田時彦(1974) 1891 年濃尾地震の地震断層, 地震研究所研究速報 113, 85-126.  
若松加寿江(2001) 日本の液状化マップ 745-2008, 東京大学出版会.

#### ホームページなど

国土地盤情報検索サイト Kujiban ホームページ

(<http://www.kunjiban.pwri.go.jp/jp/index.html>)

国土交通省土地総合情報ライブラリーホームページ「全国のニュータウンリスト(平成 22 年度作成)」

(<http://tochi.mlit.go.jp/>)

国土数値情報 人口集中地区データ

(<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/jpgis/datalist/KsjTplmt-A16.html>)

国土数値情報 土地利用細分メッシュデータ(平成 18 年度)

(<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/jpgis/datalist/KsjTplmt-L03-b.html>)

防衛省航空自衛隊岐阜基地ホームページ「基地紹介」

(<http://www.mod.go.jp/asdf/gifu/kichishoukai/index.html>)

宮田用水土地改良区ホームページ「宮田用水土地改良区の沿革」

(<http://www.miyatayousui.or.jp/html/1000.html>)



# 資料

災害年表（地震災害）

災害年表（水害）

## 災害年表(地震災害)

西暦(和暦) (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事	
		北緯	東経		岐阜県	愛知県
715年7月5日 (霊龜1)	三河	34.8	134.4	6.5~7.0		正倉47破損。民家陥没。
745年6月5日 (天平17)	美濃	35.2	136.6	7.9	美濃で正倉、仏寺、民家の傾倒多し。	
762年6月9日 (天平宝字6)	美濃・飛騨・信濃			7.0以上	詳細不明なるも被害のあったことは疑いなし。	
1498年9月20日 (明応7)	東海道全般	34.0	138.0	8 1/4		東海道全般で強く揺れる、愛知県で震度6~7、紀伊~房総で津波、伊勢志摩で溺死1万
1586年1月18日 (天正13)	畿内・東海・東山・北陸諸道(天正地震)	36.0	136.9	7.8 (8.2とする文献もある)	白川谷で山崩れ、城、住家倒壊300棟余、圧死者多数。大垣で家屋倒壊多数。	(死者5,500以上。)
1605年2月3日 (慶長9)	(慶長地震)	A33.5 B33.0	138.5 134.9	7.9		(津波が犬吠埼から九州までの太平洋岸に来襲し多くの被害が出た。) "双子地震"の可能性があったとされる。
1662年6月16日 (寛文2)	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃	31.7	132.0	7 1/4~7.6	美濃で家屋被害多数。	
1707年10月28日 (宝永4)	(宝永地震)	33.2	135.9	8.6	美濃で家屋倒壊400棟。	渥美郡、吉田(現在の豊橋)で大被害。尾張領内の堤防被害、延長9,000m。三河・尾張で死者19人、負傷者4人、家屋全壊8,573棟。
1833年5月27日 (天保4)	美濃西部	35.5	136.6	6 1/4	大垣領で山崩れなどにより、死者11人、負傷者22人。	
1854年12月23日 (安政1)	(安政東海地震)	34.0	137.8	8.4	高須、大垣、加納、不破郡、土岐郡、恵那郡で家屋倒壊多数。	三河、知多、尾張の沿岸に被害。津波により被害。
1854年12月24日 (安政1)	(安政南海地震)	33.0	135.0	8.4	両日の地震の被害は、美濃南部でひどく、美濃北部へ行くほど軽かった。	(前日の安政東海地震による被害との区別がつかない。)
1891年10月28日 (明治24)	(濃尾地震)	35.6	136.6	8.0	美濃で被害大。死者4,990人、負傷者12,783人、住家全壊50,125棟、同全半焼4,451棟。飛騨、郡上、恵那郡ではほとんど被害なし。	三河・尾張で死者2,339、負傷者4,594、家屋全壊68,899棟。
1909年8月14日 (明治42)	(江濃地震、姉川地震とも呼ばれる。)	35.4	136.3	6.8	県西部を中心に被害。死者6人、負傷者141人、住家全壊6棟。	
1944年12月7日 (昭和19)	(東南海地震)	33.6	136.2	7.9	西南濃地方を中心に被害。死者・行方不明者16人、負傷者38人、住家全壊406棟。	小津波あり。名古屋臨港部などで液状化現象による被害。死者・行方不明者438、負傷者1,148、住家全壊
1945年1月13日 (昭和20)	(三河地震)	34.7	137.1	6.8		幡豆郡、碧海郡に甚大な被害。死者2,306、負傷者3,866、住家全壊7,221棟。
1946年12月21日 (昭和21)	(南海地震)	32.9	135.8	8.0	西南濃地方で被害。死者32人、負傷者46人、住家全壊340棟。	死者10、負傷者19、住家全壊75棟。

出典：地震調査研究推進本部 HP 地震動予測地図(愛知県版・岐阜県版)  
(両県図を貼り合わせ、本図幅で被害が小さいものを除外した。)

## 災害年表(風水害) 江戸時代以前

和暦		西暦			記事(岐阜県災異誌)	記事(愛知県災害誌)
年号	年	年	月	日		
和銅	2	709	7			東海道・近畿地方(長雨)。
和銅	6	713	11	27		三河・尾張では暴風のため、樹木が倒れ、農作物に被害があった。このため穀物は減収。
和銅	7	714	11	2	美濃ほか5国大風、屋を発く。当年の租税を免ぜらる。	
神亀	3	726				この年尾張に洪水があって、ききんとなり、飢民2,242戸に達した。遠江の5都も水害によりききん。
天平神護	2	766	10	13	美濃、伊勢大風。官舎毀頽人亦之に死す。	
神護景雲	1	767				この年、尾張に洪水があり、中島・海部郡に大被害が出た。ききんとなる。
神護景雲	3	769	9~10		木曾川通り美濃国各務郡鵜沼村より下流数派に分れて、葉栗、中島、海西3郡に流れ入り(3郡古へ尾張の国とす。天正年間3郡各其の半を割って美濃国に属す)数日の間、此等の郡の田、宅を浸損し、中島郡国府庁ならびに国分、僧尼の両寺共に下流の地に在りて困難すと云う。此の年9月尾張国から言上し、其の旧に復することを請い太政官之を許した。	(9月17日)木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島3郡が水害をこうむった。 (10月15日)木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島の3郡に水害をこうむり、家屋・水田を浸冠水した。また、国府・国分寺(2寺)が流失し、大きな被害があった。
宝亀	6	775	9	21	美濃、尾張、伊勢3国暴風雨で大洪水。木曾川通り氾濫し、3国沿河の地百姓300余、牛馬1,000余頭を漂没、国分寺並びに諸寺塔19が壊れた。	尾張・伊勢・美濃の3か国が暴風雨により、大被害を受けた。木曾川氾濫のため、沿川の地では、死者300余人、牛馬1,000余頭、国分寺、諸寺院など19、その他家屋の被害は非常に多かった。
延暦	15	796	7~8			大雨・洪水があり、尾張では、ききんとなる。
嘉祥	3	850				尾張に被害があった。
仁寿	3	853			尾張国の河流が漲溢して、民水に悩む。翌年2月詔して課役を減じた。	
仁寿	4	854	2~3			尾張の河川が氾濫した。この年、沿川の地では水難に苦しみ、ききんとなる。なお、この年ごろから、河川上流山地の植樹が完成期に入った。
斉衡	1	854	8	24	木曾川通り氾濫。濃尾両国沿河の民水難に苦しむ。	
貞観	7	865			木曾川の流れ、元美濃に向いしものが、河口要塞のため、尾張国に向い雨毎に害を蒙らしむるに至ったので、尾張国より訴え、太政官の符を奉じて河口を掘さくし、旧流に向はしめたことあり。しかし、翌8年各務郡の大領河口に襲来し郡司役夫を殺し、再び河口を塞ぎ、罪に問はれたなどの事あり。変流の紛争があった。但し、現今の河道となりしは天正14年なり。	
貞観	8	866	5~6			尾張、長雨のためききんとなる。
正治	1	1199			美濃平野大洪水「一国忘米作之条万民成逃脱之思」程の被害があった。	
暦仁	1	1238	5~6		木曾川通り下流安八郡墨俣川(長良川)羽栗郡足近川(木曾川派流)出水。浮橋流る。	
文永	3	1266	9	18	木曾川出水。羽栗郡三宅村の人家並びに親鸞上人の創設の喜瀬の総庵(寺院)が流亡した。なお文永年間数次の出水を見た。(註)喜瀬は木曾川の幹流なりし、今境川の辺なり。	
永仁	6	1298			尾張河、(旧)7、8月両度の洪水があり、井堰が切れ、大河が善部荘内を流るるに至った。	
弘和	1	1381	10	9	長良川出水。上流の寺流失。弥陀坐像が厚見郡に漂着した。	
弘和	2	1382	9	7	木曾、揖斐、長良三川出水。高須輪中にて平水より1丈3尺高く、安八郡蛇池村、平原、	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					今尾、下石津郡元西小島、その他48ヶ所堤防破壊す。	
応永	27	1420	7	6	木曾、揖斐両川出水。安八郡脇田、石津郡西小島、同郡萱野、海西郡駒ヶ江などで堤が切れ入水した。	
長祿	2	1458	10	26		尾張・三河に暴風雨、洪水があったもようだが、詳細は不明。
寛正	6	1465	9	14		尾張・三河に暴風雨があったもよう。
文明	18	1486	9	10		東海道・近畿諸国暴風雨。
明応	1	1492	7	2		東海道・近畿諸国大雨・洪水。
明応年間		1492 ～ 1500			木曾川通り羽栗郡長池村水害多く（木曾川筋即ち今の境川筋より長池氾濫せしならん）尾張国中島郡朝宮村へ移住したが、役享祿の頃より還りて旧に復す。（註）同地方は明応、文亀年間の頃は一般に堤塘なく、享祿の頃より小なる堤防出来たるものの如し。	
永正	6	1509	7～8		木曾、長良、揖斐3川出水。海西郡岡、駒ヶ江（出水1丈5尺5寸堤平越し）及び下石津郡元西小島、安八郡脇田、今尾にて破壊す。	
永正	14	1517	8	10		諸国、暴風雨となる。
天文	3	1534	10	13	郡上川大洪水。流路を変へ、新川（現長良川）を生じ、家屋の流失、死傷者が多かった。長良川従来の河筋は、山県郡中屋にて右に流れ、太郎丸、高富、梅原を経て伊自良川を入れ、方県郡岩利より南流して今川、折立、黒野を経て、同郡木田村に至り、津保川の下流（今の長良古川と称するもの）を入れ、南流し、尻毛、江口に流れていたが、此の洪水により激流は中屋村より陸地を押し破り、戸田村、側島村等を貫通して、各務郡芥見村に至り、津保川に会し（中屋村より芥見村まで新川を現出）2川1大河となり、下流厚見郡早田村字馬場に於て、井水口を押し破り、更に新川（現今の本流井川と云う）を出現し、早田、今泉、若木、元池ノ上、東島、江口など諸村の地を貫通せり。然るに、後慶長16年洪水の時河道再び変じて本流は方県郡鷺山、正木の南を流るるに至りしも後、此の川も漸次埋り、元祿、寛永の頃より、水は主に井川（天文3年前は巾8間なりしと云う）に流れて現状に至りしものと云う。又、此の洪水以前は、長良川下流厚見郡鏡島村東部を流れ、江崎村の東を経て、下奈良に至りしが、此の洪水後は今の川筋になったと云う。	
天文	4	1535	3	17	長良川出水。死者2万余、流家数万に上ったと云う。	
天文	4	1535	7	30	また、長良川出水。溺死者数うべからずと云う。	
天文	9	1540	9	21		尾張・三河、暴風雨。ところどころで大木が倒れ、高潮により豊川川口の前芝・元梅敷では大被害をこうむった。
天文	10	1541	9	11～12		尾張・三河、暴風雨・洪水。
天文	13	1544	7	28	長良川洪水。岐阜中川原を押し抜き流れ、市神榎が流亡した。	三河・尾張は、暴風雨・洪水となったが、特に三河では、人や家屋の被害が甚大であった。尾張でも木曾川の氾濫により、起町等に水害があった。
永祿	4	1561	5	14	長良川出水。安八郡大森村地内堤防14間破壊。	
永祿	9	1566	10	14	長良川大水。山林田野を流し、川瀬を変じた。之を「枝広の洪水」と云う。保戸嶋村保明過半流亡。又牧田川も大水、高畑字将棋頭で2派となり、河状を変じた。	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
元亀	2	1571	5~6		木曾川大水。沿河の地に激流漲溢す。支川阿木川も氾濫したが、被害不明。	
元亀	2	1571	9	19		東海道・近畿諸国、暴風雨。
天正	2	1574	8	28		尾張、暴風雨。
天正	6	1578	6	17	大雨洪水。被害は詳らかでない。	
天正	14	1586	8	9	木曾川大水。各務郡前渡村以西流路を変じた。現木曾川を生じ、流亡した村落多い。この時駒塚、加賀野井両村の間に逆川を分派した。下流高須輪中では水高2丈程、輪中堤残らず水中に没し、堤の切れた所108ヶ所の多き上った。この時、牧田川も大出水、沿村各地を害す。（註）この洪水後の木曾川筋を以って濃尾両国の境とした。	木曾川が、大洪水となり、尾張・美濃両国の沿川地域は大水害をこうむった。美濃国各務郡前渡村と尾張国葉栗郡草井村（現江南市内）の間から西で、河道が現在のように変わった。尾張・葉栗・中島両郡では激流が村里をつらぬいて、人や家を流し、新しい河道ができ、富田庄・三谷郷等は新河道となった。
文禄	4	1595	6	16		尾張・美濃、洪水。
文禄	4	1595	9	13	木曾川出水。羽栗郡長池村の堤塘破壊し、同村及び田代村の寺及び民家が流失、対岸の里、小牧でも堤が欠壊した。	
慶長	1	1596	6	4	尾張、美濃国洪水。	
慶長	1	1596	9	26		東海道・近畿諸国、暴風雨。
慶長	2	1597			長良川通り出水。厚見郡早田村にて家屋流失す。	庄内川の出水により、右岸が破壊した。また、木曾川の出水により、丹羽郡山那村（現扶桑町山那）の田畑・家屋に被害があった。
慶長	3	1598			木曾川通り羽栗郡光法寺村にて堤塘破壊。同村及び中島郡須賀、大浦、三柳村にて人畜死傷、家屋の流失あり。反別52町外旧高1,500石程の地砂入、川欠となる。	
慶長	7	1602	6	3	美濃国大水。木曾川通り羽栗郡三谷村堤1,000間余切れ、人畜の溺死、家屋の流失が多く、上流中野村の堤も切れた。	
慶長	9	1604	8	28		東海道・四国諸国、暴風雨。
慶長	9	1604	9	7	美濃、伊勢、尾張、近畿、東海道諸国大風。	尾張・美濃・伊勢・近江、暴風雨。
慶長	9	1604	9	28	美濃、伊勢、尾張諸国大風。	尾張・伊勢・美濃、暴風雨。
慶長	10	1605	9	3	呂久川堤、東西2ヶ所宛切れ、又大垣の下でも切れて、大垣、高須両輪中入水した。	尾張・三河・美濃・伊勢・近江では、被害があったが、木曾川はあまり出水しなかった。
慶長	10	1605	9	6	木曾川通り羽栗郡藤掛村堤が切れ、家屋を流失した。	
慶長	11	1606	7	7	木曾川通り羽栗郡江川堤防破壊す。之を「伝馬切れ」と云う。	
慶長	11	1606	10	2	美濃、近江、伊勢大風。（9月30日夜より1日巳刻まで）この他四国、近畿大風。	
慶長	12	1607	10	4~5	美濃大水。木曾川通り羽栗郡米野村の堤400間程切れ入水。また、河渡川（長良川）でも破堤し、家屋が流失した。	三河・尾張、（東海道諸国）、暴風雨・洪水。14日暴風雨、15日洪水。矢作川では、ところどころで堤防が決壊し、橋が落ちた。
慶長	13	1608	6	3	美濃、尾張大水。	尾張・美濃、暴風雨・洪水。（東海道諸国、暴風雨・洪水）。
慶長	13	1608	9	9	木曾川出水。羽栗郡村々堤塘所々で欠壊。	
慶長	14	1609	9	7~8	大風。美濃、尾張、三川は8日午刻より亥刻まで吹く。	尾張・三河・美濃、暴風雨。
慶長	14	1609	9	14	木曾川大水。前年8月の水より3尺ほど高し。	三河に大雨があり、矢作川堤防が拳母村（現豊田市内）内で決壊した。
慶長	15	1610	6	23	木曾川洪水。名古屋へ運送する材木が残らず押し流された。	6月23日・27日・7月8日、木曾川が洪水。8月16日、三河に洪水。西三河（矢作川）では、慶長14年8月の出水よりも水位が約90cm低かった。
慶長	15	1610	7	8	西美濃大水。堤残らず切れる。	
慶長	15	1610	7	31	木曾川洪水。中島郡加賀野井及び尾張国丹羽郡山名村、葉栗郡宮田村でも堤防が破れた。	長雨が続き、さらに大雨が降って、木曾川・庄内川、その他、尾張の各河川が出水して大氾濫した。・木曾川は、尾張側の堤防が、決壊した。犬山から、中島郡加賀野井（現一宮市）の間で数か所決壊した。・庄内川が氾濫

和暦		西暦			記事（岐阜県震災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
						して、流域の被害は甚だしかった。このうち庄内川の治水工事が計画され、慶長19年にかけて護岸工事が行われた。
慶長	16	1611	9	18	長良川洪水。方県郡長良村崇福寺前、川となる。	
慶長	17	1612	5		木曾川洪水。尾張方堤塘所々破壊、美濃方の水害不詳。	木曾川の尾張側堤防がところどころ決壊した。
慶長	17	1612	7	20	大風。美濃、伊勢、尾張3ヶ国強く吹く。	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨。朝、東風が強く、正午から16時ごろにかけて、暴風雨となった。特に伊勢・尾張・美濃で強く、伊勢湾では破船2・30隻、熊野灘で破船7・80隻の海難があった。津島には、立田村の堤防が破壊して、川水が浸入した。
慶長	17	1612	8	19		尾張・三河・近江・美濃に洪水があった。
慶長	17	1612	9	26	大風雨。美濃大洪水。5,000人死ぬ。近江、伊勢、美濃尾張は風強し。	近畿・東海道諸国、暴風雨。未明から午後にかけて、近江・伊勢・美濃・尾張では風が強く、西の吹き返しの風がとくに強かった。尾張では住家に被害があった。
慶長	18	1613	6	17	木曾川通り各務郡前渡村、その他下流数ヶ所で破堤。	
慶長	19	1614	4	1	木曾川洪水。尾張国堤切れ、田畑損亡数うべからず。美濃国の被害は不詳。	
慶長	19	1614	6	4		近畿・東海道、大雨・洪水。5月30日から6月4日にかけて大雨が降り、4日夜には洪水となった。尾張・海東部・勝幡では堤防が切れ、田畑に被害があった。
慶長	19	1614	6	6	霖雨、洪水。木曾川通り洪水、前渡堤切れ、その他美濃方の堤切れ多い。また、藪川でも洪水があったが、被害不詳。	
慶長	19	1614	6	19	天文13年以来の大水。先月末の大水で切れた諸国の堤、復旧前のこととて、又ぞろ切れ入り、和泉、河内、摂津、江州、美州、尾州の6ヶ国が取り分け被害多し。	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。18日に大雨が降り、19日には大洪水となった。尾張・美濃・近江・摂津・河内・和泉の6ヶ国では、4月の水害に加えて被害が大きかった。
慶長	19	1614	7	9	杭瀬川筋安八郡曾根堤切れ、夜半大垣へ入水、酒巴下皆水になる。	近畿・東海道諸国、長雨・洪水。摂津・河内・美濃では被害が大きかった。
慶長	19	1614	8~9		長良川洪水。方県郡長良村崇福寺前へ切入り新川を生ず。	
慶長	19	1614	10	1		近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。遠江・三河では風は強くなかった。名古屋城本丸天守の北東の石垣約140mがくずれた。
元和年間		1615 ~ 1623			武儀川通り山県郡三輪村（元宮上村）宇宮前堤防50間破れ、耕地、家屋流亡す。	
元和	3	1617	5	13	木曾川洪水。爾来8月までに7度出水。松倉島（小網と牛子との間の村である）流亡した。	
元和	5	1619	9	14	木曾川通り羽栗郡江川村堤塘破壊。俗に之を「トンゴ切れ」と云う。また、同郡下流の小化村は残らず流亡して、現今河川となる。この他、美濃、尾張の田畑の損亡多し。	
寛永	2	1625	9~10		木曾川大水。長良川漲溢し、安八郡善光村南境に於て堤塘100間決壊。また、上流厚見郡池の上、東島で破堤した。	
寛永	3	1626	7	9	木曾川通り各務郡前渡村及び長良川沿い安八郡善光村堤70間破壊す。	
寛永	4	1627	9	15	長良川洪水。被害景況詳らかならず。	東海道・関東、大雨・洪水。
寛永	7	1630	9		長良川洪水。厚見郡水位10合余、池上村にて200間、東島村388間、堤防破壊し、島輪中に入水。また、揖斐川通り房島堤も切れる。	
寛永	8	1631			長良川洪水。10合余。同川筋の破堤500間に入る。	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
寛永	11	1634	7			尾張とその近国では、長雨・洪水。
寛永	12	1635	5	30	長良川大水。水位 10 合。島輪中に入水、荒地出来、部内一円水下、作毛悉く皆被害。	
寛永	12	1635	9~10		長良川下流海西郡野寺村堤 186 間破壊、また、揖斐川堤も切れた。	
寛永	13	1636	9	12		尾張・三河・京都・近江・暴風雨・洪水。伊勢湾・三河湾に高潮がおこった。高潮により、熱田の海岸堤防が決壊して、新田に被害があり、道路は交通途絶した。名古屋城にも被害があった。三河吉田（現豊橋市）の船町の住家の大半が流失し、死者が出た。
寛永	13	1636			長良川通り方県郡長良村崇福寺前破壊し川瀬変り、厚見郡早田村馬場にありし長良川番所を中河原に移す。	
寛永	14	1637	9	25		東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。
寛永	15	1638	8~9		長良、武儀、津保の諸川出水。その他山県郡上ノ谷川出水切入る。長良川通り中島郡大須村入水し、徳林寺が流失。	
寛永	18	1641			木曾川通り各務郡前渡村の堤 584 間破る。	
慶安	2	1649	9	26	木曾川洪水。堤防所々破壊し、木曾木材夥しく流失す。	
慶安	3	1650	9	26~27	未曾有の洪水と云はれ、濃州の低地は悉く水底に埋没し、岐阜、養老の間干上りたる所なく、舟で往来することが出来たと云う。木曾川通り羽栗郡江川、中島郡加賀野井其の他で破堤、長良川堤平越しとなり、安八郡にて破堤す。揖斐川は大野郡房島、安八郡大島、発、津、佐渡等にて堤防破壊。大垣輪中堤防 47~48 里の中、過半決壊、大垣城内に入水し、市街は悉く浸水、町家の庭にて水深 8 尺余。大垣領内のみにて死者 1,453 人（その他村々死者 1,553 人計 3,006 人）牛馬合せて 710 頭死し、流家、壊家、3,502 戸あり。この他、大垣領内外の橋悉く流失、材木 45,000 本、竹材 30,000 束、舟数 10 隻流失など被害甚し。敷川では、大野郡稲富上秋にて堤防破れ、稲富にて高 520 石の地押流される。牧田川通り上石津郡牧田堤数ヶ所破壊、耕地を害す。俗に「ヤロカの大水」又は「枝広の大水」と云う。	九州・近畿・東海道諸国、大雨・洪水。木曾・長良・揖斐の三川が大出水し各所で破堤した。特に美濃の沿川地方では大被害をこうむった。これを「大寅の洪水」とよぶ。尾張では、木曾川堤防が加賀野井（現一宮市）で決壊した。また、佐屋川堤防が決壊して、海東・海西郡へ流入し、尾西地方一帯の住家・田畑に大被害があり、多数の人・馬が死んだ。（尾張領の田畑被害 20 万石）この洪水以降、尾張の御園堤はますます強固にされた。このほか、三河でも出水があった。
慶安	4	1651	9~10	18	木曾川洪水。中島郡八神村にて 80 間、石田村 70 間、城屋敷村 65 間、一色村 55 間、長間村 70 間の堤塘が破壊。	（9 月 18 日）尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・海東・海西部では大出水により、家屋が流失し、多くの人・馬が死んだ。破堤箇所は、佐屋川らしい。
承応	2	1653	6	30		東海道、暴風雨、30 日夜半から翌朝にかけて、暴風雨となった。名古屋城・犬山城に被害があり、尾張領内の民家の被害は、22,000 軒におよび、人・馬の死ぬもの多数だったという。
承応	2	1653	8	23	木曾川通り羽栗郡松本村で破堤す。	
承応	2	1653	9	27		中国・東海道諸国、暴風雨・洪水。
承応	3	1654	8	24	木曾川通り羽栗郡江川村その他村々で堤塘破壊す。	
万治	1	1658	8	15	美濃国大風、洪水。	
万治	1	1658	8	31		近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水。おもに近畿地方に風水害。尾張・三河での被害については不明。
万治	2	1659	10~11		木曾川通り中島郡馬飼村及び長良派川、大樽川沿い、安八郡海松新田堤塘破壊。また、牧田川沿い多芸郡大墳村で堤長 21 間切入り、耕地数町歩を害す。	
万治	3	1660	6~7			尾張・美濃、雷雨・洪水。諸国、長雨・洪水。連日、大雷雨があり、尾張・美濃では水害や落雷による被害が多かった。7 月 21 日には、雷雨がはげしく、住家・田畑の浸水、破堤な

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
						どの水害があり、名古屋城では、落雷による被害を受けた。尾張では、21日以後も連日のように強雨によって水害がおこった。
万治	3	1660	7~8		木曾川通り羽栗郡沿河の村々破堤、家屋の流失多く、また揖斐川も洪水にて大垣輪中入出し、大垣城内へも押し入った。	(8月12日) 諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、12日明方から暴風雨となり、住家の風による被害が大きかった。(屋根をはがされた)名古屋から江戸へ向かう途中の大船8隻が破船。尾張以東では風雨が強く、水害を受けた。また、美濃大垣付近でも水害を受けた。
万治	3	1660	9	24		近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。
万治	3	1660	10	24		四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨。名古屋では、城内および城下に建物、住家の被害があり、堀川には海水が逆流して、白鳥の材木が多く流された。尾張全般の家屋・田畑に風水害をこうむった。
寛文	4	1664	9~10		長良川出水。武儀郡曾代村、上白金村、下白金村などにて堤防破壊、耕地、山林など荒地又は川敷となる。、板取川沿い武儀郡長瀬村にても堤塘100間を破壊、耕地の流亡多し。	
寛文	5	1665	9~10		飛騨川の支川、白川洪水。加茂郡越原村を初め沿河の地激流漲溢して田圃を害し、家屋の流亡多し。	
寛文	6	1666	7	16-172 8-29		尾張・美濃、大雨・洪水。各河川が出水したが、特に庄内川は大出水した。尾張各所の田畑が水害を受けた。
寛文	6	1666	8	30	木曾川洪水。美濃にては田畑高9,300石入水、家屋24軒流失す。尾張の被害特に激甚であった。	尾張・美濃、暴風雨・洪水により、大水害をこうむった。
寛文	12	1672	6~7		長良川通り武儀郡曾代村堤塘破壊、耕地流亡あり。	
延宝	1	1673	4~5		木曾川通り羽栗郡その他沿河の地及び大樽川沿い、安八郡海松新田堤塘破壊す。	
延宝	2	1674	4	30	長良川通り海西郡野寺村の堤塘破壊し、支流板取川沿い武儀郡片知村の耕地流亡。また、牧田川沿い多芸郡大墳村堤30間切入り、耕地数町歩を害す。	
延宝	2	1674	8	31	美濃加納、洪水にて堤防800間破れ、田圃27,000石被害を蒙る。	
延宝	2	1674	9	15		九州・四国・中部・関東諸国、暴風雨・洪水。木曾川の洪水で美濃・尾張の沿川地方は大水害となった。人よんで<小寅の洪水>という。庄内川右岸破堤。(被害については不詳)。
延宝	3	1675	7	25	美濃加納大風雨。田畑大半損亡。	
延宝	4	1676	8	13~14	大風雨、洪水。木曾川通り中島郡八神村堤切れ、また可児川沿河の地堤150間破る。	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張藩領内で農地浸水、田(442,634石相当)、畑(約2,023ha)、家屋流失2,417戸、死者18人、水死した馬30頭の風水害をこうむった。のちききんとなる。
延宝	4	1676	10~11		長良川支川武儀川通り武儀郡跡部村堤88間破れ、田畑被害多し。	
延宝	5	1677	6~7		上之保川通り(長良川上流)郡上郡有阪村に新川を生じ、耕地5.6町歩川敷となる。また、長良川の派川大樽川通り安八郡下大樽新田の堤80間を破壊。	
延宝	6	1678	9	19	濃尾両国大雨、洪水。	九州・四国・東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・美濃、水害。尾張藩領内では、田畑(85,600石余相当)、堤防約4,600m、家屋68戸に被害があり、3人と馬3頭が水死した。
延宝	7	1679	8	6,21		中国・中部諸国、暴風雨・洪水。
天和	1	1681	8	3~4	美濃国大風雨。3日晚景に及んで風雨烈しく、夜に入って大風、大雨あり。丑の刻になって風雨漸く止む。大垣市街の崩家、士族家敷209軒、町家104軒、大垣領内では3,000余軒、	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					死者 11 名、馬 2 頭、城の内外破損甚しく。その数を知らず。	
天和	1	1681	9	2	揖斐川通り大野郡三輪村堤防 40 間破壊す。 （註）日本気象史料によれば、この日伊勢、尾張、暴風雨とあり。	伊勢・尾張・北陸諸国、暴風雨・洪水。尾張では夕方から夜半（16 時ごろから 02 時ごろ）にかけて、暴風雨がはげしく、屋根を飛ばされるなど、家屋の被害があった。このあと、18 日の暴風雨とあわせて、この年、田畑の被害が大きかった。（ききんとなる）。
天和	1	1681	9	18, 25	揖斐川通り大野郡上野村堤防 50 間破壊す。	18 日尾張・江戸等、25 日伊勢・尾張諸国、暴風雨。尾張では、8 月とこの 2 回の暴風雨が田畑の農作物へ与えた被害は大きく、ききんとなった。
天和	3	1683	8	15~16	揖斐、長良両川洪水。長良川通り安八郡森部村堤 70 間、南今ヶ淵村 70 間を破り、また、逆川沿い（長良支川）中島郡江吉良村堤 60 間、揖斐川沿い安八郡曾根村堤 28 間を破壊し、大垣町入水。城下町床上 2 尺 7 寸、城内三ノ丸御台所内庭にて膝節まで浸水、人々 23 日まで二階に住居す。なお、大垣輪中下筋にても堤塘所々破壊し、市街は南北二方より水押し入る。	
貞亨	3	1686	3	17		尾張では、夕方雷雨がはげしく、名古屋城下で落雷により家屋 1 軒が焼失した。
貞亨	3	1686	8	28		尾張、雷雨。名古屋城下に落雷があり、建中寺に被害があった。
貞亨	4	1687	7	14	木曾川洪水。加茂郡取組村にて中仙道に氾濫。また、神通川洪水。木材多く流れる。	
貞亨	4	1687	10	1~2	木曾川洪水。加茂郡取組村に於て、激流のため民家 23 戸流失、耕地の流亡多し。	庄内川が出水し、支川の矢田川で 1 人水死した。
貞亨	4	1687	10	14		四国・近畿・北陸・東海道関東諸国、暴風雨・洪水。
元禄	4	1691	7	8		尾張に雷雨があり、名古屋城下で落雷により 1 人死亡した。
元禄	7	1694	9	6		紀伊・尾張、暴風雨。
元禄	8	1695	9	3	方県村付近大風。	
元禄	10	1697	7	27		尾張に雷雨があり、落雷により、名古屋城下で家屋 2 軒焼失。
元禄	10	1697	8	26		尾張に雷雨があり、落雷により、家屋 2 軒焼失、1 軒破損した。
元禄	11	1698	12	28		尾張・三河、大雨・洪水。
元禄	12	1699	7	28	木曾川通り海西郡日原村、長良川通り堤防所々破壊す。揖斐川筋も被害あり。また、津屋川沿い多芸郡志津新田堤も切れ入水す。	尾張、前日夕方から、28 日朝にかけて暴風雨となった。
元禄	13	1700	4	14		尾張に雷雨があり、名古屋城下で落雷により、家屋 1 軒焼けた。
元禄	13	1700	7	1	大雨続き、木曾川通り海西郡駒ヶ江村破堤入水、加茂郡白川筋も亦出水被害あり。	
元禄	13	1700	10	25~26	根尾川大洪水。	
元禄	14	1701	6	21~22		名古屋城下から熱田にかけて、突風・降ひょう（梅の実大）を伴ない、各所に落雷があり、熱田では突風により、家屋や樹木の被害もあった。22 日夜には庄内川が出水し、田畑に被害があったが大事にはいतरなかつた。
元禄	14	1701	8	2		尾張、暴風雨。
元禄	14	1701	9	11~14		連日の降雨で、尾張・美濃の諸川は出水氾濫し、堤防破損 53 か所におよんだ。庄内川水系では、五条川合流点（五条川は改修の結果、新川に合流するようになったが、天明以前は庄内川に合流）の杵（いり）、法界門（新川・基目寺境）の堤防右岸が破堤し、基目寺はじめ海部郡一帯が浸水した。この時勝川堤も破壊した。14 日、名古屋では、昼前（09~12 時ごろ）、昼過ぎ（15 時ごろ）ごろと夜（19

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
						時ごろ）に雷を伴って雨が強く、天白川の堤防が鳴海の方へ決壊した。
元禄	14	1701	9	14	長良川出水。保戸島村被害多し。	
元禄	14	1701	9	19~20	9月14日大雨。19日より20日迄風雨激しく19日より大水出る。木曾川通り加茂郡取組村家屋の流失23戸、下流羽栗郡、中島郡所々破堤。また揖斐川通り揖斐郡小島村溝尻より野中まで400間破堤、下流安八郡大島村堤切れ、大垣町に入水。この洪水で大垣領229ヶ村入水、堤防切れ173ヶ所、3,878間、流れ家、壊家合せて753戸、死者3人あり。この他藪川通り大野郡浅木村で耕地川欠けあり。また、逆川沿い羽島郡島村、牧田川、津屋川、金草川沿の地破堤せり。	四国・近畿・東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、13日明方から風雨が強く、特に9時ごろから昼過ぎまで大雨となった。このため、各所で浸水し、田畑の被害も甚だしかった。また、矢田川堤防が稲生で切れた。（庄内川・矢田川合流点の矢田川左岸、現名古屋市）。三河では大水害となり、岡崎では、矢作川堤防約900mが切れ、田畑（2万石相当）に氾濫した。流失家屋32軒、倒壊家屋52軒、小橋3ヶ所が落ちた。
元禄	14	1701	10	1		尾張、暴風雨。
元禄	15	1702	7	12	木曾川通り加茂郡取組村辺沿岸の地入水。	
元禄	15	1702	8	21		四国・中国・尾張、暴風雨。
元禄	15	1702	9	20		尾張、暴風雨・洪水。佐屋川水系の海東郡津島の兼平堤が見越地内で破堤し、海東郡は大水害をこうむった。
宝永	3	1706	7	17	網代川大出水。本巣郡西秋沢にて堤防数ヶ所決壊、被害甚し。また、伊自良川大水、人家が流れ、耕地が荒れた。	
宝永	3	1706	9			三河・尾張、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東（現春日井市）で庄内川右岸堤防が約90m破堤した。
宝永	4	1707	9	14~15	飛騨大風あり。稲作に被害多し。本巣郡大風、家屋倒壊多し。20日再度大風。	尾張、暴風雨。明け方から夕方まで南東の風が強かった。（午後、最も強かった）
宝永	4	1707	10	6		尾張・四国・中国諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害などがあつたもよう。
宝永	5	1708	8	17		近畿・東海道諸国、暴風雨・高潮・洪水・竜巻。こののちききんとなる。三河湾・伊勢湾に高潮があつたもよう。尾張・半田では新田の堤防が決壊した。
宝永	7	1710	10~11		木曾川出水。加茂郡細目村に繋留中の御神木が大半流れた。	
正徳	2	1712	9	18		近畿諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、家屋の倒壊が多かつたもよう。
正徳	2	1712	10			尾張・三河、暴風雨・洪水。家屋の倒壊が多かつたもよう。
正徳	3	1713	7	27~29		尾張、暴風雨・洪水。27日夜半、犬山城の天守閣が落ちた。家屋被害12,000戸。28、29日尾張西部から浸水し、家屋・人馬の被害が大きかった。
正徳	3	1713	8	28	木曾川通り羽栗郡を初め沿河の村々所々堤塘破壊。家屋流失、人畜死亡多し。また、下石津郡福江村及び津屋川沿い徳田新田にて破堤。	
正徳	4	1714	9	16	暴風雨のため、美濃の諸川氾濫して流水700,000本に及び、神戸、鳥ヶ池、甚兵衛、伝馬等の新田、堤防破壊して水害を蒙る。	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨・高潮・洪水・ききん。名古屋では午後（16時ごろ）から夜半にかけて暴風雨となる。庄内川が大出水し、味鏡堤（現名古屋市）が破堤して、氾濫した。伊勢湾沿岸に高潮がおこり海西郡愛知郡の新田（神戸・鳥ヶ池・甚兵衛・伝馬・大宝等）堤防を破堤した。尾張・三河とも家屋の倒壊、流失、死者、田畑の被害は甚大で、天和以来の暴風雨といわれる。こののち稲はみのらず、ききんとなる。
享保	1	1716	8	15	揖斐川洪水。大垣輪中入水、木曾川大水、沿河恵那郡の地激流漲溢す。	
享保	1	1716	9	1	木曾川通り加茂郡取組村激流漲溢して家屋に浸水した。	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
享保	2	1717	7~8		木曾川通り加茂郡取組村沿河の地を浸す。上流に山崩れありて此の水を来たすと云う。	
享保	2	1717	9	19	大風雨。辰刻より午刻迄辰巳大風にて、町々屋根を吹き破り、所々小屋掛け吹きつぶし、午未の刻、未申に風替り是又大風にて所々破壊。	東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・高潮。名古屋では、前夜から雨が降っていたが、朝（08時ごろ）から正午ごろまで南東の風雨が強くなり、屋根をふき破り、小屋をふき飛ばした。屋すぎ（13時ごろ）風向は南西にかわって、また強く被害が出た。尾張・三河ともに家屋・田畑等に風水害があったもよう。
享保	2	1717	10~11		長良支川糸貫川筋本巣郡生津村堤塘 80 間余破堤。	
享保	2	1717	11	7	糸貫川大洪水。	
享保	3	1718	10	5		東海道諸国、暴風雨・高潮。尾張・三河は暴風雨となり、渥美湾に高潮がおきた。
享保	6	1721	8	10	長良川通り厚見郡稲束村（元忠節村）堤 192 間切れ、岐阜町へ入水。下流羽栗郡間島村堤 80 間、板取川沿い武儀郡長瀬村堤も亦破壊、耕地を害す。また、此の年牧田川筋多芸郡島田村及び島江村で破堤した。	
享保	6	1721	9	6~7	大雨。揖斐川通り安八郡前田村堤切れ、大垣町に入水、田畑其の他の損亡多し。	東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・三河は暴風雨になり、寛文以来の大洪水といわれ、庄内川が大出水して氾濫した。尾張藩領内の被害は田畑の損害高 162,000 石相当、堤防などの破損約 4,000m、蛇籠（じゃかご）の破損流失約 25,000m。家屋流失 74 軒、同倒壊 659 軒、秋（いり）の損失 41 か所。
享保	7	1722	9	24~25	大風雨。	近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水・高潮。尾張・三河の風水害は激甚で正徳 4 年 9 月以来の暴風雨といわれた。24 日は朝から雨が降り続き、夜半（24 時）ごろから南東の暴風雨となり、翌朝（06 時ごろ）おさまったが、風が強くこれによる家屋の被害も大きかった。三河吉田（現豊橋市）から東では風はそれほど強くはなかったようである。伊勢湾・渥美湾の沿岸は高い高潮の来襲にあい、各新田をはじめ内陸部まで大打撃を受けた。また矢作川をはじめ、各河川が出水して、氾濫し、その水害を受けた。
享保	7	1722	10	4	長良川通り厚見郡茶屋新田、揖斐川通り安八郡南波村及び相川支流色目川沿い多芸郡蛇持村の堤切れ入水す。	
享保	17	1732	3~4		川浦川大水。加茂郡滝田の耕地を流亡した。	
元文	2	1737	7~8		加茂郡黒川村地内、山崩れ。黒川氾濫して沿河の耕地流失多し。また、津屋川沿い下石津郡徳田新田破堤す。	
元文	2	1737	9	13~15	美濃加納領大雨洪水。2,191 町歩余入水。	
元文	3	1738	7	21	5 月 8 日より霖雨続き、長良川通り屢々出水あり岐阜町へ入水。	
元文	5	1740	8	22	甚雨洪水。美濃領内流亡数ヶ所あり。	
元文	5	1740	9	14		尾張・三河、暴風雨。夜 20 時ごろから風が強くなり、夜半（24 時ごろ）にはさらに強く、翌日夜明けまで吹いた。家屋の倒壊、大木の倒れたものも多く、農作物の被害は大きかった。三河横須賀では住家の倒壊 145 戸、付属家、土蔵、へい、社寺等の被害が多数あった。
延享	2	1745			長良川洪水。加納輪中被害が多かった。	
寛延	2	1749	9~10		長良川通り厚見郡池ノ上村にて堤塘 275 間、東島村 200 間破れ、島輪中入水す。また、牧田川沿い多芸郡大垣村の堤も切れ入る。	
宝暦	1	1751	7	19		尾張・東春日井郡小牧村（現小牧市）から、北東の 17 か村に大雨が降って、山地から土石の流出が甚だしく、田畑を荒廃した。
宝暦	3	1753	9	13		夜、大雨が降り、中島郡・海東郡・海西郡の

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
						木曾川筋では洪水となる。美濃では水害が大きかった。
宝暦	7	1757	5~6			東海道・関東・奥羽諸国、長雨・大雨・洪水・ききん。尾張・三河では、この年、2月中ごろから、雨がしばしば降り麦作は不作となる。4月中ごろからは、ことに雨天が多く（旧暦）4月27日から、5月5日ごろまでは、連日降り続き、なかでも5月2、3、4日は大雨が降って、3日・4日は大洪水となり、全般的に大水害をこうむった。＜宝暦の洪水＞
宝暦	7	1757	6	17	木曾川通り恵那郡沿河の地及び阿木川暴漲。長良川通り本巢郡生津村字大川端にて川欠け、海西郡岡村堤防破壊す。羽栗郡西小熊村杖樋吹き破れ、足近輪中一円入水。境川沿い厚見郡高桑村堤塘破壊。牧田川沿い多芸郡五日市村、津屋川沿い下石津郡徳田新田、堤切り入り等、堤防破損78ヶ所1,950間に上った。	
宝暦	7	1757	7	15	美濃大雨。洪水被害多し。	
宝暦	12	1762	7~8		長良川通り厚見郡西小熊村堤杖樋より切り入る。	
宝暦	12	1762	7	28	長良川通り厚見郡下奈良村水門切れ入る。	
宝暦	13	1763	10	8~9		尾張・三河、暴風雨。8日夜半から9日未明にかけて暴風雨となる。
明和	2	1765	6	3~4	木曾川通り加茂郡取組村入水、同郡飛騨川沿い西折井村沿河の耕地巨害を蒙る。	山城・尾張・三河・江戸、大雨・洪水。連日の雨で、4日庄内川が出水し、味鏡（現名古屋市北区楠町）付近で右岸堤防が決壊して氾濫し、西春日井郡如意・豊場から丹羽郡岩倉・五条川端にいたる尾張30余か村が水害をこうむった。三河では4日矢作川の拳母堤防が決壊した。
明和	2	1765	7	3~4	木曾川通り大水。錦織湊の材木100,000余流失、加茂郡黒瀬で流れ家15。また、羽栗郡下中屋村5間、間島村90間、米野村43間破堤す。	
明和	2	1765	9	16~17 21~22	長良川通り方県郡長良村水量10合、同所に破堤。また、羽栗郡西小熊村杖樋吹き破れ、安八郡大森村堤塘66間、境川沿い厚見郡高桑村56間破壊。揖斐川沿い安八郡神戸村堤40間破れ、耕地36町歩を害す。犀川（長良川支川）沿い本巢郡十七条村の堤もまた破る。凶荒誌には美濃大水人多く死すとある。	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張では連日の大雨で17日、庄内川が氾濫して、名古屋・熱田は一面に浸水し、東は奥田町から浜街道、西は佐屋街道から津島にいたる一帯が水害をこうむった。矢作川も拳母（現豊田市）で氾濫し、家屋80軒が流失、人が多く死んだ。
明和	3	1766	8	2		尾張、大雨・洪水。五条川が出水して、熊之庄（現北名古屋市）で堤防約10mが決壊した。
明和	3	1766			木曾川通り羽栗郡米野村堤35間、武儀川筋武儀郡岩佐村堤100間余破れ、同郡八幡、高野両村の耕地を害す。	
明和	4	1767	8	4~6		尾張・三河、大雨・洪水・山津波。4日から6日にかけて大雨があり、6日夜、庄内川は右岸の比良・大野木（現名古屋市）、土器野松原（現新川町）などで破堤して、氾濫し、味鏡・如意など一帯がドロ海となる（宝暦の洪水と同様）。矢田川は猪子石で破堤し、名古屋の巾下門前まで氾濫。名古屋の北東部から西部にかけて低地全部が浸水。（長母寺北で山くずれ）。名古屋城西の道路上で水深1.5m余になり、数日間船で往来したという。このため、のち大幸川の開さく工事が行われた。名古屋南部は天白川の氾濫で、鳴海あたりまで浸水し、鳴海付近では、家屋の水害が大きかった。東海道上の水深は約1.8m。藩は舟を出して救助に努め、小屋を建てて、被災民の救済にあたった。この他、中島郡奥村などで木曾川の水が尾張側へ浸水したようである。同日、瀬戸の赤津や猿投山に山津波が

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
						あった。矢作川では、渡村・下矢作片町・大門・日名・青木・細川・仁木入江・阿波寺等で破堤し、拳母・岡崎付近に浸水したほか、田畑の損害、人畜の死傷も多かった。また下流の伏見屋・平七新田（現碧南市）でも氾濫した。＜明和の洪水＞
明和	4	1767	8	6~7	木曾川通り濃尾沿河の堤塘数ヶ所破壊、家屋の流失、住民の溺死多し。	
明和	5	1768	6~7		武儀川筋武儀郡岩佐村、宇多院村、高野村其の他所々で破堤。境川筋厚見郡高桑村、犀川沿い本巢郡十七条村、牧田川筋多芸郡五日市村、津屋川沿い下石津郡徳田新田にてそれぞれ破堤、多良川沿いに被害が多かった。	矢作川堤防が、拳母村（現豊田市）内で破堤した。
明和	5	1768	8~9		武儀川通り武儀郡高野村及び多良川沿い上石津郡沿河の地被害多く、牧田川沿い多芸郡五日市村、津屋川沿い下石津郡徳田新田及び犀川沿い本巢郡十七条村堤破る。	
明和	8	1771	9	1	川浦川大水。加茂郡滝田村で上 30 間、下 40 間破堤。	
明和	9	1772	8	30		東海道・関東諸国、暴風雨。尾張・半田では英比川の堤防が大破損した。江戸など東国の被害大。
安永	1	1772	9	18	東は美濃、近江、西は備後、讃岐等大風雨。民家を倒し樹木折れ、人多く死す。	
安永	3	1774	6	27	上之保川沿い郡上郡谷村耕地 3 段歩川欠け、揖斐川通り、下石津郡万寿新田杖樋破れ入水、中堤石亀杵も吹き抜けた。	
安永	3	1774	9~10		山県郡谷合暴風あり。俗に石割風と云う。被害不詳。	
安永	6	1777	9	21		尾張・三河で 14 時ごろから暴風雨となり（雷を伴う）、家を流したという。（不詳）。
安永	7	1778	8	3	長良川通り厚見郡鏡島村で 2ヶ所切入り、また上流上之保川沿い郡上郡大島村耕地 1 町 6 反歩を害す。境川筋厚見郡下佐波村、逆川筋羽栗郡不破一色村、糸貫川沿い本巢郡北方村、杭瀬川沿い安八郡木戸村、犀川沿い本巢郡十八条村、津屋川沿い多芸郡鷺ノ巣村志津新田、石津郡小坪新田（75 間）、牧田川沿い多芸郡五日市村などで破堤した。	
安永	8	1779	9	3		尾張・三河、暴風雨・洪水・竜巻。
安永	8	1779	9/29~10/4		木曾川大水。美濃、尾張一円洪水、所々橋落ちる。	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。19 日から 23 日にかけて連日大雨。24 日は暴風雨となり、東海道（尾張・三河）・関東・奥羽諸国、洪水となる。尾張では庄内川・天白川が、三河では矢作川が氾濫して、大水害をこうむった。
安永	9	1780	8~9		伊自良川筋山県郡小倉村堤 270 間余破壊。耕地流亡。大樽川筋安八郡海松新田堤もまた破壊。	
天明	1	1781	7~8		武儀川洪水。山県郡谷合村橋梁落ち、道路欠壊。田圃の荒廃した所多し。	
天明	2	1782	4	13	長良川通り羽栗郡西小熊村及び中島郡堀津村須賀にて破堤。	
天明	2	1782	6	17	長良川 1 升 2.3 合の大水で平越しとなり。厚見郡忠節村 144 余間切入り、木曾川も高水にて所々切入る。	
天明	2	1782	8	1		尾張、大雨・洪水・（凶作）。1 日夜半（24 時ごろ）、五條川左岸で、清洲川の朝日付近から下流へ 8 か所、また合瀬川が六ツ師村で 2 か所（約 180m）、それぞれ破堤して、田畑に氾濫した。その後 9 月 27 日までに 4 回の出水氾濫があった。このため不作となる。この年尾張・三河をはじめ全国的に凶作となる。矢作川では、拳母村内で破堤。その後 8

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
						月26日、陽暦8月31日にも出水した。
天明	2	1782	9~10		長良川通り羽栗郡西小熊村堤塘破る。	
天明	2	1782	7/20, 8/1, 8/26		8月1日長良川出水10合余、山県郡戸田村地内字弥鞠堂（逆出とも云う）より切れ込み、今川を生じた。7月20日及び8月26日の合せて3回の洪水により、長良川通り本巢郡前野村堤破壊3ヶ所、欠所2ヶ所、その他越切れ数ヶ所、逆川沿い中島郡飯柄村杖吹き抜け、犀川沿い本巢郡十七条村、津屋川沿い本巢郡十七条村、津屋川沿い多芸郡津屋村及び志津新田、揖斐川通り下石津郡高柳新田（110間）で破堤した。	
天明	3	1783	秋			尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。連日の大雨のため庄内川が出水し、大野木（現名古屋市区山田町）で堤防がくずれた。さらに暴風雨となり、決壊氾濫の危険が増したが、幸いに大事にいたらずにすんだ。そのほかにも尾張および三河南西部の各地に被害があったもようだが不明。
天明	4	1784	9	21		尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、和爾良・上條（現春日井市）で破堤氾濫した。浸水のため付近一帯に2、3日間は通行不能になった。また、鳴海から三河の知立あたりまで浸水して、東海道は海のようになり通行不能となる。各地の農作物が被害を受けた。
天明	4	1784			板取川筋武儀郡長瀬村堤所々破れ、耕地を害す。	
天明	5	1785	7	3	豪雨。近年稀有の洪水。各地に山揚げがあった。	
天明	5	1785	9	15		近畿・東海道、大雨・洪水。
天明	6	1786	8~9		木曾川通り加茂郡沿河の地、平水より高さこと1丈5尺。太田町市街半ばは入水。低地の家屋は床上6尺余の浸水。其の外同郡沿河の地被害最も多く、また、各務郡に於ては前渡村にて水量1升2合、同村堤塘50間破壊し、家屋12戸流失、48戸入水、被害地45町5反歩。下切村にて家屋32戸入水、被害地9町3反歩、其の他下流の村々被害多し。また、飛騨川沿い加茂郡吉田村にて被害地3町2反歩、比久見村にて5町歩、福島村にて2反歩、其の他村々多少の流失地ありと云う。可児川沿い可児郡沿河の地にて堤長80間破壊し、また藪川沿い大野郡温井村また堤塘破壊、耕地被害あり。	
天明	6	1786	9	21		四国・中国・近畿・北陸諸国・尾張、暴風雨。尾張では、農作物の被害が大きかった。
天明	6	1786	9	28		四国・中国・近畿・関東・奥羽諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。28日昼前から（10時ごろ）、尾張・三河では暴風雨となり、各河川は出水した。矢作川は拳母村内で破堤した。尾張・三河の農作物に大きな被害があった。
天明	7	1787	8	1	木曾川、長良川出水。また、境川漲溢し、沿岸道路堤防欠壊、耕地が荒廃した。	
天明	7	1787			長良川通り厚見郡日野村堤切入る。	
天明	8	1788	7	3	長良川通り中島郡堀津村堤塘破壊し、須賀村杖樋破れ、堤85間、安八郡南条村30間、大樽川筋安八郡藻池新田中堤、津屋川沿い下石津郡徳田新田堤切入る。	
寛政	1	1789	7~8		美濃大水。	
寛政	3	1791	7	1	長良川通り厚見郡島輪中破堤入水。また、同郡江崎村、津保川沿い加茂郡肥田瀬村にて破堤、耕地多く流亡す。また、戸羽川沿い山県郡高富村にて堤破れ、家屋に入水す。	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
寛政	3	1791	9	17	17日申の中刻より未曾有の大暴風雨あり。大垣城下町の被害多く、壊家4,000軒余、死者5人、傷者12人。加納領分漬家550軒余あり。飛騨も大風雨。作物大損害。国分寺の塔、大雄寺の門倒る。	尾張、暴風雨・高潮・洪水。夕方前（16時ごろ）から暴風雨となり、夜半（23時ごろ）まで続いた。このため風による家屋の倒壊などの被害があったが、伊勢湾に高潮がおこり、海岸地方では死者94人、倒壊・流失家屋5,825軒におよぶ大きな被害となった。
寛政	4	1792	10	23		23日夜、尾張に暴風雨があったが、被害などは不明。
寛政	7	1795	10	10~12	10日津屋川沿い多芸郡津屋新田杵樋吹き抜け、30間程切り、根尾川大水。大野郡西馬野で流家、死傷者が出た。11日藪川筋大野郡上秋村榎木堤切入る。また、12日杭瀬川沿い多芸郡高瀬村で破堤、大垣輪中入水す。可児川堤も50間破堤。津屋川沿い多芸郡津屋村杵樋が吹き抜けた。飛騨も亦洪水あり。高山中橋損傷す。	尾張では、樹木がたおれ、田畑に被害があった。
寛政	8	1796	8~9		長良川通り本巢郡生津村堤70間余、中島郡東方村70間、藪川沿い大野郡唐栗村にて10間破堤した。	
寛政	10	1798	5	23, 29	5月15日より天空異状を呈し、21日夕方より強風雨引き続き、22日夜より暴風雨となり、23日に至って各川洪水となる。木曾川通り恵那郡坂下村耕地8町歩流亡河川となり、加茂郡沿河の地流失家屋多く死傷20余人、各務、羽栗両郡沿河の水量1升2合、堤防平越しとなり、前渡より笠松に至る間の堤防決壊8ヶ所、（尾張方も満水の時は危険に瀕せり）家屋流亡、人畜の溺死多く、下流羽栗郡以南伊勢桑名迄一面海の如く、慶安3年（枝広の洪水）より6尺も高く、前代未聞の大水なりしと云う。境川、長良川決堤のため、加納町入水、人々棟上に登れり。長良川筋にては方県、厚見2郡沿河の水量2升到り、厚見郡日野、方県郡雄総、長良等に破堤あり。長良にて家屋の流失17、死者23人、土地の流亡砂入70町歩あり。岐阜町北にては堤防20間破れ、町入水人家8戸流失。忠節、今泉、小熊野、鏡島等でも150間乃至280間の破堤あり。暴水厚見郡西南の諸村に押し入り家屋の流失あり。更に中島郡に至り、衝路の堤防を破れり。飛騨川筋も加茂郡下麻生、西朽井にて耕地10数町歩流亡し、鬼谷川沿い郡上郡下同村にて土地流亡。揖斐川、津屋川、大樽川沿いにも破堤あり。武儀川筋武儀郡八幡村等被害少なからず。この洪水で、木曾、長良両川の堤防決壊ヶ所は実に330ヶ所の多きを算した。	美濃・伊勢・尾張、長雨・大雨・洪水。4月はじめからの長雨に加えて23日大雨となり、美濃では水害が甚大であった（尾張については不詳）。
寛政	10	1798	8	23	木曾川通り羽栗郡沿河の村々入水。飛騨川筋武儀郡上麻生村の耕地流亡被害多し。長良川通り厚見郡鏡島村字萱場破堤50間。	
寛政	10	1798	8	27	25日夕方より暴風雨。26日、27日に至り出水す。木曾川通り羽栗郡無動寺村堤塘破壊し、入水各村に及ぶ。中島郡竹ヶ鼻村堤75間を破り、同郡並びに海西、下石津の3郡入水。長良川通り方県郡長良村流家20戸、壊家32戸、死者3人、半壊家144戸、破船大小8艘あり。また、厚見郡忠節村と今泉村との境に1ヶ所、鏡島村に1ヶ所計2ヶ所の堤（本年5月破壊した滞留堤）再び破る。再度の入水に人民一層困難を極む。長良川上流の郡上川沿い武儀郡曾代村にて高15石余の地を害し、家屋1戸流失、前野村の堤も破壊す。山県郡中屋、世保、溝口、戸田、千疋諸村の地激流漲溢、耕地を害し、加野村にて堤長200間を破り武儀川沿い山県郡植野、茂地、古市場諸村の耕地を害す。また、揖斐川沿い下石津郡安田村と帆引新田との村境にて本堤切入り、森下、札野、内記、萱野にて中堤破壊す。	尾張、大雨・洪水。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
寛政	11	1799	6	20	長良川通り中島郡堀津村杵樋吹き抜け 90 間破堤、大須村堤も切れる。揖斐川通り下石津郡帆引新田にて杵樋吹き抜け、中堤札野、内記にて破堤。鬼谷川沿い郡上郡下洞戸村にて破堤す。	
寛政	12	1800			長良川通り各務郡芥見村堤 39 間破壊。揖斐川沿い安八郡大明神輪中にて 12 間破堤した。	
享和	1	1801	9	16		尾張西部、雷雨・落雷・洪水。夜 20 時ごろから雷雨がおこり、中島郡起・小信（現一宮市）方面に 10 か所ほど落雷した。このとき、強雨を伴い、木曾川堤防がところどころでくずれた。奥村用の井げたを越水・古川が洪水のため、中島・小原・高野島・野府では浸水が甚だしかった。苅安賀新田では全戸、大平では 3、4 戸を残してほとんど、また東西五城・富田・今村もそれぞれ浸水した。古川通り下流の法立・丸淵辺も 18 日堤防が決壊した（現一宮市内の被害）。
享和	2	1802	7~8		長良川上流郡上川沿い各務郡芥見村 12 間、中島郡小藪村（間数不明）にて破堤。大須村杵樋吹き破れ、堤 85 間破壊。牧田川沿い多芸郡直江村堤も切れる。	
享和	2	1802	9	27	長良川通り中島郡大須村破堤、小藪村杵樋吹き抜け堤 95 間破壊した。また、津屋川沿い多芸郡大跡新田でも破堤。	
享和	3	1803	8	26	長良川支川郡上川通り山県郡加野村にて堤 220 間破壊す。	
享和	3	1803	9/30~10/1			尾張・三河、大雨・洪水。30 日夜大雨となり、扇川・大高川（天白川支川）が出水、堤防が 6 か所（約 280m）が決壊し、大高で倒壊家屋 2 軒の被害があった。1 日矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。
文化	2	1805			板取川筋武儀郡長瀬村堤破る。	
文化	4	1807	7月下旬~8月上旬		美濃洪水あり。田畑損亡多し。	
文化	5	1808	9	15		紀伊・東海道・関東諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。
文化	8	1811	8	12		尾張、雷雨・強雨、竜巻。数日間雷雨が続き、この日名古屋城下へ多数の落雷があり、強雨が降って浸水したところもある。また熱田の沖に、竜巻が発生した（被害はなかったもよう）。
文化	10	1813	5	14	長良川 9 合余の大水。忠節用水杵樋が大破す。	
文化	10	1813	7	25	長良川通り厚見郡下奈良村堤破る。上流上之保川氾濫し、郡上郡西川村、島、馬場地内堤切入り、田畑、家屋を流失す。	
文化	12	1815	8	2~3	1 日よりの豪雨止まず。2、3 日の両日美濃諸川洪水。木曾川通り加茂郡沿河の地被害あり。各務郡前渡村堤破れ、また、飛騨川沿い加茂郡沿河の地被害あり。長良川通り厚見郡に於て水量 8 合 5 勺、早田村にて 250 間、若木村にて 40 間、宝田村にて 34 間、菅生村にて 40 間、島屋村にて数 10 間、方県郡長良村にて 98 間、安八郡氷取村にて 73 間堤塘破壊す。また、島屋村も堤切入り入水、羽栗郡足近輪中間島村にて堤 80 間を破り、竹ヶ鼻村にて破堤、死亡 1 人、流家 43 戸あり。羽栗郡西小藪村にて堤 3ヶ所を破り、安八郡楡俣村にて堤 73 間破れ、耕地 45 町歩を害す。勝質村にて堤平越しにて破壊す。上流郡上川に於ては、山県郡中屋村を初め、沿河の村々堤数ヶ所破れ、耕地を害し、側島村にて家屋入水床水深 3~4 尺あり。津保川沿い加茂郡西田原村にて堤 64 間を破り、耕地を害す。	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。31 日から 3 日まで大雨が降り続き、尾張・美濃の諸川が氾濫して被害は大きかった。三河でも矢作川が氾濫した。美濃高須・八神・竹ヶ鼻付近は最も惨害をきわめた。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					境川沿い各務郡各務村、伊尾島村、大宮村、古市場村にて堤数ヶ所を破り、耕地数10町歩余を害す。揖斐川沿い安八郡落合村にて堤破れ、曾根村にて150間（1説に100間或いは70間とも云う）余、平越しにて破壊し、激流一時に押し入り、（赤花切れと云う）北方村地内を貫き、20町歩程池となる。死亡10人、流家50戸あり。大垣町亦入水。家屋床上水深4～5尺あり。曾根切れ滞留め直ちに着工するも、翌年2月に至りやっと落成す。この間、中仙道の通行人およそ60日程は渡船にて往還す。また、安八郡大明神輪中にて堤20間を破り、塩喰村にて堤破壊す。牧田川沿い多芸郡五日市村、金草川沿い同郡西岩渡村堤破れ、下石津郡福岡村にて堤破壊し、家屋10戸を流失、死者4人。大樽川沿い安八郡仏師川村堤平越しにて切入り、家屋10流失。糸貫川筋本巣郡小柿村堤破壊、相川沿い不破郡表佐村、十六村堤140間破れ、耕地20町歩を害す。牧田川沿い多芸郡大墳村堤15間切入り、耕地5段歩砂入る。	
文化	12	1815	9	5	長良川出水。春近村沿岸堤塘決壊。	
文化	12	1815	9	15	四度の洪水。長良川通り厚見郡若木村にて40間、東島村にて300間堤塘破壊し、島輪中入水、被害最も多し。また、羽栗郡西小籠村にて堤塘3ヶ所再び破壊す。	
文化	13	1816	9	24～25		四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。23日夜から風雨が強くなり、24日朝（8時ごろ）から北東の風が激しくなる。家屋の被害など出はじめる。
文化	13	1816			長良川通り出水、逆川沿い羽栗郡竹ヶ鼻村堤75間破れ、また、牧田川沿い多芸郡大墳村堤12間切入り、耕地2段歩を害す。	
文政	2	1819	4～5		長良川通り武儀郡前野村で耕地を害し、川敷となる。また、津保川沿い加茂郡西田原堤77間を破り、耕地7段歩を流失す。	
文政	4	1821	8～9		上ノ保川沿い郡上郡歩岐島、為真村、越佐村、名皿部村で耕地数町歩を害し、下流武儀郡郡上川沿い前野村にて耕地を害し、または川敷となる。	
文政	4	1821	8	31	美濃所々大風雨、洪水。	
文政	5	1822	9～10		郡上川通り武儀郡前野村耕地7段9畝歩流失、川敷となる。武儀川沿い同郡高野村にて耕地を害し、津保川沿い加茂郡西田原村堤180間を破り、耕地被害多し。	
文政	7	1824	9	5	長良川筋武儀郡前野村で破堤、流家28戸、水死27人。厚見郡日野村堤切れ4ヶ所、155間、越切れ6ヶ所、56間、流家2戸、潰家7戸、大破46戸。日野新田切所11間、越切れ4間。方県郡切所3ヶ所、82間、下尻毛75間、大藪2ヶ所破堤。境川筋羽栗郡上印食村8間、且川沿い方県郡木田村三日市境7間、板屋川沿い木田村155間、犀川沿い本巣郡十四条村6間、糸貫川筋同郡小柿村10間、馬場村15間、根尾川筋方県郡一日市場村6間、下曾我屋村112間、川部村100間破堤した。	
文政	8	1825	9	25	長良川上流上ノ保川沿い郡上郡歩岐島村、大島村、白鳥村、徳永村、河辺村にて耕地数10町歩を害し、川欠け或いは荒地となり、下流郡上川沿い上田村、山田村、大原村、三戸村にて堤長900間を破り、流家8戸、被害耕地数町歩。武儀郡にては須原村、上河和村、下河和村、保木脇村、立花村など家屋過半入水、2戸流失し、前野村堤長200間を破り、家屋	尾張・三河、大雨・洪水。連日の大雨で農作物に被害があった。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					34戸流失、死亡47人、耕地数町歩を害す。 （これを前野切れと云う。）山県郡に於ては、植野村、茂地村、古市場村の地被害あり。また、武儀川千疋村へ切り入り、側島村にて家屋の流失3戸。加納村堤長200間を破り、流家5戸。各務郡芥見村にて流家7戸。方県郡に於ては堤上水深4~5尺、水量1升5~6合、長良村にて堤塘破壊7ヶ所（長さ110~118間）流家数10戸、死亡16人あり。厚見郡に於ては日野村、江崎村にて堤3ヶ所破壊。犀川沿い本巢郡牛牧村堤長20間破壊し、揖斐川沿い高須輪中堤平越しとなる。なお、飛騨も出水。所々損害（4戸流失）あり。	
文政	9	1826	5	11	長良川通り中島郡大須村、八神村立会地字蒲池の杵樋吹き破る。	
文政	9	1826	6	21		尾張、暴風雨。早朝から夜（20時ごろ）まで風雨が強く、夜中から暴風雨となり、一宮の近村では樹木や家屋が倒れた。
文政	10	1827	6	16	木曾川通り羽栗郡川島地の村々被害多く、また、各務郡前渡村大金堤潰裂し、境川溢る。揖斐川沿い下石津郡帆引新田杵樋吹き破る。	
文政	12	1829	7		美濃大水。	
文政	13	1830	7~8		犀川沿い本巢郡牛牧村堤塘30間破壊。	
天保	2	1831	6~7		飛騨川筋武儀郡上麻生村沿岸耕地被害多し。	
天保	4	1833	9~10		暴風雨。揖斐郡家屋の倒壊人畜の死傷多し。津保川沿い武儀郡富ノ保村沿岸堤防破壊し、糸貫川沿い本巢郡曾井中島村堤70間破壊す。	
天保	7	1836	8	29	加茂郡、不破郡暴風雨あり。詳細不明。	
天保	7	1836	9	11	加茂郡、不破郡暴風雨猛烈にして、家屋多く潰れ、大樹の倒伏したもの少なからず。	
天保	7	1836	9	23	可児郡23日夜より暴風雨起り、家屋の半壊多し。大垣も被害あり。	近畿・中部諸国・江戸、暴風雨・洪水。三河、暴風雨・洪水・凶作。尾張南部および尾張知多郡方面と三河全般に暴風雨の被害をこうむった。
天保	8	1837	9	13	大暴風あり。加茂郡、可児郡にては家屋の全半壊頗る多く、一村にて50~100戸に及びし所あり。長良川出水。武儀郡小瀬村30間、池尻村40間、各務郡芥見村70間、厚見郡日野村その他山県郡数ヶ所で破壊す。可児川沿い可児郡中切村堤15間を破り、同川支川の久々利川沿い耕地の被害あり。糸貫川沿い本巢郡曾井中島村堤塘破壊し、犀川筋本巢郡牛牧村の堤も20間破る。揖斐川通り大野郡古橋村堤切り、本巢郡穂積村、別府村、稲里村入水、農作物皆無の被害を受く。多芸郡大牧村杵樋吹き破れ、下石津郡高柳、新田堤塘50間破壊す。安八郡浅草中村掛廻堤も切れ込む。この暴風雨、出水により、笠松郡代支配所の潰家5,200戸に上った。	
天保	10	1839	6	9	長良川通り厚見郡茶屋新田堤切れ、中島郡堀津村組合杵樋吹き抜ける（幅90間）。また、中村川沿い安八郡中村堤40間、犀川沿い本巢郡牛牧村にても15間破壊す。木曾川通り下石津郡日原新田堤切れる。飛騨も洪水。神通川筋吉城郡古川町の損害最も多く、二軒茶屋地蔵堂地穴壊し、川筋50~60間東へ寄る。	
天保	10	1839	9			尾張・三河、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、大留村杵の口（現春日井市）で約90m破壊して、氾濫した。また渥美郡泉村（現渥美町）地内で田に被害があった。
天保	12	1841	7	1	木曾川1升1合の大水。加茂郡太田宿に入水、流家2軒。同郡取組村では激流中仙道往還筋へ暴漲す。揖斐川9合余の出水。石津郡太田輪中太田新田堤70間切込む。また、飛騨も洪水。宮川筋吉城郡古川町の中北堤防崩壊、	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					益田川筋は被害更に甚だし。	
天保	13	1842	6	25~26	木曾川通り加茂郡取組村中仙道筋へ暴水漲溢し、家屋2戸流失。また、長良川通り中島郡小藪村堤95間破壊。益田川も洪水。沿河の流壊家10戸に上る。	尾張・三河、大雨・洪水。26日、矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。起日は不明だが、この年、木曾川の氾濫で、葉栗郡草井村（現江南市）の家屋40軒、耕地地25haが、流失あるいは被害を受けた。
天保	14	1843	10	3~4	美濃大風雨。	東海道（美濃・尾張）・関東諸国、暴風雨・洪水。
天保	14	1843	11	2	1日より3日降雨し、大洪水となる。郡上郡上之保川上流豪雨あり。高鷲村の如きは護岸堤防悉く破壊し、田畑を流す。其の他同川筋沿岸各村の耕地数10町歩を害し、島村にて流家2戸あり。下流方県郡長良村に於て水量10合余、堤3ヶ所破壊（20間から30間）、厚見郡に於ては旦ノ島村にて150間、江崎村数10間、下奈良村にて47間、日置江村数10間堤塘を破壊し、方県郡河渡村にて堤平越の所200間切入り、河渡と中津の入会堤500間を破り、家屋残らず入水、流家、潰家あり、惨状最も甚し。本巢郡穂積村も堤30間破壊。板取川沿い武儀郡長瀬村堤132間を破り、耕地6段歩余流亡す。武儀川沿い武儀郡八幡村堤破れ、網代川（板谷川上流）筋本巢郡西秋沢村も堤破れ、耕地を害す。糸貫川沿い同郡本田村堤70間破れ、ために穂積、別府、稲里の3ヶ村の地入水す。また、犀川沿い同郡牛牧村にて堤25間破壊し、根尾川沿	
					い同郡東板屋村にて山地崩壊、同村並びに樽見村、板所村沿河の地所々被害あり。藪川沿い大野郡稲富村堤230間を破り、海老村堤150間破壊、耕地3町歩余を害す。	
天保	15	1844	10~11		長良川通り武儀郡前野村耕地流亡し、各務郡芥見村堤60間を破る。また、武儀川沿い武儀郡八幡村耕地被害多し。	
弘化	2	1845	6~7		上ノ保川沿い郡上郡川辺村、神路村にて耕地数町歩流亡す。揖斐川沿い池田郡小島村にて破堤あり。加茂郡白川筋もまた出水す。	
弘化	3	1846			糸貫川筋、本巢郡本田村で80間破堤。津保川筋武儀郡富之保村耕地被害あり。	
弘化	4	1847	5	24	美濃大風雨。大垣では23日雨、24日朝六ツ時過ぎより北東の大風吹き出し、五ツ時頃最も烈しく、所々の高塀倒れ、東長町日比野包助方の長屋門倒潰す。五ツ半時頃風南東に変わって止むも、程なく西方より大風の吹き返しがあり、高塀など多く倒れ、樹木の倒るもの数を知らず。四ツ半時頃になって風全く止む。古宮筋だけでも小屋等29軒倒潰す。その他一ヶ村に1~2軒ずつ倒れし由。笠松、岐阜方面は遙かに強風なりし由なり。	美濃・尾張、暴風雨。美濃・尾張では、暴風で大木が倒され、美濃では大垣などで家屋の被害も多かった。尾張でも民家の海中へふき倒されたものがあつた。知多郡大高村では、全壊家屋4戸、半壊家屋1戸の被害があつた。
嘉永	1	1848	5		長良川出水。武儀郡前野村堤100間余破壊、耕地1町8段を害す。下流方県郡長良村堤3ヶ所破堤、長さ100間に及ぶ。	
嘉永	1	1848	9	5~6		伊勢・尾張、暴風雨・洪水。尾張の各河川が出水し、ところどころで破堤して氾濫し、家屋の被害もあつた。
嘉永	2	1849	9	17		尾張、長雨・大雨・洪水。8月から大雨が続く、田畑の浸水が甚だしく、作物はほとんど腐つた。
嘉永	2	1849	11	2	牧田川通り多芸郡大墳村堤15間切入り、耕地を害す。また、長良川氾濫し、郡上郡相生村付近耕地流亡、堤防護岸の欠壊多し。	
嘉永	3	1850	8	28~29	東海道諸国大風雨あり。可見郡竹木の倒潰甚し。大垣では八ツ半時頃より北東の風吹き出し、夜に入りて次第に強く、四ツ時頃より大風となる。翌28日朝六ツ時頃より追々静か	尾張・三河に風水害があつた。伊勢・美濃・尾張・三河・遠江・駿河6か国の農地被害概算は約100万石といわれる。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					になるも、長屋2棟半倒壊、高塙所々倒壊、大垣領分の内小家20軒程倒る。9月2日また大風あり。4日、5日出水8合に及ぶ。	
嘉永	3	1850	9	8~15		尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。8日から13日までの間大雨が降り（12日夜から13日朝にかけては暴風雨）、その後も17日まで雨はやまなかった。このため、尾張・三河の各河川は全般に出水し、大きな水害となった。
嘉永	3	1850	9	13	暴風雨あり、出水。木曾川通り加茂郡取組村中仙道へ激流押入り水深3尺、支流中津川沿い恵那郡中津川村、駒場村、手賀野村堤300間を破り、耕地15町歩を害す。長良川通り武儀郡前野村耕地流亡、各務郡芥見村を始め、厚見郡池ノ上、近島400間、本巢郡穂積村50間、中島郡小藪村85間破堤、安八郡南条村杵樋吹き抜け、堤32間切入る。揖斐川通り安八郡大明神輪中、堤15間、西結村、大野村64間、福東村堤50間切れ、流家16戸、死亡5人。大牧新田堤84間、流家33戸、大牧村などで破堤。また、津保川筋加茂郡高畑村211間、肥田瀬村130間、稲口村38間破堤。この他、境川筋厚見郡鷓村、逆川沿い中島郡蜂尻村、大樽川沿い安八郡四郷、津屋川沿い多芸郡大跡新田で何れも破堤した。	
嘉永	4	1851	8	16	7月以後霖雨続きしが、終に暴風雨吹き大洪水となる。高須輪中は堤防所々破壊、入水のため作物収穫皆無となる。牧田川沿い多芸郡島田村破堤耕地を害す。津保川筋武儀郡富ノ保村、下ノ保、神野、西神野などに被害あり。また、可児川沿い可児郡の他、田畑の流失、浸水多く、堤防の決壊100間に及び、農作物の被害多し。	
嘉永	7	1854	2		美濃洪水あり。	
嘉永	7	1854	7	15	木曾川通り各務郡前渡村にて堤塘120間余破壊、家屋流失27戸、同入水25戸、被害地20町5段歩、同郡下切村にて流家17戸、入水33戸、被害地7町9段歩、水下の羽栗、厚見、中島3郡の被害最も多し。また、糸貫川沿い本巢郡北方村56間決堤、伊自良川沿い山県郡小倉村堤346間破壊、流家1戸、耕地被害9段歩あり。	
嘉永	7	1854	7~8		付知川大水。恵那郡付知村、田瀬村、福岡村耕地数10町歩を害す。加茂郡白川筋また出水の被害あり。	
嘉永	7	1854			武儀郡板取川氾濫。洞戸村大水、詳細は不明。	
嘉永	7	1854			木曾川出水。各務郡前渡にて決堤、耕地湛水10町、砂入り25町、積となりしもの25町歩、流家15戸あり。	
安政	2	1855	8	13	木曾川通り恵那郡沿河の地、激流暴漲。落合川沿い同郡落合村堤120間破れ、耕地1町歩流失。中津川沿い同郡中津川村、駒場村、手賀野村堤650間破れ、耕地40町歩を害す。阿木川沿い同郡阿木村、東野村、正家村、大井村にて耕地20町歩余を害し、家屋10戸流失。可児川沿い可児郡の地にて決堤200間、耕地数町歩を害す。長良川沿い安八郡南条村にて決堤30間、武儀川沿い武儀郡高野村、岩佐村、谷口村、宇多院村、平村にて堤数ヶ所破れ被害多し。揖斐川沿い大野郡西座倉村堤37間、七崎村30間、座倉村30間を破壊し、被害地数10町歩あり。また、池田郡小島村にて数ヶ所決堤、耕地数町歩を害す。相川沿い不破郡表佐村にて決堤50間、耕地60町歩を害す。	

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
安政	2	1855	9	7~10	可児川一升七合の大水、大被害あり。11日土岐川出水。従来多治見橋付近は40~50間の川幅なりしが、この洪水により、長瀬堤防川欠け、現今の川幅に広まる。武儀川大水。山県郡富波村青波にて流家1戸、山地の崩壊、耕地の流亡数10ヶ所に及ぶ。	尾張・三河、暴風雨（大雨）・洪水。7月7日朝から大雨が降り、夜に入っても降り続き、8・9日はやんだ。しかし、9日夜には再び豪雨になり、10日まで続いた。（7日と10日は暴風雨）。このため各所の堤防が決壊したが、前年の大地震後の復旧が完了していなかったのが被害は大きくなった。
安政	2	1855	9	21	粗川通り池田郡小島村にて決堤500間、家屋18戸流失、耕地数町歩を害す。牧田川沿い多芸郡大墳村堤18ヶ所切入り、耕地数町歩を害し、直江村堤塘2ヶ所延長110間破壊、耕地60町歩余を害す。また小畑川沿い飯積村堤2ヶ所60間を破壊し、耕地2町歩余を害す。	
安政	2	1855	9	30	東海道諸国大風雨。牧田川筋石津郡沢田村東140間、大畔40間、茶園原26間、押越村北28間切入り、津屋川沿い多芸郡駒野新田切込み、その他大場新田、釜段新田悪水堤破壊。また、杭瀬川沿い池田郡八幡村、糸貫川筋本巣郡北方村で切れ込む。	四国・近畿・東海道諸国、暴風雨。尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。名古屋、30日午後から暴風雨となり、夜になって最も強くなった。夜22時ごろ伊勢湾・渥美湾に高潮がおこり、伊勢湾沿岸の新田堤防や海岸堤防91か所が決壊した（知多半島から海部郡まで）。流失家屋130軒、死者20人の被害があり、とくに甚だしかったのは堀川・庄内川の間の築地前・熱田前・稲富・永徳・神宮寺の新田であった。
安政	3	1856	8	10	長良川通り各務郡芥見村堤塘150間を破る。武儀川上流大水。山県郡神崎、葛原にて流家各1戸あり。谷合北山の各村及び武儀郡高野村等沿河の地、道路の決壊、耕地の流亡多し。鳥羽川筋同郡桜尾にても決堤す。揖斐川沿い大野郡本庄村50間決堤あり。	
安政	4	1857	6	8~9	7日より豪雨。川上川沿い恵那郡川上村、坂下村にて家屋18戸流失、耕地14町歩流亡。付知川沿い同郡付知村、田瀬村、福岡村にて耕地10数町歩余を害す。また、白川大水、沿河の地山崩れあり。橋梁流失す。8、9両日大雨のため木曾川以下諸川氾濫して、堤防を破壊するもの北方代官支配に4ヶ所、鵜多須代官支配に9ヶ所を生ずとある。	美濃・尾張、大雨・洪水。各河川が氾濫した。
安政	5	1858	6	26	伊自良川沿い方県郡城田寺堤100間切入り、越えて9月（旧暦）の出水に再び破壊した。	
万延	1	1860	6	29	大風雨。家屋の倒壊、竹木の倒伏甚しく、各川出水す。木曾川沿岸加茂郡取組村に氾濫、各務郡前渡にて欠壊入水し、前宮村全潰す。長良川上流上之保村川沿い郡上郡向小駄良村にて耕地を害し、武儀郡前野村堤200間を破り、耕地1町1段7畝歩を害し、上有知村堤150間を破り、耕地3町歩を害し、山県郡加野村堤240間、厚見郡江崎村、鏡島村、下奈良村、高河原村堤数ヶ所を破り、方県郡一日市場村堤3ヶ所（長さ20間より6間まで）を破り、曾我屋村堤6ヶ所（100間より20間）破壊し、潰家5戸あり。寺田村堤20間切入、家屋を涵し、河渡、生津両村立会地堤平越のところ200間切入り、本巣郡穂積村堤30間を破り、百曲川沿い厚見郡次木川、境川沿い高桑村堤2ヶ所破壊す。揖斐川沿い大野郡房島村堤150間破り、耕地6段歩を流亡。本庄村堤48間を破壊し、大月村、宮田村立会地堤30間を破り、両村耕地70町歩を害す。池田町小島村の内、沿河の地所々堤破り、大野郡杉野堤150間（又85間とも云う）を破り、激流押し入り、ために安八郡加納村堤30間破り、耕地30町歩を害し、四成村堤25間破り、耕地45町5段歩を害す。（これを「杉野切れ」と云う。）新屋敷村堤2ヶ所（36間及び18間）破壊し、東結村堤100間破り、家屋100戸流失、耕地数10町を害し、ために、墨俣村、西橋村、二ツ木村入水、墨俣村にて家	美濃・尾張、暴風雨・洪水。伊勢湾に高潮がおこり、新田に被害があったが、あまり著しいものではなかった。中島郡起村（現一宮市）では、全壊家屋2戸、半壊家屋6戸の被害があり、そのほか尾張地方に建物や人の被害があったもようだが詳細は不明。尾張藩領内の被災村数は115か村、農作物被害高は12万石。三河では、矢作川水系が出水し、大平橋（現岡崎市）をはじめ橋の流失があった。また乙川の太平橋下流で浸水した。また上流の拳母村（現豊田市）内でも破壊している。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					屋2階の上まで入水せり。西結村堤25間破し、大明神輪中18間破壊し、多芸郡船附村堤破し、津屋川沿い鷺巣村堤切入、下石津郡徳田新田堤塘182間破壊し、堤内田面の水嵩1丈3尺余、被害40町歩余、多芸輪中家屋入水。根尾川沿い本巣郡東板屋村、西板屋村、板所村、木知原村、神海村にて堤2ヶ所（80間及び100間）破壊し、耕地20町歩余を害し、藪川沿い大野郡稲富村堤を破り、耕地2町歩を害し、七崎村、居倉村堤30間破壊し、耕地5町歩を害し、唐栗村堤43間を破り、耕地を損し、粕川沿い池田郡小島の内、元市場村等の堤を破壊し、耕地3町歩を害するなど、その惨害頗る多し。大垣城下へも水押入る。	
万延	1	1860	7	16	長良川通り各務郡芥見村堤410間破壊し、家屋1戸流失し、岩田村まで入水。厚見郡古津村堤40間破し、耕地4段歩を害し、日野村堤70間破壊し、耕地7段歩を損し、早田村堤100間を破り（水量9合余）、中島郡江口村、且ノ島村にて堤5ヶ所（200間）破壊し、鏡島村、江崎村もまた破所あり。	
万延	1	1860	7/29, 9/2, 10/12			尾張・三河、暴風雨・凶作・ききん。稲など農作物に強風が被害を与えたらしい。この年は余り強くはなかったが何度も暴風がふき農作物の収穫に影響した。
万延	1	1860	8	15	大風雨。家屋倒壊し、巖美村加野堤塘決潰。	
万延	1	1860	9	19	18日夜より19日午前に亘り、稀有の強雨あり。本年第4回の出水を見るに至れり。長良川通り厚見郡古津村、日野村、下奈良村にて堤防所々破し、方県郡一日市場村堤3ヶ所切入り、逆川沿い羽栗郡南之川村堤破壊す。	
万延	1	1860	11	2	長良川洪水。山県郡戸田へ切入り、次第に増大し、今日に至る。故に本川を一名今川と呼ぶと云う。	
文久	1	1861	8	10	木曾川通り羽栗郡松本村の内、送り木島流亡、川敷となる。牧田川沿い多芸郡大墳村堤9間余切入り、耕地を害す。	
文久	1	1861	9	12	津保川筋武儀郡富之保村耕地に巨害を被った。	
文久	2	1862	11~12		長良川通り厚見郡日野村で耕地流亡した。	
文久	3	1863	9	4	長良川通り方県郡河渡村、本巣郡生津村立会地堤150間切入り、稲田数10町歩を損す。	
慶応	1	1865	7	9	7日暮れ六ツ頃より3日に亘り大豪雨、各川大洪水となる。木曾川通り恵那郡沿岸の地激流暴漲し、中津川沿い中津川村、駒場村、手賀野村堤400間を破壊し、耕地4町歩を害し、可児郡伊岐津志村字監口に於て、家屋16戸流失、被害地2段3畝歩。加茂郡細目村家屋46戸流失、被害地1町歩、酒倉村、取組村、勝山村家屋数戸流失、上古井村被害地3町2段歩、知和村同8段歩（該郡沿岸の地に於て、天明6年8月の洪水に比すれば水量2尺低しと云う）。各務郡前渡村（水量1升2合）堤塘120間を破り、家屋流失2戸、半潰10戸、死亡1人、被害地21町9段歩。下切村堤98間破壊し、家屋流失15戸、半潰28戸、死亡16人、被害地6町3段5畝歩、濤先き不動山へ衝突して羽栗郡の地へ流れ、米野村にて決潰3ヶ所（各長さ20間）、中野村、円城寺村々境にて2ヶ所、川島地内笠田村2ヶ所（長さ50間、70間）、被害地11町余、松倉村同200間、家屋流失又は浸水するもの数戸、被害地最も多し。柳津村字須賀多堤13ヶ所破し、田代村家屋流失2戸、死亡2人、両村被	美濃・尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、左岸の瀬古村（現名古屋守山区）・中切村（現名古屋西区）、右岸の味鏡村（現名古屋北区）・勝川村（現春日井市）で破堤して氾濫、一帯に大水害をこうむった。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					害頗る多し。平野村の辺に於ては激流堤上に溢し、その深さほぼ3尺。ために堤外の船舶皆堤上を越えて堤内に入り、沿河数10ヶ村恰も一大湖の如く、家屋の流失、人畜死亡最も多し。中島郡駒塚村にても決壊、須賀村正木堤も破し、海西郡成戸村にても決潰せり又各務郡前渡村など決潰のために境川沿い厚見郡蔵之前村堤2ヶ所（合せて90間）、切通村1ヶ所45間、細畑村3ヶ所（合せて112間）、領下村1ヶ所18間、下川手村18ヶ所（合せて212間）、茜部村7ヶ所（合せて118間）、高桑村1ヶ所55間、佐波村4ヶ所、荒田川下流百曲川沿い鷓村4ヶ所（合せて165間）破壊し、家屋耕地の害を被るものその数最も多し。羽栗郡南宿村にても決堤80間、又可児川沿いの地にても同100間あり。土岐川、板取川その他諸川出水せり。	
慶応	2	1866	6~7		長良川通り厚見郡菅生村堤塘2ヶ所（50間、27間）破壊す。	
慶応	2	1866	6	26~27		尾張・三河、強風雨。田植期の26日夜から27日にかけて風雨が強く、竹・木が折れる。夏作は不作となる。
慶応	2	1866	9	14~15	15日飛驒大風雨。飛驒にて破堤、死者あり。又大風にて稲多く損。大垣14~15日大雨、夜大風。	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。尾張・三河では、13日夜から15日まで大雨が降り続き、15日は夜（20時ごろ）から翌朝（7時ごろ）まで暴風雨であった。尾張では、家屋・樹木・農作物の被害が大きかった。岡崎では河川の出水により、家屋の浸水もあり、三河の農作物も大きな被害を受けた。
慶応	2	1866	9	16	郡上川通り武儀郡前野村耕地1段7畝歩余流失す。境川沿い厚見郡高桑村堤塘、糸貫川沿い本巣郡生津村同42間、犀川沿い同郡牛牧村堤防並に戸羽川沿い山県郡高木村30間破壊し、又揖斐川沿い大野郡房島村にて堤160間破し、耕地5段歩余流失、池田郡小島村にて堤30間破し、耕地5町歩砂入、安八郡西結村堤塘30間破し、ために墨俣村、西橋村、下宿村、二つ木村入水し、藪川沿い大野郡唐栗村堤72間破し、耕地5町歩猪池となり、2町歩流亡、家屋7戸流失、死亡9人。田ノ上村、居倉村の内、耕地数町歩荒地となる。又犀川堤塘破壊して、その水長良川へ押貫き、被害最も多し。相川沿い不破郡16村堤270間破し、耕地4町歩砂入りとなる。この暴風は16日七ツ時より九ツ時まで烈しく、稲種突らず、加茂郡東部地方にては翌年飢饉となり、安八郡地方にても家屋の倒壊および稲作の被害甚だ多かりしと云う。飛驒も大風。稲作大損害。	
慶応	2	1866	9	21	飛驒諸国大雨、洪水。神通川筋益田川筋大被害。飛州大洪水。就中、神通川通り桐生村、広瀬村、古川中北村の堤防道路欠壊甚だしく、益田川通り羽根村萩原町の堤防道路も亦同じ。故に後年まで之を「寅年の大水」と呼ぶ。境川筋厚見郡高桑村でも再び切入る。	
慶応	3	1867	6	19	揖斐川通り池田郡上野村及び小島村の内、元溝尻村立合堤塘80間切入る。耕地5町歩砂入、この年長良川大水。厚見郡日野村、同新田の耕地川欠した。	
慶応	4	1868	5~6		木曾川通り羽栗郡笠田村堤塘3ヶ所700間、50間、30間破壊し、耕地210町歩流亡、家屋10戸流失、木曾川幹流笠田村の圍堤を貫く（是より船筏を通ずること殆んど1ヶ年余に及ぶ）。松倉村の内宇西牛子村社、榎神社境内川敷となり、可児川沿い堤29間破壊、境川沿い各務郡和合村堤200間破り、耕地3町4段歩余を害し、大宮村堤150間破し、耕地3町6段歩余を損し、武儀川沿い武儀郡岩	近畿・東海道・関東地方、長雨（大雨）・洪水・凶作。尾張・三河とも、閏4月中旬（旧暦）から連日雨が降り続き、5月（旧暦）に入ってさらに甚だしくなった。このため、低地の浸水や諸川の氾濫がおこったが、ことに丹羽郡入鹿池堤防の決壊による被害は甚大であった。この雨で、この年は凶作となる。これは、多雨型の梅雨とその末期の大雨によるものである。

和暦		西暦			記事（岐阜県災異誌）	記事（愛知県災害誌）
年号	年	年	月	日		
					<p>佐、谷口、宇多院、平野4村堤所々破壊し、大樽川沿い安八郡四郷村などにて決堤あり。揖斐川沿い池田郡小島村の粕川沿い同村にて堤所々破し、揖斐川沿い安八郡塩喰村堤86間中堤3ヶ所破壊、大垣輪中深溜り水家屋を浸し、耕地農産物を害し、牧田川沿い上石津郡牧田村堤塘数ヶ所破壊し、耕地数町歩を害す。津保川沿い武儀郡下ノ保大水町区、殿村区浸水、家屋流失多く、小舟を以って高地に避難せりと云う。5月より6月にかけて連日の霖雨のため、濃尾2州の諸川氾濫して数ヶ所の堤防を決し、田畑に浸水す。殊に入鹿池の堤防壊敗して近村の民家を流失し、人畜に死傷あり。6月23日より7月8日に至る間、暴風、強雨にて諸川出水。6月29日内堤防川口村地内にて破壊、外に堤防の決壊なきも近年稀なる深溜にて、田面深さ1丈余、田畑宅地は勿論人家へも浸水し、凡そ6月19日許り浸水、作物悉く腐敗す。是を「辰年の洪水」と云へり。被害反別1,824町歩、堤防破壊5ヶ所。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月26日夜大雨となり、大江川・西川が氾濫して東村・釘貫・祢宣町・井桁（現一宮市）が浸水した。</li> <li>・7月3日入鹿池堤防決壊、庄内川堤防決壊。</li> <li>・7月5日大江川が向山浦（現一宮市）で3度破堤し氾濫。</li> </ul>
慶応	4	1868	9	16		<p>尾張、大雨・洪水。庄内川水系が出水し、庄内川の上・中・下志段味村、ほかの各所で堤防が決壊した。矢田川でも瀬戸村・瀬古村・成願寺村・中切村・福徳寺村等で破堤して、家屋流失や死者も出た。名古屋も巾下付近で家屋の浸水が甚だしく、本町・広小路・赤塚（当時は小川や溝が多かった）も床下浸水した。また、一宮等尾張西部地方でも低地が浸水した。</p>

災害年表(風水害) 明治時代以降

和暦年	開始日			気象概要	岐阜県			愛知県			事象	
	西暦	月	日		気象値			気象値				
					降水量	風速等	事象	長期間降水量	短期間降水量	風速等		
指標	観測局	値	指標	観測局	mm	指標	観測局	mm				
明治 10	1877	10		暴風雨								愛知県下全般に暴風雨。死者13人、負傷者9人、家屋全壊1,058戸、家屋半壊253戸の被害があった。
明治 14	1881	9	12	大風雨								
明治 15	1882	8	6	長雨・暴風								
明治 17	1884	7	16	増水								
明治 18	1885	7	1	暴風雨								
明治 26	1893	8	22	暴風雨								
明治 27	1894	8	23	落雷								尾張西部に落雷があり、中島郡で死傷者2人、気絶者7人があった。
明治 28	1895	7	29	豪雨・長雨								
	1895	8	13	落雷								強い雷雨が続き、丹羽郡・東加茂郡・中島郡で、それぞれ死者1人。
明治 29	1896	7	20	豪雨								
	1896	8	30	暴風雨・高潮								紀伊半島西部から若狭湾に進んだ台風により、尾張地方を中心に死者33人、負傷者63人、全壊住家2,104戸の被害が出た。海岸地方では高潮により新田に大きな被害。
	1896	9	4	長雨								長雨と集中豪雨により、矢作川以西の河川が破堤・氾濫した。愛知・東春日井・西春日井・中島・海東5郡の被害が甚大であった。
明治 30	1897	6	16	落雷								強い雷雨で、住家の全壊3棟、建物破壊7棟。また大雨で名古屋市内の約1,500戸が浸水した。
	1987	9	29	洪水								四国北部から名古屋の南を通った台風に伴い、大雨が降った。海西郡閉治村で佐屋川の堤防が決壊し、死傷者4人、床上浸水10,604棟の被害を出した。
明治 31	1988	6	29	豪雨								
	1988	8	3	雷雨								
明治 35	1902	9	28	暴風雨	日雨量	岐阜	62mm	最大風速	22.1m/s(岐阜)			尾張西部と関東地方を相次いで北上した2つの台風により、尾張地方で強い暴風雨となった。
明治 36	1903	7	7	大雨・暴風・洪水	3日雨量	岐阜	198mm	最大風速	13.7m/s(岐阜)			土佐沖から若狭湾に進んだ台風に伴う大雨と暴風雨で、死者・行方不明者8人、負傷者39人、などの被害が出た。東春日井郡神坂村の内津川や西加茂郡孝母町・根川村の矢作川が破堤した。
明治 37	1904	7	9	台風	5日雨量	岐阜	303mm					10日、和歌山の東方から彦根付近に進んだ台風に伴う暴風雨で、豊川・矢作川等に氾濫被害が出た。台風の通過後も雨が続き、11日には東春日井郡藤木村と高間村で庄内川が破堤し、名古屋市内の住家1,082戸、非住家110棟が浸水した。被害が大きかったのは三河地方で、死者39人はすべて東三河でのためである。
明治 38	1905	6	21	台風	5日雨量	岐阜	291mm					
	1905	8	17	台風	2日雨量	岐阜	132mm					
明治 39	1906	7	10	大雨	4日雨量	岐阜	128mm					大雨により庄内川・矢作川流域で、堤防決壊の被害が出た。



和暦年	開始日			終了日			岐阜県				愛知県				
	年	月	日	年	月	日	気象概要		気象値		気象値		気象値		
	西暦	月	日	西暦	月	日	概要	指標	観測局	値	風速等	指標	観測局	mm	風速等
昭和5	1930	7	31		7	31	水害	4日雨量	岐阜	125mm					
昭和6	1930	7	23		7	23	落雷・洪水								
昭和7	1931	10	13		10	13	大雨・洪水								
昭和8	1932	7	8		7	8	大雨					1時間雨量	名古屋	92	
昭和9	1932	9	4		9	4	落雷								
昭和10	1932	9	10		9	10	水害	岐阜	73mm						
昭和11	1933	8	24		8	24	落雷・洪水								
昭和12	1933	9	14		9	14	豪雨					1時間雨量	名古屋	27	
昭和13	1934	9	8	9	9	9	強風雨								
昭和14	1934	9	21		9	21	台風第7号(室戸台風)	岐阜	11mm						
昭和15	1934	11	1		11	1	大雨								
昭和16	1935	10	27		10	27	豪雨					3時間雨量	名古屋	126	
昭和17	1936	10	2	10	3	3	台風	岐阜	139mm			1時間雨量	名古屋	41	
昭和18	1937	7	13	7	15	15	長雨・豪雨								
昭和19	1937	9	11		9	11	暴風雨	岐阜	59mm						
昭和20	1938	7	3	7	5	5	大雨	岐阜	291mm			1時間雨量	名古屋	27	
昭和21	1939	8	7		8	7	落雷・洪水								
昭和22	1939	9	16	9	17	17	低気圧	岐阜	110mm						
昭和23	1940	9	12		9	12	台風	岐阜	24mm						
昭和24	1942	10	1		10	1	前線								
昭和25	1944	10	7	10	8	8	強風雨								
昭和26	1945	9	18		9	18	台風第16号(枕崎台風)	岐阜	179mm						
昭和27	1045	10	5		10	5	台風第19号								
昭和28	1045	10	11		10	11	台風第20号(阿久根台風)	岐阜	140mm			1時間雨量	名古屋	49	
昭和29	1048	11	19		11	19	台風第34号								
昭和30	1949	8	31	9	1	1	キティ台風	岐阜	171mm						

和暦年	開始日			終了日			岐阜県				愛知県				
	西暦年	月	日	気象値		風速等	気象値		風速等	気象値		風速等	気象値		
				指標	観測局		指標	観測局		指標	観測局		指標	観測局	
昭和25	1950	7	28	7	30	台風第9号・熱帯低気圧	4日雨量	岐阜	124mm						九洲の南海上で停滞した台風と熱帯低気圧に伴う大雨の影響で、1,600余戸の浸水被害が出た。
	1950	9	3			台風第28号(ジェーン台風)	3日雨量	岐阜	125mm	最大風速26.1m(岐阜)					室戸岬から若狭湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋、一宮市、西加茂郡で計6人の死者を出した。
昭和26	1951	7	8	7	16	梅雨前線	9日雨量	岐阜	308mm						
昭和27	1952	6	23	6	24	台風第2号(ダイナ台風)	2日雨量	岐阜	163mm						紀伊半島南端に上陸し遅美半島に進んだ台風と、それに刺激された梅雨前線の影響で、東海道地方全域に大雨が降り、長良川下流域で堤防が決壊して大災害となった。
	1952	7	10	7	11	豪雨・洪水	7日雨量	岐阜	300mm						前線の活動が活発になり、庄内川中流域から名古屋にかけて大雨が降った。名古屋近郊の天白川、山崎川が増水氾濫し、名古屋市で床上浸水2,353戸、床上浸水38,757戸の被害となった。
昭和28	1953	7	17	7	20	大雨	8日雨量	岐阜	276mm						日本海から延びた前線の通過に伴い局地的に豪雨が降り、名古屋市で1,500余戸の浸水被害が出た。
	1953	9	25			台風第13号(テス台風)	4日雨量	岐阜	208mm						熊野灘から知多半島に進んだ台風により県下全体で暴風となった。大潮の時期に高潮が重なり、暴風による波浪とともに海岸堤防を破壊し被害が大きくなった。名古屋市をはじめとして6市26町76村に災害救助法が適用された。
昭和29	1954	7	30			豪雨									飛騨川下流域から南下した雷雲が名古屋市北西部に達し、移動経路上で短時間の豪雨を降らせた。名古屋市北部、西部の限られた狭い地域で5,000戸を超える家屋が浸水した。
	1954	8	31	9	1	豪雨									数多くの雷が発生し、入鹿池周辺や中島郡、海部郡、名古屋市などに大雨を降らせた。尾張西部を中心に床上浸水289戸、床上浸水11,730戸の被害が出た。
	1954	9	18	9	19	台風第14号(ローナ台風)	2日雨量	岐阜	76mm						紀伊半島南端をかすめ御前崎に上陸した台風に伴う暴風雨で死者4人の被害が出た。
	1954	9	25	9	26	台風第15号(洞爺丸台風)	4日雨量	岐阜	68mm						台風に刺激された本州南岸の前線が、名古屋付近から知多半島にかけて激しい雨を降らせ、名古屋市で5人の負傷者、3,448戸の浸水家屋が出た。
昭和30	1955	8	27	8	31	低気圧と前線	5日雨量	岐阜	111mm						
	1955	10	20			台風第26号	4日雨量	岐阜	107mm						田辺付近に上陸し、強い勢力を保ったまま名古屋と岐阜の間に進んだ台風の暴風で、74戸の家屋が全半壊した。これに伴う死者3人、負傷者18人という被害が、名古屋市を中心に発生した。
昭和31	1956	7	7			大雨									寒冷前線の通過に伴う強い雨で、名古屋市を中心に浸水被害が発生した。
	1956	9	26	9	27	台風第15号	3日雨量	岐阜	186mm						湖岸から東海道沖を通過して御前崎に上陸した台風により、名古屋市で全半壊家屋4戸、浸水家屋3,559戸の被害が出た。
昭和32	1957	6	25	6	28	台風第5号	5日雨量	岐阜	165mm						
昭和33	1958	8	25	8	26	台風第17号	4日雨量	岐阜	142mm						和歌山県白浜付近から琵琶湖西岸を通過した台風により、各地で浸水被害が起きた。
	1958	9	26	9	27	台風第22号(狩野川台風)	2日雨量	岐阜	91mm						
昭和34	1959	8	12	8	14	台風7号・大雨	4日雨量	岐阜	262mm						太平洋岸の前線と北上する台風第7号の影響で大雨が降り、負傷者1人、家屋全半壊25戸、床上浸水14戸、床上浸水8,826戸の被害が出た。
	1959	9	26			台風第15号(伊勢湾台風)	3日雨量	岐阜	133mm	最大風速32.5m(岐阜)					湖岸から富山湾に進んだ台風によって猛烈な暴風雨となった。また高潮による異常潮位が伊勢湾で基準面上4mに達した。急激な洪水波と高潮で、木曾川、庄内川、矢作川などが破壊し、死者3,260人、負傷者59,045人、住家全壊23,334戸、住家半壊97,049戸、流失家屋3,194戸、浸水家屋10万戸以上という未曾有の被害を出した。
昭和35	1960	8	11	8	13	台風第11号、第12号	6日雨量	岐阜	276mm						相次いで室戸岬から日本海へ進んだ台風の影響で、海部郡立田村で長良川が氾濫し1戸が流失した。また名古屋市北区で突風が吹き1戸が倒壊した。

和暦年	開始日			気象概要	気象値				風速等	事象	愛知県					
	西暦	月	日		指標	降水量		値			長期間降水量		短期間降水量		風速等	事象
						指標	観測局				mm	観測局	mm			
昭和36	1961	6	24	6	27	大雨・洪水	9日雨量	岐阜	626mm						梅雨前線の影響(36.6梅雨前線豪雨)で、岐阜市を中心に、死傷者25人、浸水家屋26,000戸以上の被害が出た。	
	1961	9	15	9	16	台風第18号(第2室戸台風)	3日雨量	岐阜	263mm						台風の影響で、岐阜市を中心に、死傷者117人、浸水家屋7,000戸以上の被害が出た。	
昭和37	1962	7	2	7	5	大雨・洪水									室戸岬に上陸し若狭湾に進んだ台風の暴風雨で、飛散物や倒壊物による多数の負傷者が出た。知多郡大府町内に竜巻が発生し、愛知県豊明方面で消滅した。この竜巻で8工場が倒壊、14人が重軽傷を負い、家屋120戸が破損した。また尾張平野の北部や西部で小河川が溢水、破壊して浸水被害が発生した。	
	1962	8	26	8	27	台風第14号	5日雨量	岐阜	108mm						北上し活発化した梅雨前線の影響で名古屋方面で大雨となり、千種区の秋野池の堤防が決壊するなどした。尾張地方で全壊1千戸、半壊1戸、床上浸水892戸、床下浸水13,182戸の被害が出た。	
昭和38	1963	5	6			梅雨前線と台風第2号									尾鷲付近に上陸し北上した台風の暴風で、家屋が倒壊し負傷者も発生した。また名古屋方面で浸水家屋が発生した。	
昭和39	1964	8	3			落雷・洪水・突風									炎天と上空の寒気の影響で猛烈な雷雨が発生した。名古屋市内は、中心部で地下街へ浸水したのをはじめ、床上浸水265戸、床下浸水9,814戸の被害が出た。また中区や千種区での落雷により、全焼家屋3棟、半焼家屋2棟の被害、海部郡笠江町では突風により家屋が倒れて負傷者1名が出た。	
	1964	9	24	9	25	台風第20号	2日雨量	岐阜	132mm						東海運河を進んだ台風が前線の活動を強め、強い雨が降って名古屋市内および周辺地域に浸水被害が発生した。	
昭和40	1965	5	27			台風第6号	日雨量	岐阜	159mm						志摩半島先端に上陸し伊良湖岬に進んだ台風と前線による大雨で、名古屋市内などで多くの浸水家屋が発生した。	
	1965	9	17			台風第24号	総雨量	上石津	245mm						台風第21号から変わった低気圧が停滞前線を進んだ影響で、名古屋付近から矢作川流域にかけて強い雨が降り、名古屋市内で浸水家屋約1,600戸の被害があった。	
昭和41	1966	9	19			大雨									梅雨前線を東進した低気圧の影響で雨が強くなり、小牧市の合瀬川右岸堤防が約1m崩壊し決壊寸前となった。名古屋市と丹羽郡で床上浸水3戸、床下浸水1,200戸の被害が出た。	
	1967	7	2	7	3	大雨	総雨量	岐阜	134mm						台風第7号から変わった低気圧が前線を活発化させ、雷を伴った強雨となった。小河川の氾濫や排水不良のため、主に尾張地方で16,000棟を超える浸水家屋があった。また中央線高蔵寺一定光寺間で山側のコンクリート壁が崩れて線路を埋めるところに普通電車が衝突し19名が負傷した。	
	1967	7	9	7	10	大雨	総雨量	加子母	216mm						志摩半島の先端をさすめて瀬美湾に上陸した台風に伴う大雨で、名古屋市内では両区を中心に18,000戸の浸水家屋があった。	
	1967	10	28			台風第34号	最大風速	岐阜	10.8m/s(岐阜)						台風の影響で前線が活発になり長雨が続いた。台風本体の雨は主に三河地方北東部に降ったが、名古屋周辺でも約2,000戸の浸水家屋があった。	
昭和43	1968	8	29			台風第10号	総雨量	岐阜	250mm						九州の西で発達した低気圧が梅雨前線を活発化させて大雨を降らせ、名古屋市内およびその周辺市町村での浸水家屋を主とする災害となった。	
昭和45	1970	6	14	6	16	大雨	総雨量	三界山 中津川	392mm 345mm						九州の南海上で台風6号となった熱帯低気圧の影響で、名古屋東南部での集中的な大雨となった。天白川水系が氾濫するなどとして、約4万棟の浸水家屋が生じ、昭和区、緑区内ではがけ崩れのため2人が死亡した。	
昭和46	1971	7	18			雷雨									日本海と太平洋の2つの前線の影響で強い雷雨となった。春日井市内で落雷による死者2人、名古屋市内で2,318棟の浸水被害が出た。	
	1971	8	30	8	31	台風23号	総雨量	名古屋 大沼	322mm 464mm						速度が遅く、強雨域の広い台風の影響で記録的な大雨となった。土砂崩れにより豊田市で死者2人、名古屋市内で3万戸を超える浸水被害となった。	
	1971	9	26			台風29号	1時間雨量	名古屋							時速70kmの速さで北上し紀伊半島から名古屋市の南海上を通り抜けた台風が、短時間に強い雨を降らせ、名古屋市内およびその周辺市町村での浸水家屋を発生させた。	

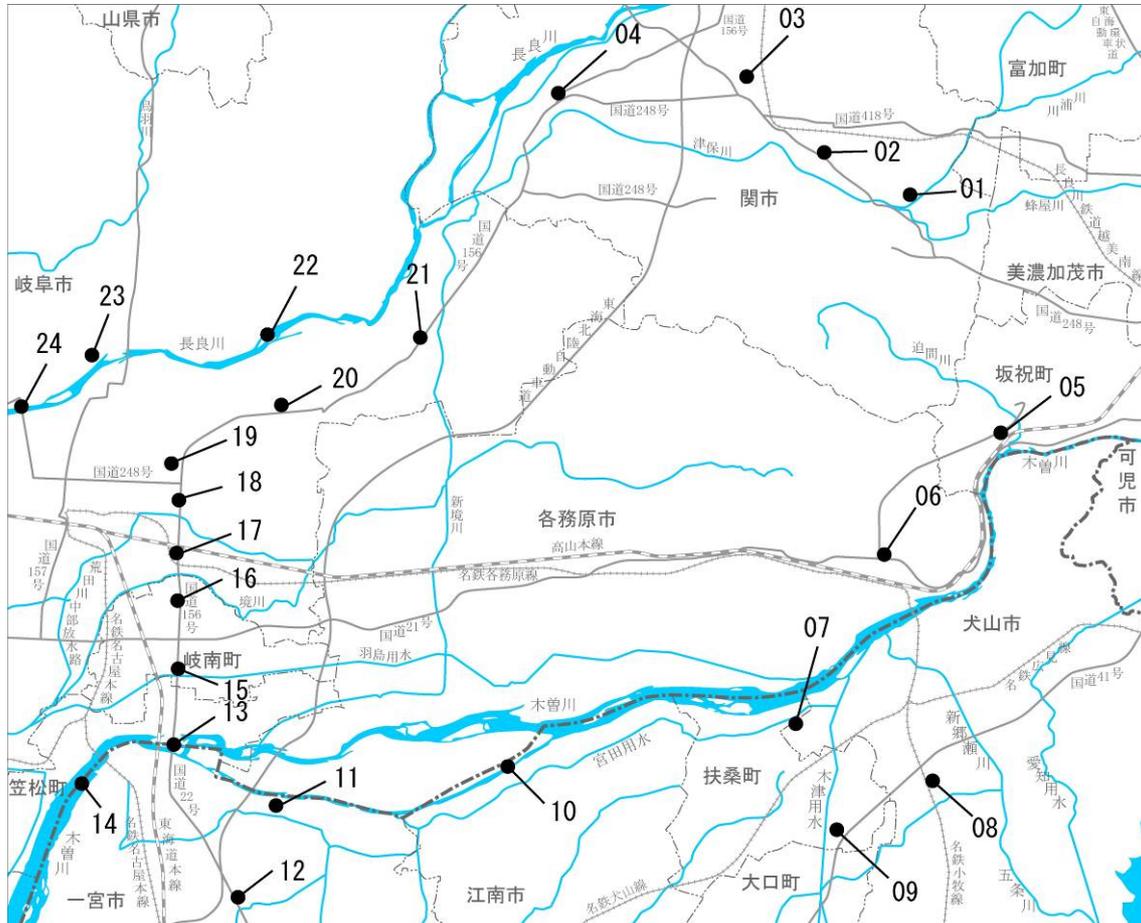
和暦年	開始日			気象概要	岐阜県				愛知県						
	西暦年	月	日		終了日	気象値				気象値					
						指標	観測局	値	風速等	指標	観測局	mm	風速等		
昭和47	1972	9	16	9	17	台風20号	総雨量	岐阜	114mm	瞬間風速31.7m(岐阜)				最高潮位2.7m	事象
昭和48	1973	8	4	8	5	強雷雨									紀伊半島を縦断して米原付近に進んだ台風(前線の影響も加わり、風雨が強まり高潮も発生した。名古屋などで飛来物による死者2人、負傷者106人、住家の半壊795棟)のぼった。
昭和49	1974	7	24	7	25	大雨									飛騨川流域から南下した雷雨が小牧付近で発達し名古屋市から北東へ進んだ。激しい雷雨により名古屋市内の地下鉄がマヒしたほか、名古屋市内およびその周辺市町村に5万戸以上の住家浸水が発生した。
昭和50	1975	7	3	7	4	大雨									動きの速い低気圧に伴う大雨の影響で、名古屋市内およびその周辺市町村に約5万戸の住家浸水が発生した。
昭和51	1976	7	24	7	25	大雨									四国南岸から東海道へ前線を進んだ低気圧の影響で強い雨が降り、瀬戸市内で崖崩れが多発して、負傷者4人を出した。濃尾平野南部でも多数の浸水被害が発生した。
昭和51	1976	7	28			雷雨	時間雨量	八百津	92mm						寒冷前線の雷雨で、落雷による住家の全壊1世帯、名古屋市と東海市で床上浸水95世帯、床下浸水4,400世帯の被害が発生した。
昭和52	1977	8	16	8	18	大雨	総雨量	大日岳	1188mm						停滞前線と東シナ海をゆっくりと北上した台風から延びた雨雲の影響で、西濃山地や鈴鹿山脈の東側が強い集中豪雨域となり、1週間に年間雨量の約1/3の雨が降った。県西部で中小河川が氾濫し、日光川支流の目比川右岸が破壊するなどして、10万戸以上の浸水被害が出た。海部郡佐織町では1週間近くも浸水状態が続いた。また名古屋市中川区・海部郡大治町では突風による家屋倒壊の被害もあった。
昭和53	1978	9	16			大雨	日雨量	岐阜	226mm						前線と弱い熱帯低気圧の影響で大雨が降り、県西部地域で家屋の半壊1棟、床上浸水、床下浸水などの住家被害が発生させた。
昭和54	1979	9	24	9	25	豪雨	時間雨量	岐阜	93mm						台風第18号から変わった弱い熱帯低気圧の影響で強い雨が降り、名古屋市内ほか県西部地域の22市町で家屋の床上および床下浸水が発生した。
昭和55	1980	7	7	7	10	大雨	総雨量	萩原	238mm						南岸沿いの前線と台風16号の影響で、局地的に短時間の強い雨が降り、名古屋市、東海市、豊明市などで床上・床下浸水の被害が発生した。
昭和57	1982	8	7	8	8	雷雨	時間雨量	美濃	72mm						活発化した前線を通過した低気圧の影響で強い雷雨となり、名古屋市北区、中区、昭和区、東区を中心に約1,000世帯の床上・床下浸水被害が出た。
昭和58	1983	7	8			雷雨	時間雨量	美濃	72mm						日本海の低気圧から延びた前線の通過に伴い、名古屋市で局地的集中豪雨となった。名古屋市内では、中川区、熱田区、港区を中心に、床上浸水413戸、床下浸水13,028戸の被害となった。上空の寒気の影響で激しい雷雨となり、名古屋市を中心とした尾張地方各地で、床上浸水、床下浸水が多発した。
昭和62	1987	9	25			大雨と雷雨									台風10号から変わった熱帯低気圧が四国南岸から本州の南を進んだ影響で、名古屋市を中心とする県西部で集中的な豪雨となり、死者5人をはじめ大きな被害が出た。
昭和63	1988	8	24			大雨	総雨量	関ヶ原	153mm	最大風速14.3m(岐阜)					九州の南から本州南岸を東進した低気圧の影響で、名古屋市を中心に雷を伴った激しい雨となり、名古屋市で床上浸水127棟、床下浸水2,380棟の住家被害があった。
昭和63	1988	8	24			大雨	総雨量	関ヶ原	153mm	最大風速14.3m(岐阜)					台風19号では死者1人、負傷者1人、いずれも東三河。気圧の谷の通過に伴う寒気の影響で、県内のほぼ全域で雷雨となり、県西部を中心に住家の浸水被害が多く出た。

開始日		終了日		気象概要		岐阜県				愛知県								
						気象値		気象値		気象値		気象値						
和暦	年	西暦	月	日	日	指 標	降水量		観測局	値	風速等	事 象	長期間降水量		短期間降水量		風速等	事 象
							時間雨量	総雨量					指 標	観測局	mm	指 標		
昭和	63	1988	9	20		時間雨量	岐阜	43mm					1時間雨量	八開	75			本州上を東進した低気圧に湿った空気が流れ込んだ影響で、県西部を中心に短時間に激しい雨が降り、多くの住家の浸水被害を出した。
平成	1	1989	9	1	9	7	総雨量	樽見	944mm				1時間雨量	東海	59			台風19号からの暖気の流入で秋雨前線が活発化しながら近づき、県下全域で大雨が降り、とくに尾張、知多地方で強い雨に伴う浸水被害が多く発生した。
平成	2	1990	9	17	9	18	総雨量	関ヶ原	417mm	瞬間風速28.8m (岐阜)			1時間雨量					本州上に停滞した秋雨前線の活動が活発となったところから、台風が県内を縦断し、大雨に続いて各地で風雨が強まった。牧田川と杭瀬川の合流地点で堤防が破堤し、養老町や大垣市で浸水被害が出た。死傷者2人、家屋の全半壊20戸、浸水2,036戸。
		1990	9	19	9	20												和歌山県白浜町に上陸し岐阜県北部へ進んだ台風で県内は暴風雨となり、県西部で床上浸水30棟、床下浸水1,033棟の被害となった。人的被害はなかった。
		1990	11	30	12	1												沖繩の東から銚子沖に急進した台風に伴い、南岸の秋雨前線が活発化した。太平洋側各地で記録的な大雨となり、名古屋市や春日井市で床上浸水1,846棟、床下浸水7,351棟などの被害が出た。
平成	3	1991	9	18	9	19	2日間雨量	多治見	239mm				1時間雨量	東海	55			上空の寒気の影響で大気が不安定となり大雨が降った。岐阜市や豊田では竜巻も発生し、家屋の全半壊55戸、浸水1,932戸の被害が出た。
平成	4	1992	8	11	8	13	時間雨量	多治見	54mm									上空に寒気を伴った低気圧が停滞した影響で、激しい雷雨となり、名古屋市はじめ36市町で床上浸水、床下浸水計6,048棟が発生した。
平成	6	1994	9	17	9	18							3時間雨量	東海	144			和歌山県西部に上陸した台風8号により激しい雨となり、続いて上陸した台風7号が愛知県西方を通ったことから暴風雨となった。名古屋市と一宮市で死者3人、県西部地方を中心に重傷者151人などの被害が出た。
平成	10	1998	9	21	9	23							1時間雨量	蟹江	29	最大風速42.6m		秋雨中の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。
平成	12	2000	9	11	9	12	総雨量	岐阜	265mm				1時間雨量	東海	114			秋雨中の停滞前線に台風第14号の影響が加わって、非常に激しい雨が降り、死者7人、重傷者107人の被害を出した。
平成	16	2004	9	4	9	5							1時間雨量	名古屋	93			日本海の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。
		2004	10	19	10	21							1時間雨量	名古屋	53			日本海の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。
平成	20	2008	8	28	8	30												名古屋市内で住家の損壊8棟、床上浸水1,175棟、床下浸水9,929棟の被害が出た。一宮市では軽傷者1人もあった。
平成	21	2009	10	8			総雨量	東海	206mm				1時間雨量	東海	84			強い勢力を維持したまま多岐半島に上陸した台風の影響で、非常に強い風が吹いた。重傷者19人、住家の全半壊47棟、一部破損2,092棟、床上浸水246棟、床下浸水1,235棟の被害となった。

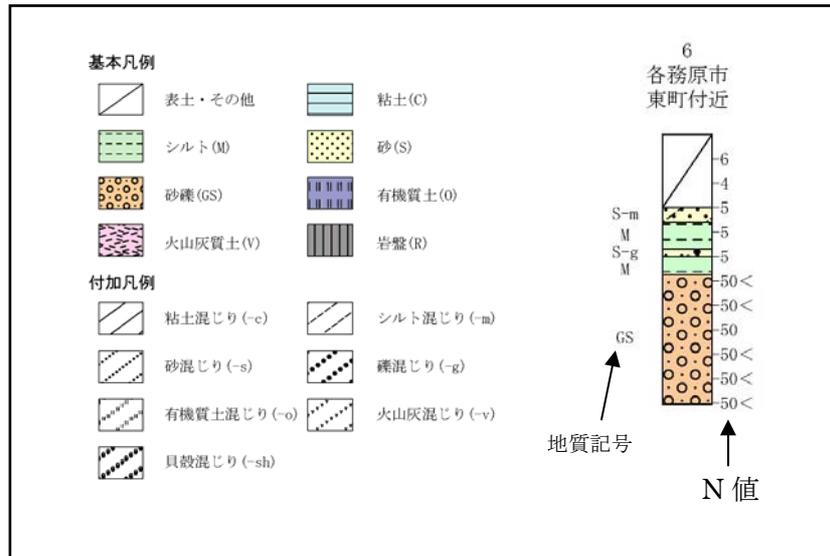
巻末資料

既存資料におけるボーリング資料

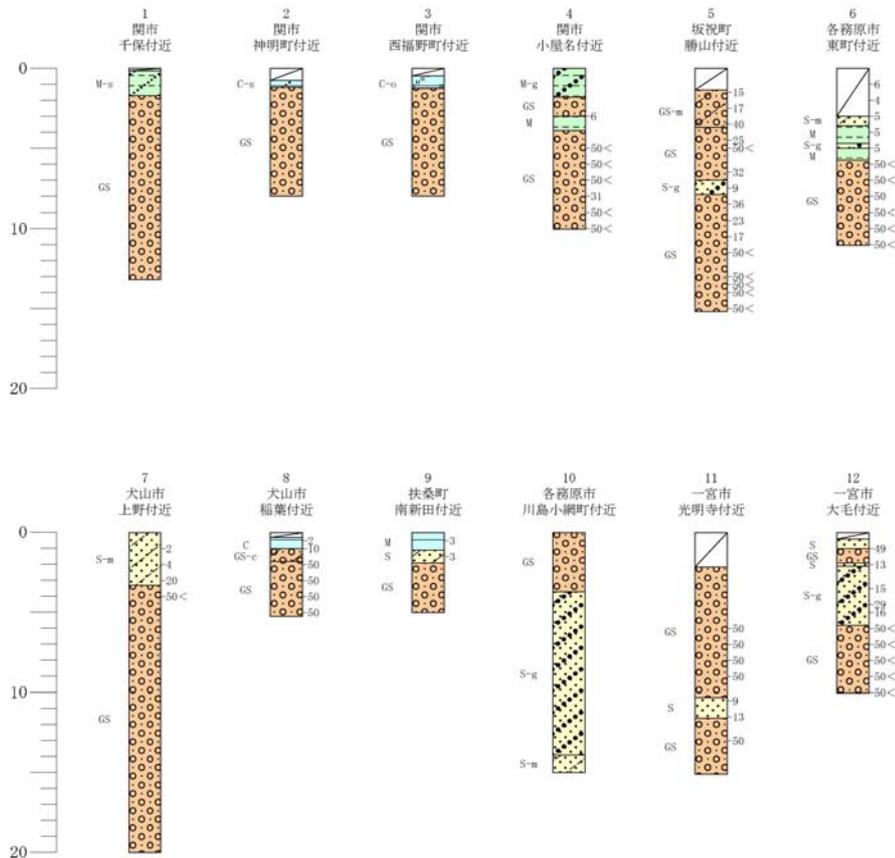
既存資料におけるボーリング調査地点位置図



## ボーリング柱状図凡例



## ボーリング柱状図





土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書

**岐阜**

5万分の1

平成24年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省  
ホームページからご利用いただけます。